

裏切りの代紋（中編1 娼婦編）

肉の卒業試験

天上から吊された蛍光灯が、コンクリートを打ちっ放しにした床面をわびしく照らしていた。薄暗い照明に照らされる地下室に設けられた女体調教室の中で、コンクリートの湿った埃っぽい臭いが立ち籠もる冷たい床の上に、晴江たち三人の女が全裸で正座させられていた。女達の目の前には、3脚のパイプ椅子が横一列に置かれており、周囲を剛沢や黄原や大亜門戸会の男達や剛沢の愛人達がこれから一体何が始まるのかと、興味深げに取り囲んでいた。椅子の背後に立った銀子が、椅子の背に手を掛けて正面に正座する女達に向かって前屈みになりながら、不安げに項垂れる女達に告げた。

「いよいよ今週末から、客の相手をして貰うことが決まったわ！もうお客の予約も受け付けた事だし、後には引けないからそのつもりでいてね！」

恐れていたことではあったが、とうとう自分たちも売春婦に身を落とし、この身を金で切り売りする事になったのだと、思うと胸が締め付けられるような惨めな気持ちが込み上げて来るのだった。

大亜門戸会の廻らした陰険な陰謀の前で、圧倒的に優位であったはずの目高組が呆気なく崩壊したあの夜、敵方の男達の好奇心な視線に晒される前で、素っ裸に剥がれて、全身をそして女のもっともか弱い部分を何度も鞭打たれると言う、羞恥と激痛に頭が混乱する中で、親分の命を救うために無我夢中となり、憎みても余り在る剛沢から咄嗟的に借金をしてしまい、その返済のために娼婦となることを強制された事を思い出した。

それ以来、陽も差さない牢舎に幽閉され、昼夜の感覚も得ることが出来ないまま、一分一秒も身体を休める機会も与えられず激烈な性器の開発を強制され、その激しい人体改造の筆舌し難い苦痛と性的刺激に、常に頭は懊悩したままで、反発する気力さえ湧く暇もなく銀子の繰り出す女体責めの嵐の中に藻掻き苦しむ毎日だった。

あれ以来一ヶ月経過したのか、二ヶ月経過したのか、あるいはそれ以上の期間であったのかすら、茫洋とした記憶のまま思い出すことは出来なかった。

そして、何よりも無念なのは、その間に外部から自分達を救い出そうとする動きが見られないことだった。

目高組本体は陰険な剛沢の陰謀により解体されてしまったが、目高組を支援するはずの外部組織は多数存在するはずで在り、それらに救出される事を信じてこれまでジリジリする思いで日々の屈辱を堪え忍んで来たのであった。それが本日まで何の動きも無いとは！
女達は受け入れがたい事実に目に涙を浮かべながら、首を振った。

女達が悲惨な回想に項垂れる間も、銀子はしゃべり続けていた。

「そこで、貴方たちがお客の前に出しても恥ずかしく無いような性技を持った売春婦になったか、これから試験をするわ！もし試験に落第したら、もう時間も無い事だし、徹夜してでも補講するからその気でいてね！」

元はヤクザの大組織の大姐御や組織の幹部として君臨していた、あるいは親分の愛娘として周囲の子分連中にかしずかれ何不自由ない生活を送っていた女達は、かつての気位を完全に喪失し、過酷な運命の変転に翻弄されるがまま、かつての一介の賭場の壺振り役としてぞんざいに扱っていた女から投げ付けられた残酷な宣言に肩を振るわせて涙を啜り上げるのであった。

そんな、すっかり従順となり、互いに肩を寄せ合い項垂れたまま女々しく啜り泣く元の上司の女達に銀子がピシッと云った。

「何度も言っているように、貴方たちの抱えている莫大な金額の借金を返済するためには、そこいらのサラリーマンを相手にする街で遊んでる小娘がアルバイト感覚でやっているような軽い売春では、一生掛かっても返済出来ないのよ！」

女達は項垂れながら、言葉も返せず銀子の話を聞いていた。

「でも、世の中には、とんでも無い大金持ちが居て、金に証せて女を抱いて来た好色家は、いっぱい居るのよ！ だから彼らの相手をすれば借金なんて立ち所に返済出来るんだから！・・・ところが、彼らは大抵の美女との大抵のセックスは経験して来ているから、彼らに気に入られるためには、彼らのような性のベテランが満足するような技能を持たなければならないのよ！そのため今まで血を吐く様な苦しい修行をして来たんでしょ？」

並んで見ていたチンピラの誰かが小声で、「吐いたのは血じゃなくてマ■■■■汁を噴き出す様な修行じゃなかったのか？」と、呟いたので、周囲にいた男達も女達の肉体調教の場面を思い出す様にクスクスと笑った。

そんな男達の揶揄も気にせず、銀子が続けた。

「今日はその成果を皆の前で見せるのよ！・・・どんなに辛い理不尽な要求をされてもお金の

ためと思って我慢するのよ！」

これから課される羞恥と屈辱の責めに怯えるかのように、下を向く女達に諭すように話した。

「先ず、売春婦の性技として最も基本的なフェラチオの試験から始めるわ！」

もっとも、此処に集まっている大亜門戸会のヘナチョコ男達では、今の大姐達にかかったらあつという間に絞り出されてしまって、卒業試験になりそうもないから、試験官としては、その道のベテランの剛沢親分と黄原さんが相手をして・・・」

と、周囲を取り囲む男達を無視する様に剛沢と黄原の方を向いて告げた。

男達は銀子に馬鹿にされたようで少しムッとしたが、冷静に考えてみれば、確かに銀子の言う通り、連日の地獄の特訓の成果としてすっかり上手になった女達の口技に掛かれば、自分たちではあつという間に逝かされてしまう事は明白であり、諦めた表情を浮かべた。

銀子は、元目高組の女達の肉体改造に入る時、近所の公園をジョギングしている様な何処にでもいる市民ランナーをオリンピックのマラソンランナーに仕上げるみたいだと言っていたが、僅かの期間で厳しく女達のその部分を鍛え上げることに成功し、最早自分達がコマして来た様な普通の女とはソコの部分の絞め具合もテクニックも比較にならない程、進化している事を認めるのであった。

男達の中から剛沢と黄原が3人の女達の前に進み出た。

「俺たちが試験官に成るのは良いが、女3人で男は俺たち2人で、どうするんだ？」

剛沢が銀子に聞いた。

「心配しなくても、お二人さんにも負けないぐらいの性の達人を招待してあるわよ。」

銀子が部屋の外に呼びかけると、仕切りの扉がサッと開いて、身長は180センチ近くはあろうかという長身の痩せた男がスッと現れた。

歳の頃は40才になるかならないかだろう。細身の体に高級ブランドのスーツを纏い、綺麗に理髪された髪を端正に梳かし分け、頬骨の浮かぶ痩せぎすの色白な顔に気障な銀のメタルフレームの眼鏡を掛けていた。

革靴の靴底をコンクリートの床に反響させ、自分たちの方に歩み寄って来る不気味な雰囲気、に晴江が思わず振り返った。

そして、その男をチラッと見た瞬間、引き攣った悲鳴のような声を上げ驚愕の表情を浮かべた。

「あなたは、沢田さん！」

晴江たちは平然と自分たちの方に向かってくる沢田を見て、さっと血が引くように体が冷たくなって行くのを感じた。

女達は旧来から顔見知りの沢田に自分たちの全裸姿を直視される恥ずかしさに身を振った。

「これは、これは、目高組の皆さん、変な所でお会いしますが、今まで色々お世話になりましたね。・・・かねがね大姐の和服姿を見る度に、何て着物が良く似合う美しい人だろうと思っていたんですが、こうして全裸の大姐の姿も見せて頂くと、着物姿とは、また違った美しさに見惚れてしまいますね・・・、それにお竜姐さんや暁美お嬢ちゃんも実に綺麗だ。」

沢田が惚けたようにニヤけた笑みを浮かべながら、眼鏡の奥の目にイヤらしい光りを浮かべて羞恥に身悶える女達の裸身を嘗め回す様に眺めた。

「実は、本日3人の肉体改造の成果を試験して欲しいと、そこの銀子さんから頼まれてましてね・・・」

沢田が歩み寄りながら、いかにも好色な目付きで全裸で正座する女達にじっくり視線を這わせながら喋った。

「銀子さん、久しぶり。・・・暫く会わない内に、また女っぷりが、一段と上がったね！」などと褒め言葉を並べながら、気障たらしく両手で銀子を抱きしめ頬ずりした。

沢田と呼ばれた男は、闇の貸金業を営んでいて、これまで目高組に組の運転資金を貸し付けていたのだった。

また、目高組も沢田から借金している人からの取立に組員を代行させたりしており、沢田が金をそして目高組が暴力を提供すると云う、裏の世界で持ちつ持たれつの関係であったのだった。

「何だ、沢田さんだったのか？」

啞然とした表情を浮かべる晴江たちを見ながら剛沢が呆れたような声を出した。

剛沢は、沢田を見詰めて何が起こったか解らないかのように呆然としている晴江達に説明するように話した。

「この沢田さんはな、大亜門戸会にも資金を融通していたんだ。」

その瞬間、晴江達は剛沢の言葉に驚きの表情を浮かべた。

「そうそう、」

沢田が、肯きながら説明を引き継いだ。

「抗争しているどちらかの組に金を貸し付けたままでは、その組が敗れて組が潰れてしまえば借金を取りっぱぐれる恐れがありますからね・・・だから私の流儀では、どちらが勝つか判

らない場合は、リスクを避けるために、双方の組に金を注ぎ込むことにしているんですよ。もともと、長期戦になり両方の組が、じり貧で共倒れするんじゃ無いかと心配しましたが、今回は大亜門戸会さんが、あっさり目高組を丸呑みにしてくれたお陰で、債権もそのまま保留され、剛沢さんのご厚意で、利息も付けて返して貰えたので安心しましたよ・・・」

「全く！金を持っている男には敵わないぜ！・・・結局俺たちは、この因業な金貸しの掌の上で喧嘩していたって訳だ・・・」

剛沢が呆れたような笑い声を上げた。

剛沢の自嘲的な笑いにも、気を留める様子も無く、

「解散した目高組には、最早融資を受けていた資金の返済は当然出来ないーと、世間の人は思い込むでしょう。そこで担保流れとして組事務所のビルや諸々の資産を全部差し押さえたーと言えば、世間では誰も訝る人はいないでしょう。・・・借金の証書を少し書き換えて負債額を嵩上げて、不動産や資産の評価額を小さくしておけば、借金の返済分として丸呑み出来る。」

啞然とした表情を浮かべる晴江達に目高組解散後の顛末を説明した。

「それを沢田さんの傘下の複数の会社間で転売した事にしてから、土地建物を大亜門戸会が買い上げたと言う筋書きさ。まともな書類も残っているし、これなら誰も今回の抗争の結果として大亜門戸会が目高組から強奪したと思わないだろう。

家の中に残っていた、ダイヤの指輪の様な宝石類や金の延板みたいな貴金属や豪華な衣類なんかは、今回の沢田さんの手数料代わりの取り分って訳だ！捨て値で叩き売っても、これだけで貸していた金額は充分回収出来たろう・・・」

と、剛沢が話の続きを引き取った。

「その上、今度はこの美人の3人さんも体を切り売りして金を稼いでくれる訳ですから、大亜門戸会さんも益々発展しそうだし、ウチもまた儲けさせて貰えそうですよ・・・」

と、極めて事務的に言葉を継いだ。

「全く、沢田さんに見れば、濡れ手に粟のボロ儲けだぜ！」

剛沢が横目で沢田の方を見ながら呆れた様に口にして、

「まあ、お前達もこれで帰る家も身に着ける物も一切切叩き売られて、文字どおり裸一貫になったのだから、当分の間は何も考えずに売春業に精を出して働くんだな！」

項垂れる目高組の女達に、だめ押しする様に大きな声を上げた。

沢田は真ん中の椅子の前に立つと、上着を脱いで椅子の背に掛けると、周囲の目も気にならないかのように着ている物を次々と脱ぎ始めた。

銀子が甲斐甲斐しく沢田の脱いだ衣類を受け取ると畳んで、脱衣籠に収めた。

着痩せして見えるタイプの男であり、その衣類の下からは意外にも筋肉質な引き締まった体が現れた。

ボディビルででも鍛えたのだろうか、その逆三角形の厚い胸板をした筋の割れた肉体に周囲の男達が目を瞠った。

同席していた剛沢の愛人達も、まるでミケランジェロが彫刻した芸術作品か、あるいは古代ギリシャの遺跡から出土した大理石に彫られた男神像を連想させるような見事な裸身に思わず熱っばい視線を注ぎ、その逞しい筋肉質の裸身に目を奪われた。

自分の愛人達が沢田の筋肉美にウツトリと見とれているのが気に障ったのか、どうせこんな筋肉は観賞用だけで、喧嘩の役には立たないと、憮然として表情を浮かべた。

「体脂肪率7%。私は無駄な物は持たない性格でしてね、無駄な脂肪は身に付けない事にしているのですよ。」

平然と言うと、躊躇うことなく、最後に残ったブリーフパンツも取り去り一糸纏わぬ裸を晒した。

腰の物を脱ぐ際に、股の間からデロリと太く長い陰肉の塊が垂れ下がった。

色白の身体にそぐわない黒ずんだ巨大な陰茎に取り囲む男達はウツと息を呑み、女達から再び熱い溜息が漏れた。

そんな周囲の様子などまるで気にならない様に、全裸のままどっかりと椅子に腰掛けた。

剛沢も黄原も沢田に圧倒されたように、慌てて服を脱ぎ始めた。

そして、全裸となると、沢田を挟む様に左右の椅子の上に腰を下ろした。

チラッと沢田の股間に目をやった剛沢が、自分の物にも負けないような、その繊細な容姿に似合わない様な逞しい物を間近に見て驚いた声を上げた。

「こう見えても、これまで色々女とは遊んで来てましてね。・・・黄原さんには、申し訳ないけど、その昔、銀子さんにもお相手して貰ったことも在るんですよ・・・」

と、表情を窺うようにチラッと横顔をのぞき見た。

「昔の事は昔の事さ。・・・今は、銀子は俺一人の物だ。」

黄原が口の端に不敵な笑みを浮かべて応えた。

「それじゃ準備も出来た様だし、早速フェラチオの試験よ！」

銀子が女達を促した。

一列に並べられた椅子の前に、剛沢にはお竜が、沢田には晴江が、黄原には暁美が対峙していた。

銀子に急き立てられ女達は、目の前のパイプ椅子に腰を下ろして、股間をこれ見よがしに大きく開く男達の股の間に怖ず怖ずと顔を寄せて行った。

「結局、今日は、俺たちは女の性能を調べるための測定器代わりか？」

剛沢がお竜のしなやかな指先で肉茎を愛撫されながら可笑しそうに笑った。

「つべこべ言わず、測定装置は測定装置らしく正しく性能を評価してね・・・」

と、言いながら男達にクリップボードとボールペンを渡した。クリップボードには記録すべき項目を表に列記した用紙が留められていた。

銀子が記録用紙を男達に配布する間にも、良く訓練された女達の指先で男の神経が集中する部分が愛撫され、三人の肉塊が見る見る隆起を始めていた。

「大分、お目覚めのようなね？・・・さあ！後は貴女たちのお口で完全に起き上がらせるのよ！」

男達の持ち物が、元目高組の女達の指先の愛撫によって反応し始めた様子に満足した様に命じた。

銀子に督促されて、全てを諦めたように女達が椅子に腰掛けた憎むべき男達の股間に顔を寄せて行った。

普段銀子達から受ける強制的な調教ではなく、衆人環視の中で自発的に、これまで教え込まれた技術を駆使して、剛沢達が望むように肉体を男達に切り売りする娼婦に完全に身を落とすために、こちらから積極的に男達の肉欲を掻き立てなければならぬと思うと、耐えきれない気持ちになり心が重く沈んだ。

自分達を破滅させた憎い男達の劣情を自ら掻き揚げなければならぬ位なら、いっそ、この男達から無理矢理強姦された方が楽では無いかと思うくらいであった。

これから自分達が相手にしなければならない男達の股間を改めて間近で見ると、いずれの男もこれまで何人もの女を相手にして来たような陰水焼けした濃い色をした逞しい肉茎を持っていた。

銀子がグズグズするなと言うように声を掛けた。

銀子に促されて、女達は獣的な男の臭いを立ち上らせる太い肉塊をしなやかな指先でさすり、その先端に柔らかく唇を触れさせ始めた。

口唇を使って全体を愛撫した後、銀子に伝授された舌技を駆使して、舌の先端や全体を使用して、何度も何度も丁寧に亀頭部を愛撫し、裏筋を嘗め上げ、鈴口を舌先で刺激した。

そして男達の肉茎が充分猛々しく屹立し始めたことを確認すると、唇を開いて男達の股間に顔を埋めた。

改めて口腔内に野獣の様な臭いが拡がる気がした。

銀子がこれまでの調教の成果を確認するように、男達の股間で隠微に顔を動かす女達の動きを身を乗り出して見詰めた。

剛沢や黄原は女達の繰り出す巧みな技にホウッと言う溜息を上げた。

ここ何日か女達と接していない間に、また一段と技巧が向上していると感じたのだった。

そして、始めて女達に自分の物を啜えさせた時の拙劣な口技の記憶が蘇った。

昼夜を別たぬ過酷な調教の結果とは言え、短時日の内に良く此処まで進歩したものだど、感慨に耽った。

女達は、そんな男達を一層の高みに導くべく、ねっとりとした目で男達の表情を下から覗いながら、何度も頬を膨らませると強く窄ませて男のモノを吸い上げ、頭を前後に揺り動かしながら、奥へ奥へと誘って行った。

亀頭の最も太くなる部分まで口蓋の奥深くまで送り込むと、普段食べ物を嚥下するための喉の筋肉を使って肉塊を愛撫した。

その余りの快感に思わず女達の喉の奥に放出してしまいそうになるのを、最後の所でグッと堪えるのだった。

そんな並の娼婦では持っていないような口腔全体を使ったテクニックに、剛沢達は感心したように肯いた。

女達は、今は必死となって顔全体を赤く染め、頬を膨らませたり窄めてして、喉の筋肉を蠢かせながら男達の陰肉を吸い上げていた。

必死に過酷な運動を繰り返す女達の荒い鼻息が、男達の陰毛を擦った。

男達はともすれば自失してしまいそうになるのを防ぐように、女達に啜えさせながら、冷静さを維持するため極めて事務的に無言のまま検査項目を読み、用紙にチェックを入れていった。

一人10分ずつしゃぶらせると、銀子はストップを掛けて、女達を交代させた。

こうして10分ずつ、順番に3人の女がその技術を審査された。

あくまでも女が身に付けた技術を評価することが目的なので、男達が女の裸身に手を出す事もなく、極めて事務的にテストは進められた。

「流石は、銀子さんが鍛えただけあって、素晴らしい舌技でしたよ。危なく口の中に発射してしまうところでしたよ。」

銀子にチェックシートを返しながらか、始めて沢田が感嘆したような声を発し、女達の技巧を褒めた。

「こんな無粋な審査では無くて、後で女達を好きなだけ抱かせてやるから、いくらでも口の中に発射して、たっぷり金満家のエキスを飲ませてやってくれ。」

剛沢がニヤニヤしながら沢田に言った。

「その代わり、今月の利息はチャラという事にしておいてくれよ・・・」

「まあ、考えておきましょう・・・」

事務的な冷たい顔に戻って沢田が応えた。

次に、銀子は三下の男達を使って床の上にマットを敷かせた。

その一面に敷かれたマットに次は何が始まるのかと興味深げに見物の人々を取り囲んだ。

銀子は、その上に女達を上がらせると、

「次は、貴方たちがどれくらい男達の目を楽しませることが出来るかの試験よ！」

と、女達にこれからオナニーの実演をしると、命ずるのであった。

「男の人は、いきなり女を抱くよりも、女の自慰する姿を見たり、レズビアンに耽る姿を見た方が、興奮して、アソコに血が集中して、その後の快感もグッと増すものなのよ！さあ、これから貴方たちの恥ずかしい指の技を見せて、試験官に採点して貰いなさい。それが終わったら次はレズの実演よ！」

周囲を取り囲み見守る男女の前で、オナニーの実演を迫られて、青ざめ、次に羞恥に顔を赤らめる女達であったが、逆らう術も無く、目を血走らせて見詰める男女の前にマットの上に尻を付けた姿勢で怖ず怖ずと股間を開いて行くのであった。

目を皿の様にして見詰める男達が、開き切った股間の奥のたたずまいを口々に評価し合った。銀子の目配せを受けて女達は諦めたように、羞恥に震える手を自分の秘密の花園に持って行った。

そして、その白い端正な指先で、生い茂った黒々とした艶のある繁みを左右に押し上げ、その奥に露出した桜色の柔らかな襞を掻き分けると、その秘奥の濃いピンク色をした構造を少

しずつ男達の目に曝し始めた。

銀子の調教を手伝って暴力的にこじ開け何度も見慣れた筈の部分であったが、羞恥に身悶える女達自らの手で押し上げた仄暗く映る女の命の宿る場所を目の当たりにして、新鮮な興奮に男達の生唾を呑み込む音が地下室に響いた。

「さあ、指を使って嫌らしくオコを撫で回して、エッチに腰を振るのよ！」

銀子の命令に促されて、女達は指を自分の秘奥に沿って這わせ、秘所の頂点に在る木の芽を撫でた。

股間に這わせる指の動きが次第に激しくなり、つられたように揺れる乳房の頂点で乳首が固くなっていく様子が分かった。

女達は、無意識の内に片方の手で股間をまさぐりながら、もう片方の手で乳房を揉み始めた。見物の男達がグッと身を乗り出してその様子を観察した。

女達は憎い敵方の男達から浅ましい姿を注視される羞恥や屈辱を自らの指先で紡ぎ出す快感に埋没させて没我の境地に逃れようとするかのように今や積極的に指を使い喘ぎ声を漏らし始めていた。

剛沢達は、醒めた表情でクリップボードに止められた試験項目に記入して行った。

何時しか女達は強制されずとも、腰を淫らに振り、甘い喘ぎ声を上げ始めていた。

秘奥を撫で回す指の動きに伴いピチャピチャという肉擦れの音も響き始めた。

「だいぶ気分も乗ってきたようね？それじゃ次は、舌と指を使って互いに慰めあうのよ！」

銀子に命じられて、女達は指では得られなかった肉体の疼きの癒しを求めるように、マット上に互いに寄り添い、卍巴の姿勢となって互いの白い体に口付けし合い、柔らかい肌を撫で合った。

眼下で始められたレズの艶技を男達は好色な笑みを浮かべて見詰め続けた。

オナニーにより火を点され、次第に燃え上がり始めた肉欲の疼きを互いに慰め合うかのように、誰に命じられる事も無く女達は互いの柔肌を撫で合い、唇を這わせ合った。

燃え上がり始めた肉欲に女達の肌が赤く染まり始めていた。

突然晴江がお竜の股間を大きく押し広げると、その中心に唇を押し付けた。

突然の晴江の行為にビクッと体を震わせたお竜であったが、晴江が音を立てて我が肉体から溢れ始めた蜜を吸い始めたことに煽られたように、隣会う暁美の股間に自分の顔を埋めた。

そして、お竜の口技に舞い上げられた暁美は、我を忘れたように実の母親の成熟した女芯に

舌を匍わせた。

目の前で繰り広げられる女同士の真剣な愛の交歓に、見物の男女は没頭した。

黄原達は相変わらず醒めた目で、検査用紙への記入を進めていた。

「それじゃ次の試験に入るわよ！」

女同士の性交で頂点に達する前に、見計らったように銀子がストップを掛けた。

「貴方たち、女同士の愛し方では、焦れたくてイクにイケないんでしょう？ 早くそこに男のモノをぶち込んで欲しいんでしょう？」

と、意地悪く笑った。

女達も荒い息を吐きながら、体内から込み上げるジリジリとした焦燥感に苛まれているところであった。

「それじゃ、望みを叶えさせて上げるわ。お待ちどう様。その部分に男の物を啜えるのよ。」

銀子は女達をマットの上に犬のように四つん這いにさせた。

「女の方から腰を動かして、迎え入れさせるから男達はひざまず 跪いた姿勢のまま動かないでね。女達が試験棒を自力で、あそこに入れた後も、測定装置の方からピストン運動しないでね。女達は腰を使って、今まで私が教えた技術を駆使して、その筋肉で中に啜え込んだモノを締め上げ、しごき上げるのよ！」

マットの上に膝を着いた男達の方に尻を向ける格好で四つん這いの配置となった。

女達は股間を十分に広げて、男達に向かって高く尻をもたげた。

顔をマットに押し付けたまま、両手を使って尻たぶを広げ、その奥に在る桃の花と菊の蕾を男達の目にマザマザと晒した。

先程から続く、オナニーとレズビアンにより、女の中心部が溢れ出た樹液で艶々と光っていた。

男達によって暴力的に股間の毛を奪い取られてから、ようやく元の毛量に戻りつつある秘部を埋める黒い飾り毛の間から女達の良く熟れた紅く充血した奥のたたずまいが目の前に露わになっていた。

女のしなやかな白い指先で押し広げられ掻き分けられた襞の奥に赤く充血した秘孔が垣間見え、そこから泉の様に愛液が沸き上がって来る様子がまざまざと映った。

女達は自分の恥ずかしい部分を男達の目の前に丸出しにする羞恥に身悶えながらも、腰を跪く男達に向かってグイッと突き出し、しっとり潤った練り絹のような股間の柔肉を使って

男達が突き出す肉棒を優しく愛撫するように摩擦し始めた。

高く尻を擡げた姿勢の女達は、試験官である男達に自分達の嫌らしい秘部をわざと見せ付けるかのように柔らかい秘肉の狭間を男の肉塊に押し付け、淫猥に尻を振り立て、びっしょりと潤った秘肉の狭間で男の肉塊を擦り上げ続けた。

暁美に男のモノを摩擦される沢田は初めて目にする、まるで熟れた桃の果実の様に若々しい良く張った双臀の甘美な肉の感触に感激し、腰を上下する度に見え隠れする女の中心部分とその上でピクピクと蠢く隠微な菊花のような部分に目を奪われた。

その隣ではお竜が顔を真っ赤に染めて荒い息を吐きながら黄原のモノに奉仕していた。

股間の柔肉だけを使って男のモノを転がすように摩擦し、愛撫し続ける女達の秘所が卑猥に蠢く様子が男達の目に映った。

女達は、男達の攻め道具を早く膨張させて体内に迎え入れるべく、全身を朱に染めて汗を浮かべながら、息を早め夢中で腰を蠢かせた。

何時の間にか十分な硬度を持ち屹立し始めたそれを腰を後ろに突き出すようにしてズブズブと自らの肉の祠に収めていった。

銀子の手により良く開発されたその部分はまるで軟体動物の口腔の様に柔らかく膨らみ高熱を帯びて膨張した肉片を咀嚼するように内部に迎え入れた。

亀頭部分を半分程体内に収めたまま、女達は淫靡に腰をグラインドさせた。

いつしか粘っこい愛液が次々と肉洞の周囲から分泌され始め、男の肉体との接点を艶々と反射させ、男の道具の先端を潤滑し始めた。

山百合の匂いにも似た、雌の花蜜の匂いが立ち昇り始め、男達の鼻をついた。

その股間のネットリと潤んだ柔らかな褻による愛撫に励まされて男達の肉棒は新たな性感への期待に大きく膨張し、ツンと硬く前に突き出した。

男達の肉塊が充分硬く大きく成長したのを確認すると、女達は自ら腰をグイッと突き出すと、屹立する肉棒を残らず自ら華洞に迎え入れたのであった。

男達のいずれも人並み外れた巨塊が内部に収まった時、女達の口からウッと溜息が漏れ、腰がビクッと収縮した。

男達の目には、自分達の野太い怒張が、秘められた花園の柔肉を左右に押し広げ、ゆっくりと内部に収められて行く様子がありありと映った。

男達の怒張が良く潤った華洞に根本まで没した事を確認した女達は、銀子に仕込まれたように、その筋肉を使って内部を占領する肉棒を締め上げ、しごき始めるのだった。

逞しい男を秘奥に啜え、腰を前後に動かし続ける間に、次第に堪えられないように女達が喘ぎ声を上げ始めた。

女達の方から一方的なピストン運動で責め立てられるだけで、じっと膝立ちしている男達に、再び銀子が事務的に新しいチェックシートを配った。

女達の内部の気持ち良さや技巧にウツトリとしたような表情を浮かべたが、流石に性の猛者達は、それだけでは自失することは無く、チェックシートに記載された内容を読み極めて事務的に女達の技術をチェックして行った。

10分間の時間を区切って、銀子が女達に別の男と交代するよう指示した。

男達は醒めた様子で、極めて事務的に女達の機能を評価していったが、生身の肉棒を敏感な箇所へ啜る女達は、熱く上気した体に汗を浮かべ息が弾んでいた。

一通り3人の後背位での審査が終わると、次に、男達をマットに仰向けに寝かせて、女達に騎乗位で跨ぐように指示した。

銀子の指示により、男達は女の体に何も手を触れることなく、魚河岸に並べられた鯖のようにマットの上に横たわった。

女達は男達の股間の上で股を拵げてゆっくりと腰を下ろすと、豊かに潤ったままの腰を器用に動かして、秘所を男のモノに擦りつけて刺激し、再び隆起を始めた男の肉棒を手を使わずに腰の動きだけで掬い上げ、再び体内に収めた。

下になった男達がじっと横になったまま、ただ女達だけが腰を上下に揺すり、男の物をしごき上げた。

上下に激しく動く体の動きに連れて、仰向けに寝そべる男達の目の上で、たわわな乳房もゆさゆさと上下に揺れている様子が映った。

普通なら下に横たわる男達から、乳房や敏感な箇所を揉み上げ、上になった女の性感を掻き揚げる所であるが、何も手出しをされないことが、逆に中途半端に快感を昂じさせるのか、もどかしそうに女達が体を激しく動かしながら鼻を鳴らした。

この光景に見守る周囲の男女から生唾を呑み込む音が呟した。

今や自制の範囲を超えて性感が高まり、イキそうになるのを必死に堪えて、激しく息を吐きながら荒々しく腰を振り立てる女達を、男達はチェックシートに記入しながら、下から醒めた目付きで眺めていた。

「どうだった？ご感想は？」

銀子が口の端に笑みを浮かべて、チェックシートを回収しながら聞いた。

「ああ、凄く良かったよ。良く鍛えられた肉壺だ。俺たちじゃなければ、並の男だったら、とっくにイッてたろう・・・」

剛沢がチェックシートを返しながら応えた。

その足元には、長時間男の相手をして、最早股間の恥ずかしい部分を隠すことも忘れたかの様に感極まって、肩で息を吐きながら、しどけなく秘所を晒してマットの上に倒れ伏す女達がいた。

「次は皮膚やアノ部分の感触や感度の審査よ。お待ち遠様、男達は好きに触って良いわよ！今度は逆に女達はマグロみたいに寝たままで、男に何処を触られても、くじられても体を動かさちゃダメよ！」と、新しいチェックシートを配りながら言った。

男達は審査項目を見ながら、長時間男を相手に持てる技術を繰り出して疲れ果てたのか、立ち上がる事も出来ないように、全身に汗を滲ませてマットの上に横たわる裸の女達に筋肉質の体を密着させて行った。

そして、手指を使って、そのしっとりとした皮膚感覚を確かめたり、牝の臭いを立ち上らせ始めた秘奥のルビーのような蕾を摘んでその感度を確認した。

「おやおや・・・そんなに良かったんですか？こんなにビッショリ濡れているじゃないですか。」

沢田は、その濡れた花心の周囲に指を存分に徘徊させると、指先にその部分に染み出した透明の粘液を掬い取り、その指で晴江の並の女性より大きな陰核の周囲を撫で回した。

その粘っこい指先で鋭敏な粘膜の周りを撫で回される鋭い感触に、晴江が必死に声をかみ殺して下半身をブルブル震わせた。

「晴江さんのクリちゃんは普通の女の人より大きい様ですね・・・さすが女親分の貫禄だ！」と、背後から晴江の耳元で囁くように呟き、晴江の更なる羞恥を煽った。

沢田から自分に恥ずかしい部分の形状を指摘され、淫靡な指使いで刺激され、顔を上気させてイヤイヤと首を振った。

「それに、大きいだけではなくて、感度も申し分無いようですね・・・ここが大きい女は、その分感度は低下するものだが、そんな事は無いようですね・・・これも銀子さんの調教の成果ですかね？」

と、指先を器用に使って陰核の根元の包皮を捲り上げると、再び指の腹にたっぷり愛液を掬い取り、それでピクピクと蠢く陰核を優しく擦り上げながら、感度の良さを確認するのであった。

沢田が横臥位にした晴江に背後から体を密着させ、両手を前にまわして抱きながら、その慣れた指先で晴江の女を開き、華洞に指を差し入れた。

自分の組の協力者だと信じていた沢田にこの身を弄ばれることが、堪らなく悔しく、沢田の指で弄られながら涙を滴らせる晴江であったが、沢田の慣れた指先は確実に晴江の感度を掻き立てていった。

いつしか、自分の手技の前に鋭敏に反応して、唇を半開きにさせて熱い息を吐きながら、ピクピクと体を痙攣させ始めた晴江の感度の良さに目を瞠りながら、

「さあ、次は口を吸って上げましょう・・・」と、晴江の細面の頬に手を添えて自分の方に顔を向けさせた。

沢田の巧妙な技巧の前に没我の状態に陥っていた晴江は、沢田が唇を重ねて来ると無抵抗にそれを受け止めた。

すっかり従順になった晴江に感激したように沢田は舌先で晴江の柔らかな唇を押し開き、晴江の口内に差し入れた。

沢田の女泣かせの精緻な技術の前に煽り立てられ、何もかも判らなくなっていた晴江は、情感の命じるままに舌を迎え入れ、二人の舌と舌が絡まり、唾液が混じりあった。

「そんなに良いんですか？今のこの状態を奈和親分にお見せしたいもんですね・・・」と、背後から優しく耳の裏に舌を這わせながら、沢田が耳元で囁いた。

「ああー！おっしゃらないで・・・」

沢田の技術の前に懊悩の極みにある晴江が涙を浮かべて呟いた。

背後から乳房を撫で上げられ、股間をさすり上げられて夥しい愛液を流しながら身悶えるのであった。

一方黄原も暁美の抱き重りするような豊かな乳房を両手で揉み上げながら、そのきめ細かな肌とたっぷり含んだ脂肪の柔らかさを堪能していた。

黄原の指が乳首に触れる度に、まるで電気が流れたように、柔らかい体がピクピクと震えた。娼婦となる訓練として最初に抱いた時は、まだ未開発の味気ない素人娘の体であったが、銀

子達の肉体調教を受ける間に、随分その性感を開発され、男好きのする体になったものだと感心した。

銀子の調教により 24 時間絶えること無く激しい性感に曝され続け、その結果として過剰なまでの性ホルモンの分泌が誘発されたためであろうか、数限りない男達の精を注ぎ込まれた女体は、柔らかな脂肪を置いた胸や腹や四肢の上に、男の指を吸い付けて離さないようしっとりとした白い皮膚で覆われていた。

その充分に湿度を帯びた絹のような滑やかな肌の感触を確かめ、両手で豊かな両の乳房を曉美の反応を確かめながら充分に揉み扱いた。

黄原に良く肥大した胸を責め立てられ、曉美は切なそうに眉根を寄せ、顔を振った。

横を向こうとする曉美の顔を捉えて、その柔らか唇に自分の唇を重ねると、まるで熱に浮かされたように、激しく唇を返して来た。

黄原の薄い唇に押し当てられた曉美の唇は柔らかくプリプリとした弾力があり、その唾液は甘美であった。

片手で乳房を揉みしだきながら、もう片方の手を苦しそうな息で大きく蠢く柔らかな腹に沿ってそろそろと下ろし、股の付け根にまで持って来た。

しっとりとした湿り気を帯びた花園の周囲を指の先で散策した後、二本の指を秘奥の最も深い位置にある孔に差し入れた。

突然の指先の侵入に、唇を重ね舌を吸いあつたまま、曉美の体がビクッと震えた。

秘孔を割って差し入れた指が、その内部に満たされた熱い芳醇な蜜の海の中に沈んだ。

そして、調教の成果かまるで条件反射のように、柔らかな膣の肉壁が蠢き始め、挿入した指を締め上げ始めた事を感じた。

曉美の体全体が最初の頃とは全く別のモノに改造されたことが理解出来た。

先ほどの口腔全体を使つてのフェラチオや、自らの肉洞内に男の肉塊を誘い入れた後の強い締め付けなど、始めてこの女の体を抱いた頃の面白みの無い肉体からは格段の進歩が感じられた。

成る程、青沼の野郎は、最初にこの女を抱いて処女の味覚を味わったかも知れないが、若さだけが取り得の面白みの無い棒の様な女を抱いていただけで、こんなにも成熟した女として開発された曉美の姿を知らないだろうと思った。

自分は何時でも好きな時に好きなだけ、前の穴だろうと後の穴だろうと上の穴だろうと好きな穴に自分のモノを突っ込み、この男の快感を高度に引き出すことが出来るように開発され

た女を抱けるのだと思うと、青沼に対する優越感のようなものが込み上がって来るのであった。

剛沢もお竜の体を愛撫しながら、自分の指使いに鋭敏に反応する熟れた女体を堪能していた。今が最も熟して、女の盛りだと思った。

剛沢の繰り出す指技に煽られ、興奮した女体からは、次々と官能的な牝の臭いが立ち上っていた。

水を含ませた柔らかい絹布のような花園を愛撫していた指を後ろに持って来ると、そっと菊門の周囲を撫で上げた。その優しい刺激に、お竜がウツと羞恥に顔を歪めた。

その赤く染まった顔を手で押さえ、こちらに向けさせるとその羞恥の呻きを漏らす開いた唇に自分の唇を重ねた。

朝早くから深夜まで組の男達を相手に肉体の調教を重ね、夜の僅かな睡眠時間も惜しんでディルドウを押し込まれて鍛えられた前後の穴は、銀子の預言したように何時でも何処でも前技無しでも男のモノを迎え入れることが出来る肉体に改造されていることが分かった。

前後の秘所にあてがった親指と中指に少し力を入れると抵抗無くスルリと暖かく豊富な愛液で満たされた内部に分け入ることが出来た。

前の穴に親指を突き入れ後の穴に中指を挿入して薄い隔壁越しに内部を刺激したが、お竜の股間の筋肉は侵入した二本の指を歓迎するように、その二つの肉洞の筋肉を動員して痛い程締め付けてくるのを実感した。

自分達の娼婦性を試す試験であることも忘れたかのように、男達の手管にかかり、甘い息を吐く女達を試験官である男達が、燃え上がった快感に更に火を点すように責め立てた。

男達の巧みな指捌きが敏感な箇所に触れる度に女達は短い悲鳴のような呻き声を上げて体をピクピクと痙攣させた。

その様をぐるりと周囲に陣取った大亜門戸会の若者達が生唾を飲んで見詰め、女達の股間から溢れ出る愛液の量に目を瞠るのであった。

男達は体位を変えると女達の腹の上に上体を預け、筋肉質の腹で柔らかな胸の隆起を摩擦し、厚い胸でふくよかに脂肪を載せた柔らかい下腹の感触を楽しみながら、両手で女達の股間を左右に押し広げた。

そして、自分の眼窩に開け拵がった局部の様子を確かめた後、検査項目の一つに入っていた

愛蜜の量と味覚を確認した。

女達は逆らう事も出来ず、両手で顔を覆って啜り泣きながら、華麗な花々が毒虫に蜜を与えるように、男達に花蜜を吸わせ続けるのであった。

三人三様の愛液の味覚を楽しんだ後、

「姐さん達はすっかり準備が完了しているみたいだぜ・・・このまま入れても良いのかい？」

剛沢が、一応試験監督者の銀子にお伺いを立てた。

銀子が黙って首を縦に振るのを確認して、愛液に塗れ、すっかり柔らかくなったお竜の股間を押し開き、業物をゆっくりと押し入れて行った。

沢田も黄原もそれを合図にしたかのように自らの熱く燃え立った肉塊を泉の如く樹液を溢れさせる、晴江と暁美の柔らかい肉洞にあてがいゆっくりと押し進めた。

男達の技の前にすっかり燃え上がってしまい、最早自制の効かなくなった女達は、男達の逞しい肉塊の到来を待ちわびていたかの様に、甘い悲鳴を上げてそれを迎え入れ無我夢中に喰い絞め始めた。

女の最も大切な部分を惨たらしく串刺しにされて、随喜の声を上げて身悶える女達を見て、周囲に陣取った男達から、

「お前達、試験でそんなにヨガル奴があるか？」とか、

「もっと真面目に試験を受けろ！」

とか次々に揶揄を浴びせかけられた。

剛沢の愛人達も、

「素敵なお試験を受けられて良かったわね？これからは何人もの男を相手に何時もそんな気持ち良い事が出来るのよ！」

と、すっかり官能の渦に巻き込まれ我を忘れたかのように身悶える女達に蔑んだ目をして声を掛けるのであった。

そんな卑猥な揶揄も最早耳に入らないのか、女達は男達の繰り出す責めに、自らを晒して官能の渦の中に自らを投じて行くのであった。

女達が絶頂に達したのを確認してから、男達是对する女を取り替えて、新たな愛撫を加え始めた。

絶頂の残り火に、たちまち再度火を点され、女達が再び官能の頂点に向かって体を悶えさせ

始めた。

こうして、3人の女を3通りにチェックした男達が、チェックシートを銀子に返した。

銀子は集められたチェックシートを見詰めながら、

「これまでの試験では、どうやら3人とも高級娼婦として技巧面や感度には問題無さそうね・・・」と、呟いた。

「次はどんな試験だ？」

セックスの魔神のような男達から連続して三度快感の頂点に追い上げられた女達が、荒い息を吐きながら疲労感にグッタリとマットの上に横たわり、股間を綴じ合わせる気力の喪失したように、いまだに股間から愛液を滴らせている様を前にしながら、剛沢がニヤニヤしながら銀子の方を眺めた。

「次は、言うならば人間性試験よ。」

銀子の応答に、居並ぶ男達が判らないと首を傾げた。

「この女達が人間としての尊厳を完全に捨てられるかどうかの試験よ。」

性感テストの間に3人の男達から、それぞれの男達の得意な責め技を味合わされ、無理やり三度の絶頂を極めさせられ、意識が朦朧としていた女達であったが、徐々に意識が回復して来て、銀子と剛沢達のやりとりが次第に明瞭に解るようになって来ていた。

これまでの試験でも十分に人間としての尊厳を踏みにじって来たのに、新たにそんな事を言い出す銀子が、次にどんな難題を持ち出すのか、恐ろしげに銀子の方を見詰めた。

「次は、お客のどんな要求にも応えられるかの試験よ。お客は高い金を出して貴方たちの事を買うんだから、お客がオシッコをしろと言ったら、犬の様に脚を上げてお客の目の前でオシッコをして見せたり、ウンチをしろと言われたら嬉しそうに笑いながらウンチをして恥ずかしい姿を晒して笑い者になるのよ。そして、オシッコを飲めと言われたら美味しそうにお客のオシッコを飲み干すのよ・・・」

と、如何にも楽しそうに説明するのだった。

これまで自分達が顎で使って来た三下や敵方のチンピラの目の前で散々羞恥図を晒して来た自分達ではあったが、それだけでは、飽き足りないかのように更に自分達を貶めようとする銀子の意図に、女達は恐怖と憤怒に顔を歪めた。

銀子の提出した、残酷な課題に暁美は顔を真っ赤に染めて、今にも泣き出しそうな表情で激

しく首を振った。

「そんな事は出来ませんと言ったら・・・」

晴江がオロオロと質問した。

「出来なければ、出来るようになるまで、徹夜してでも心身共に鍛え直すだけだ・・・」剛沢が冷酷な目で女達を睨み付けた。

目の奥に妖しく輝る残忍な欲望の色に、ここで拒否しても、この男は更に残酷な調教を用意して結局は、思い通りにさせてしまうだろうと観念すると、女達は逃れられない運命とがっくりと項垂れた。

銀子は若い男達に命じて、人の輪の中央にビニールシートを敷かせ、その上に可愛い絵の付いた幼児が使用するようなプラスチック製のオマルを3個並べさせた。

成熟した大人の女達に、幼児用のオマルを使用させようとする趣味の悪さに、見詰める男達から思わず笑い声が上がった。

剥き出しのコンクリートの床の上で体を小さく丸めてしゃがみ込む女達を見詰めて、銀子が首をクイックイッと振った。

女達は銀子の意図を察して、オロオロと立ち上がると項垂れながらシートの方に歩んだ。

腰を屈めて項垂れながら、股間と胸を手で隠して、オマルの前に立ち竦む女達に向かって、

「何しているの？早くその上にしゃがむのよ！ 子供用の便器で小さいから、ちゃんと狙わないと的が外れて、外に飛び出してしまうわよ！」と、冷たく命じた。

銀子に命じられて、諦めたように女達は股を開いてオマルを跨ぐと、怖ず怖ずと腰を降ろした。

「男勝りの鉄火姐さん達もオシッコをする時は、そんな風にお淑やかにしゃがんでするのか？俺は立ったままするのかと思ったぜ！」と、全身に羞恥を浮かべながら幼児用の便器の上に蹲る女達に、男達が大声で笑いながら野次った。

女達は、和式の便所にしゃがむ様にオマルを跨いだまま、何かを訴えるように、潤んだ目で銀子の方を見詰めた。

「ほら！そんなに股を閉じていちゃ、お客様にその様子が良く見えないでしょ！もっと股を大きく広げるのよ！オシッコをする時は、股を思い切り広げてはっきりと見せながらするのよ！」と、手にした愛用の乗馬用鞭で、股間を閉ざそうとする女達の内腿をポンポンと叩いた。

女達は諦めたように怖ず怖ずと股間を開き始め、やがてその内部の様子が見詰める男女の前に明らかになった。

男達が気を利かして正面からライトを当てたので、その部分の様子がくっきりと浮かび上がった。

「何をしているの？早くシャーッとやるのよ！お客から要求されたら、何時でもオシッコを出せるように体調を調整しておかなければ駄目でしょ！」

銀子が痺れを切らしたように、怒鳴り上げた。

銀子の剣幕に恐れて、女達は全てを諦めたように、硬く目を閉ざすと、辛そうに眉間に皺を寄せた。

女達の腰がブルブルッと震えると、股間から一条の水流が迸り始めた。

剛沢の愛人達が目敏く見付け、甲高い声で喚声を上げた。

「マーッ！男達の目の前でオシッコなんかして恥ずかしく無いの？」と、非難するような大声を上げるのだった。

「へへ・・・始めやがったぜ。」

その様子を見て、取り囲む男達が隠微な笑い声を上げた。

「恥ずかしそうな顔をしながら垂れ流しているぜ！」

「それが、また初々しくって良いんじゃないか？」

女達は野卑な見物人の前で放尿する羞恥に堪えられなくなったように、真っ赤に火照った顔を両手で覆い、啜り泣きを始めた。

「何を顔を隠しているのよ！その綺麗な顔をみんなに見せてニッコリ微笑みながらオシッコをしないと駄目でしょう！」と、銀子は羞恥に悶える顔を晒して排泄するように強制するのであった。

顔を真っ赤にして、羞恥に震えながら排尿姿を晒す女達に、男達が口々に好きな事を並べた。女達の秘部から溢れ出た水流が、ビチャビチャと飛沫を上げて小さなオマルの中で跳ねた。耐えられない恥ずかしい姿を目撃される羞恥に思わず身を揉むと、小さなオマルの外から外れて小水がオマルの外に飛び出し、観衆から野次られた。

剛沢達も隠微な微笑を浮かべて、その様を見守った。

最後の一滴まで絞り出して、オマルには黄色い液が溜まっていた。

「さあ、オマルを取り替えて！」

銀子が男達に新しい別のオマルに取り替えるように命じた。

「まったく、こんなに周りまで濡らしやがって！お前達いい歳をしてオシッコもまともに出来ないな？赤ん坊だってもっと上手にオマルを使うぜ！」

オマルの始末を命じられた男が、女達が小さな穴から狙いを外して、周囲に飛び散った尿がオマルの縁やシートの上に幾つもの丸い玉を作っていることを見とがめて女達をなじった。

「へへ・・・まだ暖かいぜ。」

男達が使用済みのオマルを手にして、中を覗き込んで臭いを嗅ぐような仕草をした。

男達に自分の体から絞り出した恥ずかしいものを見詰められ、臭いまで嗅がれる仕草に、女達が恥ずかしそうに下を見詰めた。

ついこの間まで荒くれ男達を顎で使っていたヤクザ組織のトップに君臨していた強い女達が、その厳めしさを完全に喪失して、か弱い女性としての恥じらいの姿を晒す様子に銀子は満足げに肯いた。

銀子に命じられて、男達は、今度は良く磨かれた四角いステンレス製のバットを開いたままの股の間に差し込んだ。

「さあ、次は大きい方を出すのよ！」

「まあ！大きい方だって？」

大亜門戸会の男達に混じってこの試験の様子を見学していた剛沢の愛人達が互いに顔を見交わしながら蔑むような笑い声を上げた。

「アアッ！嫌！」

衆人環視の中での排便行為を命じられる、羞恥心に激しく身悶えた。

「何をしているの？みんなの见ている前でウンチするなんて始めてじゃ無いでしょう？」

銀子は女達の羞恥も気にする様子は無く、厳しく命じるのだった。

逆らっても無駄だと悟った女達は諦めたように目を固く閉じた。

そして、ホウッと溜息を一つ吐くと、辛そうに眉根を寄せて、息を止めると下腹に力を込めた。

銀子の言うように浣腸されたり道具を使用して強制されて衆人環視の中で排便した事は何度かあったが、その際は、薬液等による自分の力ではどうしても無い強制されての排泄と自分自身に言い訳して、慰めることも出来たが、自分の努力だけで野卑な観衆に取り囲まれて脱糞する行為はいまだに激しい羞恥を伴う辛い気持ちにさせるのだった。

ウンウンと息んで、中腰の姿勢で腰をブルブルと震わせるが、やはり卑猥な観衆の見詰める前では神経が異常に緊張し、直腸の自然な動きを阻害するのか、脱糞するのは、容易な事では無く、いまだに身悶えるばかりで排便出来ずにいた。

「まだ出ませんか？さっき晴江さんのお尻の穴に指を入れて中を掻き回した時に、直腸の根本まで便が降りて来ているのが指の先に感じられましたよ・・・」

沢田がメタルフレームの眼鏡を通して、下卑た目で見詰めながら、羞恥に塗れ額に汗を浮かべウンウンと下腹を振る晴江に声を掛けた。

「お竜と暁美の腹の中にもたっぷりウンコが溜まっていたぜ・・・」

剛沢も面白そうに笑い声を上げた。

「へへ・・・まだ出せないのかい？」

「俺が指を入れて中を掻き回してやろうか？」

見守る男達が卑猥な言葉で女達をからかった。

男達からこれ以上の辱めを受ける事への嫌悪感から、女達は完全に神経を麻痺させてしまい腸内に溜まった汚物を排出すべく下腹に一層力を込めて、荒い息を吐きながら尻を振るのであった。

「アア・・・待って・・・もうすぐ出ますから・・・」

女達が、額に汗を浮かべて腰をモジモジと振るわせながら呻く様に言った。

「本当だ！尻の穴がピクピクし始めたぜ！」

腰を屈めて下から眺めていた男が歓声を上げた。

「おお！ケツの穴が開いて、茶色い物の先端が見えて来たぜ！」

見る見る三人の女の肛門が開き始め、便塊がその門を破ってその醜怪な姿を表に表し始めた。

「アアッ！恥ずかしい！」

「嫌！見ないで！」

女達が下卑な男女の前で排泄図を晒す羞恥に身悶えた。

女達の肛門から飛び出した最初の便塊が千切れて、良く磨かれた銀色の底の浅いバットの上にポトリと落下した。

特有の臭気が立ち上る中で、目を皿の様にして見詰める男女の激しい歓声と爆発するような笑い声が上がった。

暫く時間を置くと、次の便が溢れ出し、肛門からぶら下がった。

それが開始されるまで随分時間が掛かったが、一度始まった排便は、自律的に動く腸の排泄運動により、自分の力では最早止めることが出来なくなっていた。

女達は激しい羞恥に身悶えながら次々と恥ずかしい姿を観衆の前に晒すしかなかった。

「アアッ！恥ずかしくて気が狂いそう！・・・お願いします！オ●●●●●をしゃぶらせて下さい！」

晴江が、全身を真っ赤に染めて、目の前に立つ沢田に哀願した。

良いでしょうーと、沢田が晴江の前に進み出ると、その太いモノを晴江に口に押し当てた。憎い男達の目の前で排便するという気も狂うような屈辱と激しい羞恥を男のモノをしゃぶる事に神経を集中させて、少しでも紛らわそうとするかのように、心の奥底から込み上げる狂おしい感情に突き立てられ、ガタガタと体を震わせながら差し出された沢田のモノを無我夢中で口中に押し入れた。

そして口の中で硬さを増していく肉塊に縋り付く様に、必死にそして狂った様に沢田のモノをしゃぶり上げ続けた。

極彩色の刺青を施された乳房の先端で乳首が硬く屹立していた。

その間にも晴江の尻の穴から溢れ出し垂れ下がったものは、オマルの上で蟻局を巻いて行った。

発狂寸前の羞恥に全身を赤く染め、屈辱の涙を流しながら、後少しで気が狂ってしまいそうな狂気の淵に投げ出された命綱にしがみ付く様に、頬を窄めて突き立てられた男根を奥深く含み、強く吸い上げ、狂った様に舌を振るわす晴江を沢田が醒めた目で見下していた。

お竜も暁美も悲鳴のような泣き声を上げながら、次から次から止まること無く体内から恥ずかしい茶褐色の塊を排出し続けていた。

激しい羞恥と屈辱のあまり精神が混乱してしまったのか、乳首がピンと屹立し、木の芽のような肉芽が充血して股間から突き出していた。

そんな女達の姿を見て、「泣いてちゃ駄目でしょ！そんな嫌らしいものを勃起させて！本当は、男達の目に恥ずかしいこと見せ付けるのが、気持ちが良いくて仕方ないくせに！」

と、女達の体調の変化を発見して意地悪く指摘したので、男達からドッと笑い声が上がった。

「へへ・・・こいつら人前で糞たれるのが好きだよ！調教の最中にも糞たらしながら前も濡らした事があったんだぜ！」

周囲を取り囲んで見詰める男達も、激昂する羞恥心にすっかり精神が混乱してしまい、性的な興奮状態を見せる女達に嘲り笑いを上げた。

「ほら、お客の方を向いて、ニコリ微笑みながらウンチをするのよ！」

と、銀子が笑いながら声を掛けた。

「それにしても、凄い臭いだぜ！」

立ち込める排泄物の臭気に男達が鼻を摘んだ。

「こんな臭いものを、金を払って見たいという、金持ちの変態の気が知れないぜ！」

男達が、ステンレス製のバットの上にもうずたかく盛り上げられた汚物の山を見ながら、好き勝手な野次を飛ばした。

女達は、自分たちが垂れ流したものを見詰めさせられながら、ティッシュで肛門の回りの汚れを拭いた。

「この後、浣腸を何度もして洗腸してお腹の中を綺麗にしてから、後ろの穴の感度と絞め具合の試験よ！」

尤も、猛者の変態客の中には、ウンチに塗れた肛門に直接突っ込みたいて言う奴もいるけど、今回は中を綺麗に洗ってからよ。」

屈辱の排便試験を終えて放心したような表情を浮かべる女達に、銀子が非情な言葉を浴びせるのだった。

「その前に、ビニールシートが敷いてある間に、オシッコを飲ませて上げて！」

銀子の残酷な言葉に女達がハッとしたように顔を上げた。

ビニールシートの上に正座させられた女達の前に剛沢達が仁王立ちした。

「ほら、口を大きく開けて、こぼさず飲むのよ！」

銀子が、尻ごむ女達に、大きく口を開いて目の前に立つ男達の小便を受け止めるよう命令した。

男達が自らの男根に手を掛け、その狙いを定めると、下で大きく口を開いて待ち受ける女達にその先端を向けた。

女の尊厳を踏みにじる快感にニヤニヤ薄笑いを浮かべる男達の目が、下から縋るように見上げる潤んだ女達のと目と合った。

女達の準備が出来たのを確認して、男達が緊張を解いた。

「昨日、酒を飲み過ぎたから、ちょっと酒臭いぜ・・・」

剛沢が曉美の大きく開かれた口中に放出を始めた。

濃い色をした小水が剛沢の男根の先端から放射され、曉美の口の中でゴボゴボと渦を巻いた。

「ほら、しっかり受け止めないと駄目だろう！」

黄原が晴江の顔に小水を注ぎ掛けた。

口を外した、尿がベチャベチャと晴江の顔を濡らした。

必死に顔を動かして黄原の放水を口で受け止めようと努めたが、黄原は晴江の顔を自分の小便で汚す事に快感を感じているように陰茎を左右に振って、元の女親分の顔を汚し続けるのであった。

黄原の放水を受け止めようと、その先端の動きを見詰める目に熱い尿が入り、激痛が走った。

沢田は物凄い水流でお竜の大きく広げた口中に注ぎ込んだ。

余りの激しい勢いにお竜も飲み干す余裕も無く、口腔で跳ねた尿が表に流れ出した。

「ほらほら、しっかり呑み込まないと駄目でしょう・・・」

にやけた薄笑いを浮かべながら、なおも強い水流で注ぎ続けた。

息次ぐ間も無く流れ込む、熱い小水にお竜が苦しげに咳き込んだ。

その人間としての尊厳を完全に捨て去り、ただ男の残酷な欲望の前に従順に従う女達を周囲を取り囲む男女は啞然とした顔で見守り続けるのであった。

その後巨大な浣腸器で微温湯を何回にも分けて全部で何リットルも体内に注ぎ込まれ、排出液が透明になるまで洗腸された後、男達により娼婦性を確認するための最後の試験である後門のテストが実施された。

まだ、肛門性感は発達しておらず、尻穴を割られても嫌悪と苦痛しか感じる事のない女達であったが、代わる代わる三人の男達から後の穴を無理矢理こじ開けられ、無慈悲に串刺しにされ、暴風に曝されるような一方的な男達の責めの前に、苦痛とも快感ともつかない叫び声を上げ全身を身悶えさせるのであった。

そして、男達の暴力の前に無理矢理自然な快感とはほど遠い絶頂を極めさせられて行く女達の姿を目の当たりにして、見守る男達は声を上げる事も出来ず、黙って生唾を呑み込みながら股間を熱くするのだった。

長時間に渡る肉体の試験を受けさせられ、心身とも疲れ果てた女達が床の上に死んだように横たわっていた。

長い時間を掛けた後門の試験が終了したばかりで、男達から責め続けられた菊の花のような

箇所は、その皺を伸ばして、閉じる事を忘れたように、いまだに肉のトンネルがポッカーリと開いたままで、その赤黒い内部の様子を晒していた。

「そんなに、開いたままじゃ腸の中に風が入ってスースーするんじゃないか？」

「そんな、臭い穴さっさと閉じろよ！」

男達はそのポッカーリと空いたままの虚ろを指差して盛んに揶揄した。

剛沢や沢田達から入れ替わり立ち替わり尻穴に太い肉棒を突き立てられ内部を捏ね回された余韻がいまだに収まらず、コンクリート製の床の上に敷かれたマットに俯せになって、時折腰をピクッと痙攣させ、全身に汗を浮かべたままフーフーと肩で荒い息を吐き続けていた。ただ、後門を責められながらも最終的に女達が激しく感じてしまって事は、前門から流れ続ける夥しい体液から明らかであった。

沢田も女達の肛門の締め付け具合や感度の良さを思い返ししながら、じっとうずくまる女達を見下ろしていた。

銀子が、集められた最後のチェックシートを見ながら、

「まあ、満点という訳には行かないけど、充分ベテラン客の相手は出来るようね。おめでとう！全員合格よ！」と、宣言した。

「こんなもので満点を取れるなんて、銀子、お前くらいのもんだぜ！」

と、黄原が銀子の方を眺めながらニヤニヤ笑って言った。

「大姐は合計点では合格でも、項目によって合格点に足りてないところがあるから、この後でしっかりと補習して貰うわよ・・・」

銀子の非情な言葉に、まだあの恐ろしい肉体改造を続けなければならないのかと思うと、顔が青ざめ身体が小刻みに震えた。

暁美のお竜もそんな晴江の様子に心配そうに目をやった。

「二人も、まだ実際にお客さんの前に出るまで、少し時間があるから、今日のテストで足りなかった所は、当日までにしっかり補習するからその積もりでね！」

女達は疲労で立ち上がる事も出来ず、横になったまま、これで自分たちも変態客専門の大亜門戸会の娼婦になったのだと、涙を流しながら諦めにも似た哀しい思いで、非情な銀子の宣言を聞いていた。

一度でも目高組の女達が変態行為を喜々として演じる最下層の娼婦に落魄れたとの噂が裏

社会に流れれば、自分達は最早二度と渡世の世界で顔を向けて歩くことも出来なくなるだろうと、絶望的な気持ちとなるのであった。

どの試験項目で誰がどう良かったかの悪かったのだと、得意気に喋る銀子の講評を聞き流しながら晴江は断腸の思いだった。

大亜門戸会専属の売春婦になることを逃れるには、もう一刻の猶予も無いと、堪えようの無い焦燥感が込み上げて来て、悔しさに唇を噛むのであった。

一体、自分達が犠牲となって命を助けてやった赤石達目高組の幹部連中は、どうしたのだろうか？

大亜門戸会の組員の話では、傷もすっかり癒えたので、この屋敷から出してやったとの話であるが、それなら今回難を逃れた目高組の残党を統合して組を再興し、自分達の救出に動くべきだと思っていた。長年に渡り奈和親分からの恩義を受け、そして今回も晴江の決断により命を救われたのであるから、当然の事だと考えていた。

今回の殴り込みの際には、大亜門戸会側に事前に気配を感じさせないため、組の経営する賭場や売春宿は何時も通り運営していた。

これらを運営する末端の組員に対しては、今回の殴り込みの計画が有ることすら知らせず、何時も通りの稼業をしていた者も多い。

従って今回の殴り込みに参加しなかった残党は大勢居る。

更に、目高組はそれなりの大組織であり全国に奈和親分の杯を受けた傘下の組は数多くあり、成る程、目高組を見限って大亜門戸会に鞍替えした組員は数多くいて大亜門戸会の構成員も一挙に増加したが、これらの残党や全国に広がる傘下組織の人員を誰かが指導して動員すれば、大亜門戸会の構成員を遙かに凌駕する筈であり、その上、奈和と義兄弟の杯を取り交わした全国の親分が所属する日本でも有数の大組織である村崎會の会長に窮状を訴え一村崎親分は奈和と親子の杯を交わしているのだから、子の窮状を親が救うのは当然のことであるが—その勢力を得られれば、剛沢が如何に奸計を廻らせようと大亜門戸会など蹴散らすことは容易な筈なのに—と、遅々として進まない救出の動きに歯がみするような思いでいるのだった。

「さて、貴方たちも目出度く就職試験に受かって、晴れて大亜門戸会のお抱え娼婦になった訳だから、早速貴方たちの仕事場をご案内するわ。」

現在の危機的状況に身悶えするような焦燥感をもって、最早一刻の猶予もならないと、最後

のチャンスに望みを託す晴江の耳に不意に銀子の声が入った。

銀子が女達に屋敷内に新たに作られたばかりの売春部屋を案内すると言い出したのだ。

それを聞いて剛沢や沢田や見物していた大亜門戸会の男達や剛沢の愛人達も興味深げに同行すると言い出した。

「何だ？お前は来ないのか？」

女達の娼婦性の試験が終わった後、一人立ち去ろうとする黄原に剛沢が声を掛けた。

「ええ・・・ちょっとやり残しの仕事があるので・・・」と、姿を消してしまった。

変な男だなーと、剛沢は思った。

恐らくこれまで多くの女と交わって来て、人並み以上の女を泣かせるテクニックを持っているし、抱きたくなれば何時でも元目高組の女達でも他のお抱えの売春婦でも自由に抱ける立場に居ると言うのに、必要に迫られなければ、晴江達を抱こうとしない。

彼奴は彼奴で銀子の事を本当に惚れて、彼奴なりに銀子に操立てしているのか？ーと、思った。

晴江達は、拷問室の在る組事務所の地下室から、残忍な男女の集団に取り囲まれるように屋外に全裸のまま連れ出された。

久しぶりに浴びる表の光に体がフラフラするような感じがした。

この屋敷に連れ込まれて始めて表に出たが、季節がすっかりと変わってしまった事に気付いた。

銀子や大亜門戸会の男達に連れられて晴江達は、敷地内に新たに増設された女達の売春施設に連れ込まれた。

「女達それぞれのイメージに合った部屋が3つと、共通して使うための和風の部屋と洋風の部屋の2つで、合計5つの部屋を新設したのよ。」

銀子がまだ壁紙の臭うような真新しい部屋の並んだ、建物の一角を案内した。

「最初が、晴江姐さんの部屋よ。」

廊下に面したドアを開くと瀟洒な格子戸となっていた。

和風屋敷の玄関のように設えられた格子戸をくぐり抜けると12畳ほどの和室となってい

た。部屋には床の間が設えられていて、茶を点てるための囲炉裏も作られていた。

女達と共に野次馬の男女がゾロゾロと中に入り込んだ。

部屋の突き当たりの障子を開くと、坪庭となっていた。

所が、その壺庭は普通の庭とは趣が違い、周囲は竹矢来で囲まれており、柳の木が植えられ、まるで江戸時代の刑場のような演出がされていた。

庭の一角には数人で入れるほどの大きな石で作った露天風呂が在り、その正面には刑場の晒し柱のような柱が作られていた。

「露天風呂に浸かりながら、晒し者の女を眺めるなんて一興だと思わない？」

銀子が自分のアイデアで作った施設を自慢するように説明した。

壺庭の天井は、電動の屋根となっており、日の光の中で女を晒し者にすることも、寒い時には屋根を締めて暖房し、内風呂のように使用する事も出来るようになっていた。

坪庭の案内が終わると、襖を開いて、隣の部屋を案内した。

その部屋は全く雰囲気異なり、江戸時代の奉行所の拷問部屋のような雰囲気で作られていた。

薄暗い室内に明かりを点けたので、内部の様子が明らかになった。

黒っぽい石を敷いた床には、三角木馬など不気味な拷問道具が並べられ、壁面には縄や鞭や種々の張り型など夥しい責め具が掛けられていた。

「随分凝った演出じゃ無いか？」

剛沢が気に入ったように笑うと、床に畳まれていた浅葱色の囚衣と壁に掛けられた麻縄に手を伸ばした。

晴江に囚衣を纏わせてから、麻縄の束を手で解すと、器用な手付きで晴江を縛り始めた。

両手を背中で一つに縛り上げると、残った縄を胸の下に這わせて後ろに回した。

素肌の上に直接着用した水色の囚衣の乳房の上下に2本、3本と縄が掛けられ、背後から首筋を通してまわった縦縄により括り上げられて行った。

「ほら、出来たぜ！」

剛沢により、きつく女囚縛りに縛り上げられた囚衣姿の晴江から怪しげな色香が立ち上っているように感じられた。

「こうして見ると、素っ裸より、雰囲気が出て艶っぽく感じるぜ」と、まるで江戸時代の女囚のように囚衣の上から縄掛けされた晴江の姿を嫌らしい目で見回しながら、呟いた。

囚衣の襟に手を掛けて縄で括り上げられていた胸の前を無理やり左右に開いたので、刺青が

施された両乳房が露わになった。

晴江がつかの間、囚衣により卑猥な男達の中から裸身を隠せた安心感を破られ、羞恥に悲鳴を上げて身を振った。

「折角だから、それを使ってみようか？」

剛沢が部屋の真ん中に置かれた三角木馬の方を向いた。

剛沢と沢田で縄掛けされた晴江の体を持ち上げると、尖った木馬の背に晴江を乗せ上げた。木馬の背が股間を割る激痛に悲鳴が上がった。

囚衣の裾を捲り上げて、下半身を露出させた状態で木馬に載せたため、尖った木馬の峰が白い股間に大きく食い込みその姿を柔肉の間に隠していた。

木馬の上で苦痛に悶える晴江の姿を満足そうに眺めた後、壁に立てかけられていた割れ竹を手を取った。

そして、そのささらになった竹竿で晴江の尻を目掛けて激しく打ち据えた。

大きな音を立てて、ささらになった竹束が刺青の施された尻の上で跳ね、激痛に木馬の背で身を揺すりながら、堪らず悲鳴を上げた。

「へへ・・毒婦を折檻する江戸時代の役人の心境だぜ！」と、そのまま数度晴江の尻に打擲を加えた後、割れ竹を握り締めたままニンマリと笑みを浮かべた。

次に銀子が皆を連れ込んだのは、暁美用の部屋であった。

こちらは洋風に作られており、居間のような造りの広い部屋には暖炉が設えられ、ゆったりとしたソファが置かれていた。

そのソファに面するように小さなステージが設えられており、ポールダンスに使用するためのステンレス棒が柱のように建てられていた。

「ほら、折角だから皆に得意のダンスを見せてあげたら？」

銀子に促されて、暁美が無言でステンレスのポールに取り付いた。

銀子が壁のスイッチを入れると、足元と天井に取り付けられた艶めかしいスポットライトがポールに絡む暁美の裸身を照らし上げ、ミラーボールが回転し、激しいポップな音楽が大音量で流れ始めた。

暁美の艶めかしいダンスを堪能した後、次の部屋に入った。

其処にはキングサイズのベッドが用意され、そのベッドの4隅には手足を拘束するためのベルトが取り付けられていた。

「この大きさなら、大人三人が川の字になって寝られそうだな」と、剛沢が呟いた。
ベッドの上に手足を大の字に拘束された女を両側から男二人で眺める姿が臉に浮かんだ。
部屋の隅は、浴室となっており壁はガラス張りで内部の様子が良く見えるようになっていた。
浴室には大人3人でもゆったり入れそうな浴槽が在った。浴槽もガラスで出来ているのか透明で、更に下から照らす照明まで設けられ中の人間の姿を浴室の外からも見る事が出来るようになっていた。

次の部屋に入ると様相はガラリと変わっていた。

そこは、まるで西洋の古城の牢獄の様な造りとなっていて鉄格子が嵌められた檻があり、不気味な西洋の拷問具が並べられていた。

この売春部屋は銀子がアイデアを出して造らせたものであるが、各人の部屋にはそれぞれ趣向を凝らした拷問部屋が造られているようであった。

自分専用の売春部屋として、与えられた部屋に付随する拷問室の不気味な雰囲気、曉美は恐ろしそうに立ち竦んだ。

天井には幾つもの滑車が吊り下がっており、鎖やロープに繋がれた手枷や種々の金具がぶら下がっていた。

「この釣り針みたいなものは何に使うんだ？」剛沢が、天井から吊り下がるロープに取り付けられた、直径2センチ程の鉄棒を曲げて、まるで巨大な釣り針のような形に加工された金具を手にして聞いた。

釣り針のような棒の先端には直径4センチ程の鉄球が溶接されていた。

「それは、女を吊り上げる釣り針よ！こうやって使うのよ！」と、その巨大な釣り針のような鉄製の道具を掴むと、有無を言わず、曉美の肛門にその巨大な鉄球を突き入れ、釣り針の先端を体内に没入させた。

太い鉄棒に尻肉を割られて悲鳴を上げるのも構わず、天井の滑車を通して釣り針を結び付けたロープを引っ張った。

曉美の体が尻穴で引っ張り上げられ爪先立ちとなった。

激しい悲鳴が、牢内に響き渡った。

銀子は、見物の男女を引き連れ、一通り、出来たばかりの全ての売春部屋の案内を済ませた。

「こいつは、全く売春のテーマパークだぜ！一度来た客もまた何度でも来たくなること請け合いだぜ！」と剛沢が興奮して叫んだ。

「それなら、年間パスポート会員でも募集したらどうですか？」と、沢田が茶化した。

「それも良い考えかも知れないな・・・」

もちろん沢田は、冗談で言ったのであるが、剛沢は真剣に考えている様子だった。

「これで、卒業試験と売春部屋の案内の方は一応終わりだけれど、まだ貴方たちに教えていなかった性の技術が在るのよ・・・」と、不安げな表情を浮かべる晴江達を楽しそうに見渡して、意味深な笑みを浮かべた。

「・・・それはね、女から抱かれる時の性の技巧よ。それ程多くは無いけど、世の中には男に抱かれるより女を抱く方が好きな大金持ちの女も居るのよ。これから女を相手にする時の技巧をお教えするわ。」

銀子が目配せすると、亜紀達剛沢の三人の愛人が隠微な笑みを浮かべて前に進み出た。

「また暴れ出すと、女の力ではどうしようも無いから、縛らせて貰うね。」

そう言うと、男達に手伝わして、女達を黒い革製の拘束衣で上半身をかっちり縛り上げた。

両手を背後に拘束され、拘束用の黒い革ベルトで乳房を括り上げる様に固定された。

両脚には50センチ程の鎖の付いた足枷が嵌められ、ようやく歩行は出来ても得意の蹴り技は完全に封じられる長さであった。

「これで、良しと！」がっかりと拘束され、お竜達の抵抗を封じた事に満足したように肯くと、3人の女を共通部屋として用意した洋風部屋に連れ込んだ。

剛沢の愛人達により、肩を押されるように、部屋に押し込まれた。

男達がこれから始められる新しい調教劇に興味深げにゾロゾロと部屋に入ろうとしたが、

「駄目よ！これからは女達だけの時間。」と、銀子に邪険に部屋から押し出された。

「俺たちも駄目なのか？」

剛沢が惜しげに聞いたが、沢田と共に銀子から無言で廊下に追い出されてしまった。

男達を追い出した後、部屋の扉は大きな音を立てて閉じられ、中から鍵が掛けられてしまった。

廊下に追い出された男達が、啞然と互いの顔を見交わした。

「大丈夫だ！女達の売春部屋には隠しカメラが仕掛けてある」と、剛沢が諦め切れないというような顔をした男達に小声で囁いた。

その言葉に男達が、部屋の中の女達に覺られないように小さく歓声を上げると、イソイソと隠しカメラの監視室に剛沢と共に向かった。

共通の部屋として作られた洋室は、その内部が全て赤い色で統一されており、壁紙の色や、革製のソファやベッドも毒々しい赤色で統一されていた。

深紅に近いピンク色の毛足の長い絨毯の上に、ボンデージスーツで拘束された女達が跪いていた。

その周囲を銀子と剛沢の3人の愛人が取り囲んでいた。

「これから、貴方たちに女性客の相手の仕方を教えるわ。」

銀子が、怯えた表情で跪く女達を見下ろして声を掛けた。

「一度女に抱かれてみたら、男に抱かれる方が、どんなに楽かと思うようになるわよ！女の愛は欲深くて長いのよ。」

剛沢の愛人で一番年長の亜紀が楽しそうに笑いながら言った。

銀子が、身に纏っていたスーツの上着を脱いだ。

その下から現れた綺麗なボディーラインに、監視室に集まった男達がモニター画面をグッと覗き込んだ。

銀子が無造作に上着を投げると、床に落ちた上着が、その隠しカメラの一つを塞いでしまった。

「糞！見えなくなっちゃった。別のカメラに切り替える！」

剛沢に命じられて、部屋の各所に幾つも仕掛けられた、別の隠しカメラに画面を切り替えた。所が、銀子は一枚一枚と脱いでいく自分の衣類で、それらのカメラを次々と塞いで行った。最後に残されたカメラには、プロの女が身に纏うような黒いガーターベルトで吊り上げられたストッキングと扇情的な黒いパンティだけとなり、形の良い乳房を丸出しにした銀子の姿が映し出されていた。

その男心を誘う妖艶な姿にモニターを覗き込む男達が生唾を呑み込んだ。

銀子は、カメラの方に向かって、パンティを降ろし、脚を上げて最後の一枚を脱ぎ降ろした。画面に大写しにされた股間の硬そうな繁みとその奥にチラチラ見えるピンク色した肉片に、男達がモニター画面の前で一斉に歓声を上げた。

ところが、銀子は脱ぎ降ろしたばかりのパンティを手にする、巧妙に壁に隠されたカメラに向かって‘あかんべー’をするような仕草をして、脱ぎ下ろしたばかりの自分のパンティで壁の鴨居に巧みに隠蔽してあったカメラを隠してしまった。

「糞！銀子の奴、隠しカメラの位置を全て知ってやがる！」男達は、薄い布越しに深い霞が

掛かったような画面を見詰めながら苦笑いをした。

監視室のスピーカーからは、女達の声だけが、妙に艶めかしく聞こえていた。

一方、売春部屋の中では、剛沢の若い愛人の春華が短いスカートの下に履いていた黒いナイロンストッキングを脱ぎ降ろすと、まだ暖かさの残る自分の脱いだばかりのストッキングを抵抗の封じられた暁美の頭に無理矢理被せた。

ストッキングの弾力で、美しい暁美の鼻や頬が押し潰され、醜く変形した。

「まあ！変な顔！まるで豚みたい！」

春華が、ストッキングにより押し潰された暁美の顔を覗き込みながら甲高い声で笑った。

もう一人の愛人の香住も春華の真似をして、ナイロンストッキングを脱ぐと、お竜の顔に被せて、その醜く変形した顔を笑い上げた。

春華も香住も剛沢の愛人に選ばれるだけあって、美しい容姿を持っていたが、負けず劣らずの美貌を持つ暁美やお竜に、以前から女ならではの嫉妬を感じていたのだった。

一番年長の亜紀は何時も着物姿のため、ストッキングは身に付けていなかったが、銀子が、「晴江姐さんには私からストッキングを上げるわ。」と、言う自分の履いていたストッキングを脱ぎ晴江の顔に被せた。

嗜虐者の女達の前に、犠牲の3人の女達が頭からストッキングを被されたまま跪いていた。

銀子達4人のサディスティン達が、その歪んだ顔を面白そうに笑い立てた。

「こんなストッキングを被せられては息が出来ないわね？」と、女達は晴江達の口の部分だけはストッキングを破ったので、口の周りが露出した。

剛沢の愛人達は楽しそうにキャッキョッと笑い合いながら、服を脱ぎだした。

互いに剥き出しとなった乳房や腰の回りをタッチしながら、楽しそうに互いの体を評価しあっていた。

床に正座したままの晴江達の前に、全裸となった剛沢の愛人達が仁王立ちとなった。

そして、股間を僅かに開くと、晴江たちの頭を掴み、自分たちの股間に押し付けた。

ストッキングに押しえ付けられ目も開けられない女達の口唇にザラザラとした陰毛が触れ、その下から熟れた女の臭いが伝わって来た。

「何しているの？早く嘗めるのよ！」

女達が冷たく命じた。

「白白の絡みを客の目の前で演じる時の嘗め方は充分訓練した筈でしょ！その要領で亜紀姐さん達を満足させるのよ！」

銀子が剛沢の愛人達の前に正座する女達の尻をピシッと平手で叩いた。

女達に命じられて、晴江たちは怖ず怖ずと舌を延ばすと、その舌先で硬い陰毛を掻き分け、その下の熱く火照った褌を左右に開いた。

ツーンとするような、性に飢えた牝の臭いが伝わって来るのを感じた。

晴江の舌先が亜紀の秘部のルビーの粒のような肉球に触れた時、亜紀の体がビクッと痙攣し、甘い呻き声を上げた。

銀子から仕込まれた舌先の技術は、剛沢の愛人達を得も言われぬ快感に導きつつあった。

何も映らない画面を忌々しく見詰める、監視室に詰めかけた男達の耳に女達の甘い声だけが響いていた。

晴江達の舌技で軽く頂点に達した亜紀達は、その余韻にウツトリとしながら、

「貴方たち、剛沢達のオシッコを飲んで美味しかった？今度は私たちのオシッコを飲ませて上げるわね。」

と、晴江の前に仁王立ちしたまま、冷たい笑みを口に浮かべた。

そして、晴江達の唾液と自らの愛液でたっぷりと濡れた大きく開いた股間に晴江の顔を強く押し付けた。

「そうよ！・・・そこよ！・・・そこをもっと突くのよ！」

亜紀が込み上げる快感で声を上擦らせながら呟くように言った。

晴江の舌先が、女の命を秘めた肉洞の僅か上に開孔した、秘孔を刺激した。

柔らかい舌先の愛撫に誘発されたように、その秘孔が柔らかく開いた次の瞬間、その内部から激しい濁流が迸り出し、開けられたままの口内に渦を巻いて流れ込み、たちまち口中を満たした。

息も出来ず咽びながら必死に嚥下する晴江を冷たい目で見下ろしながら、

「どう？美味しい？・・・残さず飲むのよ！」

と、晴江の口内に排泄を続けながら、勝利の快美感にも似た恍惚の表情を浮かべた亜紀がウツトリしたような声を出した。

いまや、二人の愛人も亜紀を真似て暁美とお竜の口内に小水を流し込んでいた。

不快な臭いのする汚水を注ぎ込まれる女達は、まともに息をする事も出来ず、死ぬ思いで喉を上下させて濁流を胃に送り込んだ。

肩を震わせ、時々上体を痙攣させながら排泄物を飲み下す女達を仁王立ちした愛人達が見下ろしながら快哉の笑い声を上げた。

何時果てるとも判らない苦痛と屈辱を身体を身悶えさせて堪える女達の姿を眼下に眺めて悦虐に浸る亜紀達であった。

激しかった奔流はやがて勢いを失い、間欠的な噴出に代わった。愛人達は腰を震わせて尿路に残った最後の一滴まで女達の口内に注ぎ落とした。

口内に満たされていた汚辱の液体を飲み干し終えて、ほっと息を吐く晴江達に、

「何をしているの？まだ終わりじゃないでしょ！舌を使ってその周りを良く清掃するのよ！」と、冷たく命令した。

剛沢の愛人達は、長いソファに並んで腰を降ろし、その股間を大きく広げて、女達に自らの秘所を舌先で愛撫させ続けていた。

鍛えられた晴江達の舌先が、快樂の源泉を刺激する度に、ソファの上で身を反り返らせ快感の呻き声を上げた。

必死に舌と口唇を使って奉仕する女達の喉の奥には、先ほど流し込まれた、女の尿がいまだに腐臭を上げて、へばり付いているような感じがしていた。

暁美達は舌先を細く尖らせて、春華達の秘孔に差し入れ、その柔らかい内部を必死に攻略していた。

春華の秘肉から湧き上がる夥しい量の愛液が、暁美の口内に流れ込み舌を刺激した。

「ほら！犬みたいに嬉しそうにお尻を振ってペロペロ嘗めるのよ！」

銀子が壁に掛けられていた、先が幾つもの紐状に割れた皮鞭を手にするると、剛沢の愛人達の股間に顔を埋めて愛撫を続ける女達の尻を目掛けて鞭を叩き付けた。

銀子に命じられた通り、鼻をフンフン鳴らして、股間に顔を埋める女達が尻を高くもたげ、嫌らしく振り立てた。

銀子に尻を鞭打たれ、必死に舌を這わせ尻を振る女達の股間の奥が充血を始め、次第に潤って来る様子を銀子は発見した。

かつての恐れを知らぬ勇敢な闘争心は、完全にその姿を消し、理不尽に加えられる暴虐を性的な喜びと感じる本能が開花し始めていると確信するのであった。

「貴方たちも欲しくなって来たんでしょう？良いわ！入れて上げるわ！」

銀子が壁に掛けられていた性具に手を伸ばした。

そして、快感に浸る剛沢の愛人達に向かって、

「どう？この女達の舌使いは並のモノではないでしょう？」と、問い掛けた。

目高組の女達の絶妙な舌技に興奮し頬を紅潮させ、自然と垂れ流し始めた愛液を吸われながら、恍惚の表情を浮かべていた愛人達は、銀子の問い掛けにうっとり酔い痴れたように肯いた。

甘い歓喜の声を発しながら、快感に浸る女達の様子に満足したように、

「今度は、この女達にお尻の穴を嘗めて貰ったら？」

と、提案した。

「エッ！お尻！？」

肛門性愛の経験が無い亜紀達が、快感の渦の中から、少し現実に戻されたように、恥ずかしそうに顔を見交わした。

「大丈夫よ！慣れてくれば、その快感にビックリするわよ！」

晴江たちに命じてテキパキと体位を変えさせた。

晴江とお竜の下半身が密着するように、絨毯の上に仰向けに寝かせると、互いの脚を大きく折り曲げさせ、両頭の張り型を二人の女の対面した秘孔に挿入した。

松葉くずしと呼ばれる互いの大腿を絡め合い、股間を擦りつけ合うような異様な体位で、巨大な相対張り型を体内奥深く挿入され、晴江とお竜が悲鳴を上げた。

「ほら？何をしているの？腰を動かして互いに愛し合うのよ！さっきから体が疼いてこれ欲しくて仕方無かったんでしょ？」

銀子が二人の女の拘束衣により括り出された乳房の上に鞭を振った。

銀子の鞭に脅かされるように、二人の女は怖ず怖ずと互いに不自由な腰を蠢かせた。二人の女の肉体内に完全に埋没していたどす黒い張り型が二人の愛液でテカテカと濡れ輝かり、股間の割れ目から見え隠れしていた。

「それじゃお待ち遠様！貴方たちはこの女達の顔の上にお尻を落とすのよ！」

仰向けの姿勢で、口の周りだけストッキングを破られた女の顔が、天井を向いていた。

不自由な体勢でも必死になって腰を動かし、快感を貪ろうとする女達の開いた口がハアハアと忙しく息を吐いていた。

その上に、亜紀達は腰を降ろすような形で、自分の後ろの穴を晴江の達の口唇に密着させた。

突然に口を塞がれるような恐怖感に身悶えしたが、銀子の鞭に脅かされ、銀子の命ずるまま

に舌を突き出して、目の前の菊の蕾の中心部を舌先で丁寧に愛撫し始めた。

牝芯とは違う濃厚な隠微な香りが、口内にひろがった。

晴江達の舌先が、後の秘部に触れて、その妖しげな刺激に亜紀達はブルッと腰を震わせた。

晴江達は、不自由な体勢で息も十分に出来ず、酸欠状態のように意識が朦朧としていたが、銀子から調教された体は、まるで本能に突き動かされるように、腰を蠢かせて張り型を操り互いの快感を高め、舌先は菊花の皺に沿って丁寧に皺を伸ばすように嘗め上げ、やがて硬い門をこじ開ける様にその内部に舌先を突き入れ始めた。

その直腸からジワジワ突き上げる妖しい未体験の鋭い快感に亜紀達はウツトリとした声を上げ腰を悶えさせ始めていた。

「ああ・・・良いわ！もっと奥まで舌を延ばして中を掻き回すのよ！・・・そうよ！・・・良いわ！」
これまで経験したことの無い、体の最も深い部分から込み上げる身震いするような快感に身悶えしながら叫んだ。

丹念に後の孔の粘膜を内部から刺激され、ジワジワと沸き上がるその不思議な快美感に酔い痴れる剛沢の愛人達であった。

「さつきは私たちのオシッコをご馳走したけど、今度は大きい方もご馳走出来そうね・・・、
アアッ・・・」

裏門を突き破って秘めたる敏感な粘膜を舌先で内部から掻き回す刺激に、新たな内奥の筋肉の蠢きを誘起され身悶えながら口走るのであった。

「貴方は相手がないから、私が突き刺して上げるわ！」

仰向けの姿勢で顔面を春華に押さえ込まれている曉美の股間に銀子が張り型を突き立てた。春華の尻穴に舌を這わせながら、不可思議な被虐の本能に煽り立てられ、愛液を垂れ流す、曉美の牝芯に太い張り型がズブズブと埋め込まれて行った。

その張り型の動きに励まされるように、曉美が春華の肛門内に舌先を突き入れた。

曉美の巧みな舌使いに春華が快感に悲鳴を上げた。

銀子が張り型を前後させる度に、曉美の股間からは激しく愛液が噴き出し、その動きが春華かの肛門を責め立てる舌先に伝わり、快感に体を悶えさせる二人の女が居た。

アアッ！アアーッ！晴江の舌技を受けていた亜紀が、晴江の上で大きく上体を反らせて大声を上げて絶頂に達した。

興奮してすっかり柔らかくなった前の孔からは、熱い愛液がどっと噴出し、ストッキングの上から晴江の顔を濡らした。

亜紀に続いて、お竜の技巧を堪能していた香住が絶頂に達し、愛液をぶち撒いた。

「ああ、とても良かったわよ！このご褒美に何か私たちもお返しをしないとイケないわね・・・」

いまだに小さく痙攣を続ける後の肉洞に晴江の舌を残したまま、亜紀がウツトリするように呟いた。

「香住さんもどう？」

と、目の前で快感の余韻に浸る香住に声を掛けた。

「ええ、良いわよ。亜紀姐さん・・・」

「それじゃ一所に行くわよ・・・」

女達の直腸の深部で突如リズムカルな蠕動運動が始まったことが、内部に残ったままの舌先から伝わって来た。

そして間もなく、腸の奥深くからエグ味を持った苦い塊が送り出されて来た。

晴江達は、たちまちの内に口内を占領する、いがらっぽい味覚の固形物による窒息の恐怖に怯え、眼を白黒させながら、嘔吐を堪えて必死に飲み下そうと努めた。

女達が口内に放出された汚物を吐き出してしまうまいよう、女達を励ます様に銀子が女達の体を鞭打った。

かつてはヤクザ社会の頂点に居た女達が苦悶の呻き声をたてながら喉の筋肉を痙攣させて、死ぬ思いで汚辱の塊を飲み下して行く様子に、狂おしいまでに嗜虐の快感が込み上げて来た剛沢の愛人達は勝ち誇ったように甲高い笑い声を上げ続けるのであった。

その後も晴江達は残忍な剛沢の女達が満足仕切るまで、女ならではの残酷で隠微な責めをその身に受け続けたのであった。

娼婦^{たしな}の嗜み

いよいよ晴江達元目高組の女達が、最も恐れていた日がやって来た。

元目高組出身のヤクザ者も混じる一団がガヤガヤと大声を上げ、笑いさざめきながら近づい

て来るのが聞こえた。

その中には、晴江達の娼婦としての初陣と言う事で、銀子や大亜門戸会の男達に混じって剛沢や剛沢の愛人達も物珍しげに三人の女を幽閉する牢にやって来た。

元目高組の女達を閉じ込めた牢は幅の広い通路を挟んで、両側に二部屋ずつ合計4部屋の独房となっており、それぞれの独房に晴江とお竜と暁美が入れられており、一部屋は何も無い空き部屋となっていた。

独房と独房の間はコンクリートの厚い壁で仕切られており、両側と奥の三面も窓も何も無いコンクリートの壁であり、唯一通路に面する一面は鉄格子造りとなっており通路から中の様子を余さず監視できる様になっていた。

事実、通路の天井部分には空調装置の開孔部が設置されているだけでは無く、複数の監視カメラが設置されており鉄格子越しに常時内部の様子を監視できる様になっていた。

その様な個人のプライバシーを護る物は何も無い牢獄の中にあって、壁には明るい女性好みの壁紙が貼られ、床に毛足の長い絨毯を敷き、豪華なクィーンサイズのベッドが置かれている様子は、或意味滑稽な違和感を醸し出していた。

通路の一旦は袋小路の壁となっており、唯一外に解放している面も一面鉄格子の扉となっており、常時施錠されており、更に各独房の鉄格子の扉も常時施錠されているため、事実上この厳重な警戒を突破して女達が脱走するのは不可能で在った。

外に面する大きな鉄格子の扉を閉ざしていた大きな南京錠をガチャガチャと音を立てて外し、ギイと軋ませて鉄の門を開けると、幾人もの残忍な男女が楽しげに笑い声を上げながら牢舎の中に入って来た。

そしてまるで檻越しに動物園の猿を見物する様な好奇心で、ベッドに横たわる女達を見詰めた。

「さあ！起きるんだ！・・・お前達の初めてのお客さんが、もうこちらに向かっているところだから、お前達も起きて準備をしないとな。」

剛沢が声を上げた。

鉄格子の向こう側から見詰める男達の冷酷な目に晴江達は布団にくるまったまま恐怖を感じていた。

とうとう誰も救助に来なかった！自分達が全財産を提供して、更に素っ裸の土下座という羞

恥と屈辱を味わった末に命を助けてやった赤石達幹部は、傷が癒えたので屋敷から出してやったと剛沢は言っているが、一体今まで何をしているのか？助けられた命の恩返しをするため、直ぐに目高組系列の残党を掻き集めるなり、村崎会の親分に助けを求めるなり、何なりと手段は在るはずでは無いかー

頼りにしている仲間に救助され、この性の地獄の屋敷から脱出出来る事を一縷の望みとして、この一ヵ月余りーそれはジリジリと焦るような気持ちで救出を待ちわびる女達には数年の長さの様にも感じられたがー並の女が一生掛かって交わる回数以上とも思える程、男との交接を行い、普通の女なら一生実行する筈のない激烈な性のテクニックの習得を耐えて来たのに・・・

布団を頭から被りながら晴江は、悔しげに唇を噛んだ。

このままでは本当に金で身体を切り売りする売春婦にされてしまう。

裏の世界では情報が伝わるのは速い。もし、目高組の女達が娼婦に墜ちたと云う噂が流れたら自分達は二度と他の組の親分さん達と顔を合わす事も出来ない世間に顔向けも出来ない落魄れた女に成ってしまうだろうーと、悲惨な将来を予想すると胸が掻き毟られるような暗い気持ちに襲われるのであった。

その時、独房の扉の鍵がガチャリと開けられ、男達がドヤドヤと中に入って来て、横たわる女達の布団を一機に剥ぎ取った。

そこには全裸で横たわる女が居た。

男達は有無を言わず女達の手を掴むと乱暴にベッドから引っ張り出し、立ち上がらせると、女達のか細い悲鳴や儂い抵抗を無視して、背中を押して独房の狭い扉を潜らせようとした。

「どうだ？お前達は、お部屋に居る時は何時も股座に何か突っ込まれて寝ていたが、今日は何も付けてないから腰が軽いんじゃないか？」

独房の鉄格子の扉は低くて狭いため、出入りの際は、腰を折って潜らなければならないため、何時も股間に埋め込まれた性具が女達を内側から虐め、腰を振るわせ悲鳴を上げさせたものであったが、今日は性具を陰部に埋め込まれていないので、平然と潜り抜ける様子を見て男が声を掛けた。

「久しぶりに何も穴に入れずに寝たんで、良く眠れたんじゃないか？それともお股の間が寂しくて良く眠れなかったか？」

と、腰を屈めて独房から表に出る暁美の良く張った尻たぶの狭間に指を這わせながら聞いた。

突然男の無骨な指が剥き出しの秘裂の間を撫でたのでヒッ！と小さく呻き声を上げて身体がビクッと震えた。

男が口にする様に、この一月余り寝る時は、常時、銀子の用意する淫靡な器具に苛まれていたので、何時の間にか何かを女体内に入れて貰わなければ物足りない様な気持ちになっている自分に気付いて、口惜しい思いに浸るのであった。

暁美自身に記憶は無かったが、銀子により改造された女体は、満たされぬ物を求める様に、睡眠中何度か無意識に指先で股間を慰めていたのであった。

そして、それは晴江やお竜の同じであった。

度重なる屈辱的な調教により、男に恥ずかしい部分を撫でられても男の手をはね除けて抵抗する気力も女達は無くしているのを良い事に、暁美の秘所を背後から嫌らしく撫で回している男が、その内部が既に十分に潤っているのを発見して大声を上げて笑い出した。

お竜や晴江の檻からも同じような笑い声が聞こえていた。

「お前は少しの間に、何て淫乱な身体になったんだ！下の口がお腹を空かして、早く何かを喰いたいようーって涎を垂らしているぜ！まあ、もう少し待ってろ。今に客が下の口に色々な物を入れてくれるさ！」

別の男が女の居なくなった部屋の中に異常が無いかあちこちを点検して回った。

テーブルの上はまだ箸の付けられていない食事を見つけて、

「何だ！まだ食べてなかったのか？折角お前達の新しい門出の饂飩はなむけに、お赤飯と鯛のお頭付でお祝いの膳を用意してやったのに！」

と、詰るように声を上げた。

女達にしてみれば、これ見よがしの祝膳などとても箸を付けられる心境では無かった。

「これから狒々ひひじい爺おやじみたいな精力絶倫のエロ親父と対峙しなければならぬのに、しっかりと食べておかないと体力が持たないぞ！」

と、言うと、次に部屋の隅に置かれていたポリバケツに歩み寄った。

それは女達に小用を足すために宛がった物であったが、蓋を開いて中を確かめた。

「何だ！お前オシッコをして無いじゃないか！」と、詰るように言った。

連日の溜まりに溜まった疲労感と久しぶりに股間に異物を押し込められていない開放感で泥の様に眠ってしまい、睡眠中に尿意を意識しつつも、眠りを醒ます事が億劫に感じて、途中で起きて排尿する事が無かったのだった。

しかし、昨夜から長時間排尿していなかったため、暁美の膀胱はパンパンに張っていたのも

事実であった。

その上、この数日排便も許されておらず、暁美の下腹は膀胱も大腸も重苦しい膨満感を感じていた。

そして、それは晴江もお竜も同じ様であった。

「何時もだったら先ず、調教前にオシッコさせたりウンチさせたりするんだけど、今日は、どうせお客様の見ている前でする事になるのだから、もう暫く我慢してて頂戴ね！どうしても我慢出来なくなったら、お客様に『ネェ、オマルを当ててー』で甘えた声で、お願いするのよ！」

内部から衝き上げる張りに無意識に下腹を押さえる女達の仕草を目に止めた銀子が含み笑いを浮かべながら声を掛けた。

これまで男を男とも思わないような、威勢の良い態度を見せていた女達が甘えた声で男に甘える姿を想像して、男達が笑い声を上げた。

「もっとも、すんなりオシッコさせて貰えるかどうかは分からないけどね・・・」

体内から込み上げる排泄欲に顔を曇らせる女達に銀子が皮肉な笑みを浮かべた。

女達が連れ出された中央の通路には剛沢や剛沢の愛人達が立っていた。

剛沢達の前に整列させられた三人の女に向かって、

「お前達、少しの間にザーメンの匂いが体中からプンプン立ち昇る様な良い女に成ったじゃないか！これなら客の喜ぶ立派な娼婦と成れることだろう。」

と、起立する女達の間近に寄り、そのしなやかに脂肪を溜めた肌を撫で、体臭を嗅ぐような仕草をして、

「昨日言った通り、今日からお前達には客を取って貰う。先ず客を迎える準備をして貰おうか・・・」

と、袋小路の通路の壁の方に顎で構った。

其処には三面鏡付の大きな化粧台が三台並べて設置してあり、その上には数々の化粧品が並べられていた。

剛沢に無言で示された様に女達は怖ず怖ずとそれぞれの鏡台の椅子に腰を降ろした。

女達の背後に寄り添う様に立つ剛沢の愛人達が鏡台のスイッチを入れた。

正面の三面鏡に女達の顔が明るく照らし出された。

この剛沢の屋敷に幽閉されてから初めて見る自分の顔であった。

連日の荒淫で少し^{やつ}衰れ、頬も一回り細くなった様感じた。

鏡に食い入る様に見詰める女達に、剛沢の愛人達が口の端に含み笑いを浮かべて、櫛を手にする、優しく女達の髪を梳き始めた。

ドライヤーやカーラーも使って、晴江とお竜の髪は美しく和風にアップに盛り上げられ、暁美の長い髪は緩くカールしながら自然に流した。

「ほら！良く似合っているわよ！」

郷沢の愛人達が出来映えに感激する様に声を上げた。

「今度はお顔も綺麗にしないとね！」

顔にファンデーションを塗り下地を造り様々な高級化粧品を重ねて行った。

「ほら！とっても綺麗よ！女の私たちが見ても惚れ惚れするわよ！」

ほんのりと頬に紅を載せ、薄くアイシャドーを引き、唇を口紅で飾ると、其処には荒淫で衰えた陰は無くなり美しい女達が鏡に相對していた。

元目高組の女達は何らの感情も表に出すこと無く、まるで命の無い人形の様にじっと座ったまま化粧を施されていくのであった。

周囲を取り囲む男達も美しく変身していく女達をウツトリと見詰めていた。

「ほほ、並み居る男を次々と蹴倒して来た男勝りの鉄火姐さん達が、これから男に抱かれるために化粧をして行くなんで傑作じゃない！」

銀子が堪えかねたように甲高い笑い声を上げた。

銀子の哄笑に寂しげに目を閉じて唇を噛みしめる女達であった。

「ほら出来たわ！まあ何て綺麗なんでしょう！こんな美女を見たらお客のエロ爺達は涎を垂らす事請け合いよね！」

以前から美人侠客として、この世界に名を売って来た晴江とお竜であり、女の常として日頃、化粧はしていた訳であるが、その化粧方法は男社会の中で自分の強さや権勢を示すような、ある種の伶俐な凄絶さを表すものであったが、今は男に魅せるための成熟した女性の美を引き立てるように化粧を施され、その打って変わった凄艶な美貌に思わず見惚れてしまう男達であった。

一方暁美も二十歳を過ぎたばかりの、まだあどけなさの残る顔に、厚くシャドーが引かれ、男の劣情を刺激するような艶麗な娼婦の顔に作り上げられていた。

剛沢の愛人達は、化粧を終えた女達を満足げに見詰めた。

「香水も塗っておきましょうね・・淑女の嗜みよ。」

亜紀が香水のスプレーを手にするると晴江のうなじに吹き掛けた。

それを真似て春華と香澄も香水を手にした。

「亜紀姐さん、脇の下やオッパイにも良く香水を附って上げてね。」

銀子が後ろから声を掛けた。

判ってるわーと、銀子に言われるままに裸の女達の上半身に香水を振り掛けていった。

「この後は私がやるわ！」と言うと銀子が進み出て晴江の前に立った。

この限りない残忍性を持った女に正面に立たれて晴江は不気味な気配を感じた。

「ほら！股を開くのよ！」

と、邪険に命じて、椅子に腰掛けたままの晴江の太股を掌で叩いた。

銀子に気圧される様に、怖ず怖ずと晴江が股間を開いて行った。

一度は剃り取られてしまった股間の春草であったが、今は以前の様に生え揃い柔らかで艶やかな繁みを取り戻していた。

銀子は鏡台の引き出しからガラスの小瓶を取り出すと蓋を開けて自分の指先に中身を取り出した。

すこしドロツとした透明の液体で在った。

そして、その液体を塗された指を晴江の春草を搔き分け、秘裂に押し当てた。

あっ！と晴江が声を上げて身体がピクッと震えた。

二つの柔らかな肉の狭間を押し分けてドロリとした液体を載せた銀子の指が内部を撫で回した。

その少しヒンヤリとした粘帖な液体の感触に晴江の股間が疼いた。

「貴女も初めて会った男にここの生の匂いを嗅がれるのは嫌でしょう？これは女の此処の匂いを隠して、男の劣情を刺激するための香料よ！・・ここを何時も良い匂いにしておくのも売春婦の嗜みよ！」

と、口の端に笑みを浮かべながら秘孔の奥深くまでその香料を塗り込めていった。

「今度は椅子から降りて床に四つん這いになるのよ！」

見守る男達の前で全裸のまま四つん這いの姿勢になるのは屈辱であったが、銀子の命令に逆らう事も出来ず、無言のまま床に手脚をつき、銀子に向けて尻を高く擡げた姿勢を取った。

銀子は更に股間を大きく開く恥辱の姿勢を取るように命じた。

銀子の前に隠されていた菊花がハッキリと露出していた。

「今度はこっちよ！」

銀子が別の硝子瓶を手にした。

そして、そのドロツとした透明の液体を指に塗すと、銀子に向けて剥き出しとなっていた菊の蕾に押し当てた。

その恥ずかしい所を撫で回す銀子の指先に再びヒツと呻き声を上げて腰をビクッと震わせた。

銀子が後ろの穴用と説明する特別な香料を含むネットリした液体を丹念に菊花の皺を一本一本伸ばす様に塗り込んで行った。

「大概のセックスに飽きたお客様の中にはこちらを愛する事が好きな人も大勢いるのよ！中には肛門鏡を使って、裂ける寸前まで思い切り押し開いて、懐中電灯で照らしながらお腹の中まで見たがる人もいるのよ。貴女も肛門を思い切り広げられて、直腸の中のウンチの臭い匂いを男の人に嗅がれるのは嫌でしょ？」

再び香料を指にすると肛口の内側の襞を表に捲り上げるように塗り込めて行った。

そのネットリとした淫靡な指先の感触に晴江がヒイヒイと声を上げた。

「もっともお客様も何度も関係して慣れて来たら、生の匂いを嗅ぎたいって言うかも知らないけどね・・・」

額に脂汗を浮かべて堪える晴江の後口に指の根元まで押し込んで香料を塗りたくるのであった。

「今日は初めてだから皆んな親切にお化粧品や身繕いを手伝って呉れているけど、今度から自分でやらなければ駄目よ！こちらはオコ用、こちらがアヌス用よ！」

「オコ用とアヌス用でどう違うんだ？」

剛沢が興味深そうに銀子に尋ねた。

「香水と言うのは良い匂いのする物だけで無く、態わざと悪臭の物も少しだけ加えて調合するのよ。この悪い匂いが陰で良い匂いを引き立てるのよ。これらの香料にはアソコとお尻の悪臭成分を利用して良い匂いになるように調整されているのよ。」

銀子の説明に剛沢をはじめ男達が納得したように肯いた。

「ところで銀子、此奴こいつらは今日が初めての日だ。流石に皆 処女ではないが、初めての客の心をくすぐる様に封印して置きたい。準備は出来ているか？」

出来ているわよ！と、銀子が大きな紙袋を持ち上げて剛沢に示した。

袋から取り出したのは、キラキラと輝く金色にメッキされた金属製の貞操帯であった。

「これを嵌めて行って、お客様の手で封印を開いて頂くのよ！」

銀子が貞操帯を手にして三人に見せ付けた。

「それじゃ俺たちが取り付けてやるぜ。」

周囲で見ていた男達が、化粧を終え、全身に余すことなく香料を擦り込まれた女達を好色な目で取り囲んだ。

「へへ・・・良い匂いがするじゃないか？花の様な甘い匂いだぜ！」

これまでの肉体改造を通して女達の汗と体液の臭いしか接していなかった男達は金属製の貞操帯を手にしたまま、うなじや乳房に塗された香水の匂いにウットリした様に呟いた。

「ほら！もっとお股を開くんだ！・・・へへ、悪臭の様な芳香の様な、まるでマ███の匂いを百倍強烈にしたような・・・お股の間から男心を擽る様な妖しげな匂いが立ち昇って来るぜ！こんなに雌のフェロモンをプンプン撒き散らされたらスケベ親父達も一機に頭に血が昇って青筋立ててチンポ押し立てるだろうぜ！」

女達の柔肌に鼻を押し付ける程顔を近付けて、クンクンと女体から立ち昇る匂いを楽しみながら、T字状の貞操帯を尻の上に押し当てると、金属製の腰ベルトを腹の方に回して、女達の股を開かせ、股間を通してこんもりと盛り上がった痴丘を^{かたど}模った前袋の部分を前に引き寄せた。

女達は無抵抗なまま男達に貞操帯を取り付けられて行った。

背中から腹に回った腰ベルトに股間を潜ったハート形の前袋が重ねられ二個の南京錠を使って固定された。

カチャリと南京錠が乾いた音を立てて施錠され、腰に固定された貞操帯を周囲の男女が好奇な目で見詰めた。

其処には全裸に金色に輝く貞操帯だけを身に付けた三人の女が羞恥で両手で顔を覆ったまま直立していた。

「へへ・・・良く似合っているじゃないか！スッポンポンより数段エロいぜ！」

と、ネットリした目で見詰め続けた。

「さて、これを着て！幾ら売春婦と云えど最初から素っ裸でお客様の前に出たら、お客様も興ざめになってしまうからね！」

銀子が三人のために誂えた衣装を手にした。

晴江用には黒に近い濃い色の留め袖、お竜用には賭場で着用していた着物に近い白い着物で

あり、暁美用には光沢の有る赤いシルクのチャイナドレスであった。

剛沢の愛人達も手伝い、肌襦袢を羽織らせ、腰巻きを巻き付け、着物の上から帯を結わえ、女達に着付けていった。

「まあ一凄く綺麗！本当に良く似合っているわよ！」

着付けの終わった女達を惚れ惚れと見詰めた。

瀟洒な和服を着こなした晴江もお竜も、チャイナドレス姿の暁美も見惚れる程美しく、これまで三人の全裸姿を見慣れてきた男達には逆に新鮮な驚きに映った。

其処にはこれまでの恥辱の肉体調教に呻吟していた女々しい女の姿は無く、きつとした淑女の立ち姿が在った。

しかし、この清楚で気品の在る姿をした女の下腹は、外観からは全く想像できないが、金色の貞操帯が覆っているのだと思うと倒錯的な感慨に浸るのであった。

「それじゃ、客も到着したようだからそろそろ行こうか・・・」

何時までもシゲシゲと見詰め続ける男女の輪の中に居る女達に声を掛けた。

「大怪我したお父さんの治療費を稼ぐためでしょう！辛くても苦しくてもお金を稼ぐためだと思ってじっと堪えるのよ！」

牢舎から連れ出され、怯えた表情を浮かべ自分達を買った客の元に歩み始めた暁美を励ますように銀子が声を掛けた。

大亜門戸会の事務所の地下に幽閉されていた元目高組の女達に取っての地獄の施設から久しぶりに表に連れ出されたので、降り注ぐ陽光が三人の目に眩しかった。

そんな女達の様子も気にする事無く、客の待つ建屋に向けて芝生の庭へと男達から肩を押された。

三人の周囲を大亜門戸会の男女が興味深そうに取り巻きながら続いた。

久しぶりに晴れ渡った青空の下を歩く晴江達であったが、心は晴れる事は無かった。

この屋敷に連れ込まれて以来、全ての衣類を奪い取られ、淫靡な性具を装着したT字帯を下腹に着けられる以外、肌身を隠す一遍の布切れも身に付ける事が無かったが、目高組の大姐として君臨していた頃に身に着けていたような豪華な留め袖を身に纏い青空の下を歩くと、ホッとするような気持ちになった。しかし、その高価な着物の下で、下腹にピタリと密着した貞操帯の冷たい金属の感触が、否応なく現実に戻すのであった。

このままでは、剛沢の望み通り最下層の娼婦に墮とされてしまう一と、晴江は心の中で焦っ

た。

牢から表に出されたのだから、いっそうこのまま暴れ出して周囲の男達を蹴散らして逃げようか？

しかし、横には剛沢が居る。この剛沢の力の前では女達が三人掛かりで襲い掛かっても勝てる見込みは無いだろう。

それに今は大怪我した親分を人質に取られている様なものだ、ここは諦めるしか無い。

お竜も暁美の同じ考えの様だと背中で感じていた。

中庭を横切って女達を閉じ込めた地下牢から客の待つ売春部屋の在る建屋までは、大した距離では無かったが、あれやこれや千々に心が乱れる女達には永遠の長さにも、また刹那的な短さにも感じていた。

そして女達を残酷な現実突き戻す様に、とうとう三人は客の待つ建屋に到着した。

建物の中に入り、逃れようの無い状況にすっかり諦め切った思いの三人はそれぞれの部屋に分かれて連れて行かれた。

晴江には剛沢が付き従った。

「長らく待たせて済まなかったな・・・」

剛沢が晴江を連れて、和風の造りの格子戸を開けながら中で待機していた客に声を掛けた。

「いや、こちらも今着いたばかりだ・・・おお！後ろが晴江姐さんか！以前一度何かの会合ですれ違った事が在るが覚えているかい？」

畳の上に胡座をかいて座卓の上に置かれた酒を手酌ですするデップリと太った、頭が薄くなつた、脂ぎった中年男を見て晴江の顔色が変わった。

「どうやら覚えていてくれた様だな？」

良く陽に焼けた顔に酒の酔いも混じった赤ら顔でニヤッと不気味な笑みを浮かべて訊いた。男は評判の悪い土建業を営んでいる男で、工事案件を廻って目高組の系列の土建会社と競合する事が多く、晴江もこの男の顔を良く知っていたのだった。

「去年の小俣川岸土地改良区工事の案件では九分九厘俺達が落としていた物件を横から出て来たお宅らに搔っ掠われてしまったよ。お陰で大儲けし損ねたぜ！それだけじゃ無い。これまでも色々美味しいところを横取りされて来て、一度折り入って挨拶に伺いたいと思っていたところだったが、こんな形で会えて嬉しいぜ！」

男は残忍な目付きで青ざめた表情を浮かべる晴江を睨み付けながら喋った。

「それじゃ当人同士で積もる話も在るだろうから、俺はお暇^{いとま}するぜ！晴江の鍵は此処に在

る。」

と、貞操帯を施錠している鍵を手渡した。

小さく肯いて南京錠の鍵を受け取った男は、全てを理解した様に目をギラリと光らせると口元を淫靡に歪めた。

それじゃ、ゆっくり楽しんで言ってくれーと、言い残すと剛沢が姿を消した。

後には晴江と男だけが残された。

「其処に居たんじゃ話も出来ねえ。もっとこっちに来ねえ！」

青ざめた顔で上がり ^{がまち} 框に佇む晴江に男が声を掛けた。

晴江は何の抵抗も出来ず怖ず怖ずと男の傍に近寄った。

以前、遠くから見かけた時は何て綺麗な女だろうと思っていたが、こうして近くから見るともっと綺麗だぜ。」

と、手酌で注いだ酒をなめながら、晴江の全身を淫靡な目で上から下まで嘗め回す様に見詰めながら言った。

「ほら、着物の裾を捲り上げてみな！」

目の前で直立する晴江に自らの手で裾を捲り上げるように命じた。

はいーと、小さな声で俯きながら着物に手を掛けた。

そして怖ず怖ずと男の目の前で裾を持ち上げていった。

白い足袋が露わになり ^{くるぶし} 踝から雪の様に白い脛が露わになった。

男は好色な目の色を浮かべて顎で更に捲り上げるように杓った。

やがて鮮やかな刺青を施された柔らかな肉置きのお股が、男の目の前にソロソロと現れた。

大腿を飾る色鮮やかな彫り物と刺青されていない内股の部分の青や赤の血管が微かに透けて見える白く滑らかな肌の鮮やかなコントラストに男の喉がゴクリと鳴った。

「ほら！もっとたくし上げ無いか！」

肝心な股の付け根の部分を残して、晴江の手の動きが止まった事に、男が苛ついた声を上げた。

「ああ・・・恥ずかしい・・・」

晴江は目高組に恨みを持つ男の目に自分の股間を晒す事に激しい羞恥を覚え、ブルブルと脚を震わせていたが、男の剣幕の前に遂に最期の部分まで裾を持ち上げた。

今や晴江の着物は帯の下辺りまで持ち上げられ、着物の間から柔らかな下腹が除いていた。

「おお！これか？」

男は晴江の着物の下で秘所を覆う金色に輝く貞操帯を見つけてニヤリと笑った。

男は晴江に着物の裾をはだけさせたまま、にじり寄り滑らかな曲面を描く金色の鏡面に歪んだ自分の顔を映し、スベスベする表面を撫で上げた。

その部分はビーナスの丘と呼ばれる女性の柔らかな曲面を模しており、実際晴江のその部分を立体的に計測し、型取りして作ってあるため、男がツルツルとした金属面を撫で回す度に晴江は貞操帯の薄い金属板を通して、素肌を触られている様な気味の悪い感触を抱いていた。鼻を押し付けるように晴江の貞操帯の上を翳っていた男は、それに飽きたのか後ろを向くように命じた。

着物の裾を背中までたくし上げて、晴江がその豊かな尻を男の方に向けた。

極彩色の彫り物を施された二つのふっくらと丸みを帯びた尻の柔らかな肉の狭間を金色のメッキを施された細い帯の様な金属帯がまるで禪の紐の様に割っていた。

男は剥き出しになった臀部に近づき、二つの柔らかな肉の丘に手を掛け、そのまま左右に押し開いて、その細い金属の帯が狭い狭間に埋め込まれるように通る様子を確認した。

力一杯双臀を左右に押し広げられる苦痛と羞恥に晴江が小さく呻き声を上げた。

突然、男は晴江を前に蹴り倒したので、尻を剥き出しにしたまま畳の上に転んでしまった。

男の目の前には形の良い尻を山の様に天井に向けて俯せに伏す晴江の姿があった。

「ほら！もっと脚を広げるんだ！」

男が晴江の尻をピシャピシャ叩きながら命じた。

男が良いと言うまで、両脚をジワジワと開き、今や男の目の前には貞操帯がクッキリと上下に通る双臀の谷間がハッキリと見えた。

極彩色の彫り物と白い肌と金色の金属の織りなす鮮やかなコントラストに男の喉が鳴った。

男の目が天井を向いた晴江の尻のある一点に釘付けとなった。

ビーナスの丘を飾り、秘密の花園を隠す前袋の部分と背中の方に伸びる細い金属帯が蝶番^{ちょうつがい}で繋がっているが、蝶番の直ぐ後の部分—そこは晴江の後口の開孔部の真上に位置するが、その部分だけ丸く拡がり、まるで丸い眼鏡の縁の様に開孔しており、その丸い穴の真下には幾本もの放射状の皺を刻む薄い堇色した淫靡な花が咲いていた。

男は魅入られた様にその部分に顔を近づけるとクンクンと匂いを嗅ぐ仕草をし、その妖しげな匂いを立ち昇らせる陰華に誘惑されたのか、舌を延ばして貞操帯の金属の輪越しに晴江の後口を嘗め始めた。

その不気味な仕草に晴江は尻を男に向けて高く持ち上げたままヒイヒイと小さく呻き声を上げ、尻を細かく振るわせた。

男は右手の中指を一本立てるとそのまま男の口技で柔らかくなった肛口にズブリと突き立てた。

ヒッ！と悲鳴を上げて晴江の尻がピクッ震えた。

男は肛口の筋肉の締め付け具合と暖かな内部の感触を楽しむ様に指で直腸内を撫で回した。

男のゴツゴツとした太い指で内部をまさぐられる不快感に晴江が腰を振って反応した。

ここ数日間排便を許されておらず、水分を失って固化した便塊が肛門の傍まで降りて来ており、直腸内部を搔き回す男の指先に触れた。

その硬化した粘土の様な幾つかのゴツゴツとした塊を指先に感じて男が口の端に淫靡な笑みを浮かべた。

男の指で直腸内に溜まった便塊を搔き出される痛痒感とそれに刺激されて腸全体の蠕動運動が誘起されつつある事を意識させられウウッと呻き声を上げた。

暫く晴江の腸内を探索した男は満足した様に指を引き上げると、

「さて、これが晴江姐さんの鍵か、さて鍵穴は何処かな？」と、太くて長い金色の南京錠の鍵を手にして探し回る仕草をして、「鍵穴は此処かな？」と貞操帯で唯一開孔しているリング状の部分の真下に見える後口に大きな鍵を突き立てた。

突然腸内に固いゴツゴツした金属棒を刺し入れられ、激痛に晴江が悲鳴を上げた。

男はそんな身悶える晴江の姿を面白そうに眺めながら、「おや？開かないな？」と腸内に突き立てた鍵を何度も左右に捻った。

鍵の先端のギザギザに刻まれた矩形部分直腸の内側を搔き穿った。

「鍵が違うのかな？それとも鍵穴が違うのかな？」

と、鍵を体内から抜き出した時、先端の矩形の櫛状部分に僅かに便塊が付着しているのを発見して大声で笑い出した。

優美にアップに結われた髪を驚掴みにして、顔を自分の方に向かせると、先端に茶褐色の汚物の付着した鍵を、目の前に突き付けた。

「ほら、自分のウンコや！嗅いでみろ！」

と、鼻に押し付ける様にした。

そして、更に「こちらが本当の鍵穴かもしれんな？」

と、晴江の鼻腔に鍵を差し入れようとした。

何時までも続く男の陰險な虐待に堪え切れなくなった晴江が泣き声を上げ始めた。

権勢を誇ったヤクザの一家の大姐が身も世も無く悶え泣きする様子に、益々嗜虐の欲望を燃え立たせた男は、

「そうか、そうか・・・量が少なくて臭いが分からなかったか？それじゃもっと沢山^{たく}揃ってやろうな・・・」

と、再びズブリと肛門内に鍵を根元まで深く突き立てた。そして腸内に残留する汚物を絡め取る様に、差し入れた鍵をゆっくりと左右に回した。

貞操帯に開いた唯一の開孔部を通して、男に弄ばれる苦痛と屈辱感と羞恥に堪え切れなくなって、何時しか、「速く晴江を裸にして抱いて下さい！」と、自分に敵意を持つ男に叫ぶ様に哀願していた。

晴江の悲鳴の様な叫び声に、男は好色な笑みを浮かべて、「そうかい、そうかい、僕のチ[■]■が欲しくなったのかい？」と、鍵を晴江の肛門に突き刺したまま、ズボンのベルトを弛め始めた。

慌ただしくズボンを脱ぎ落とすと、ステテコ姿の男の股間はまるでテントを張った様に盛り上がっているのが晴江の目に入った。

男はステテコとパンツを同時に一機に脱ぎ落とした。

其処には、これまで数多の女の秘部を貫いて来た肉塊が黒々とそびえ立っていた。

既に晴江に対する肉体的精神的蹂躪で嗜虐の快感に酔っていた男のモノは隆々と前に突き出し陰茎の先端からは、晴江の柔肉に期待する様に透明の粘液が時染み出していた。

男は晴江の後ろ髪を鷲掴みにすると、熱く興奮する自分のモノに晴江の美顔を押し付けた。晴江の間近に、度重なる女達との交接を通して鍛えられた黒や赤の斑模様を浮かべる醜い男根が目に入り、獣じみた不快な臭いが鼻腔を衝いた。

晴江は崖から身を投げる思いで、その不潔な肉塊に唇を寄せて行った。

柔らかな唇で敏感な表面を撫で、舌尖で快感のスポットをじっくりと嘗め回した後、今は口内いっぱい男のモノを含んでいた。

音を立てて啜り上げる晴江の口技に満足の笑みを浮かべた。

晴江の口内に乱暴に突き立て、舌と口内全体を駆使した愛撫を受けながら男は傍らに用意された麻縄の束に手を伸ばした。

そして瞳に残忍な光りを浮かべて、両手で縄を扱きながら、畳の上に^{ひざまず} 跪き一心不乱に嘗め回す晴江の手首を掴むと、両腕を背中に交差させた。

被虐の労働の代償

夜のS市の歓楽街にある一件のとあるクラブ

クラブのマスターが暇そうに店内を見渡していた。

最近は、景気が悪くて随分客足も落ちたもんだーと、独り言を呟きながら愚痴った。

ついこの間までは、バブル景気に浮かれて羽振りの良くなった連中で、この界限も深夜まで飲み明かす酔客が引きも切らず、終電が終わっても飲み続ける客を目当てに、表の通りにも客を待つタクシーが列を作っていたものだ。

それがバブル崩壊後の景気後退と、この歓楽街の縄張りをめぐる目高組と大亜門戸会の抗争が重なったものだから、パツタリと客足が途切れてしまった。

さっき一組の客が出て行ってから、しばらく来店する客もいない。

店の女達も暇そうにソファに座って内輪話に花を咲かせていた。

その時ドアに取り付けられたカウベルを鳴らして、一人の男が店に入って来た。

「いらっしやいませ！」と、マスターが嬉しそうに玄関に顔を向けた。

その来店客の顔を見て、ゲッ！赤鬼だ！と、マスターが心の中で叫んだ。

しばらく見ない内に、げっそりと痩せ、目もトロンとして生気も無く、やつれて見えるが、その男は確かに目高組の赤鬼と呼ばれている赤石であった。

目高組が突然解散し、S市のシマも大亜門戸会に移って以来、今まで何処に身を潜め何をしていたのか知らないが、今や大亜門戸会が占めるシマのど真ん中に目高組の最高幹部が現れたことによりトラブルに巻き込まれる事を恐れたマスターは、咄嗟にレジを開き、中に在った数枚のお札を鷲掴みにした。

「赤石さん！悪いことは言わねえ。今は世の中が変わってしまったんだ。ここに居てはいけねえよ、今夜の処はこれを持って帰ってくれ！」と、必死に赤石にお札を握らせようとした。

怒りを露にした赤石はマスターを弾き飛ばすと、

「ふざけるんじゃねえ！俺はこんな端金欲しくてここに来たんじゃねえ！酒を飲みに来たんだけだ！酒を飲ませろ！」と、叫き散らした。

仕方なく、マスターが赤石をソファに案内して座らせ、女たちが恐る恐る赤石の周囲に侍っ

た。

テーブルの上にはウイスキーやつまみが並べられ、ともかく酒宴は始まった。

ところが暫くすると、何が気に入らなかったのか、突然赤石がヒステリックな叫びを上げて大声で騒ぎ始めた。

そして隣に座るホステスのドレスの胸に手を掛けるとドレスを引き裂き、露わになった乳房を驚つかみにした。

ドレスを引き裂かれた女が、明石の手を振り払うと、泣きながら胸を押さえて席から逃げ出した。

「女達はうるさいし、酒は不味いし、こんな店で飲めるか!」と、怒鳴ると、目の前のテーブルを足で蹴ってひっくり返した。

床の上には酒やつまみが散乱し、びしょびしょに汚した。

ママが何とか取り成そうとしたが、逆に赤石に頬を平手で打たれて、仰向けに床に倒れこんでしまった。

床に倒れた拍子に、ママの和服の裾が乱れて、肉付きの良い白い脚が露わになった。

その扇情的な姿に劣情を催したのか、明石は床に倒れたままのママの両足首を掴むと、大きく真上に引き上げ、更に左右に大きく捻げた。

薄暗い照明の下に熟れた女の股間が仄暗く映った。

羞恥と恐怖にママが両手で顔を覆って泣き叫んだ。

店の中は女達の泣き声と悲鳴が飛び交い、マスターも手が出せずに啞然として見守るしか無かった。

「お客さん、ここは皆が酒を飲む所だ、もっと静かに飲んで貰わないと他のお客さんが迷惑しますね・・・」

何時の間に現れたのか、玄関に黒いスーツに身を包み、黒いサングラスを掛けた二人の大垂門戸会の男が立っていた。

その二人の姿を目にした瞬間、赤石は何か怯えたかのように顔が青ざめ、動きは止まり、驚つかみにしていたママの両足首を力なく離した。

赤石が手を離した隙に、ママは乱れた着物から太股を丸出しにしたまま、アルコールで濡れた床の上を四つん這いで必死に赤石から逃れた。

以前の赤石なら間違いなく、この二人と格闘になり店の中はめちゃくちゃにされるどころであつたが、何故かこの二人には手が出ないのか、金縛りのように体を硬直させたままの明石は、大人しく黒スーツの男に襟首を掴まれ、まるで猫が首を掴まれて運ばれるように店の外に連れ出されて行った。

後に残った大亜門戸会の男が懐から札入れを取り出すと、

「オヤジ、俺たちがいながらこんな不始末を仕出かしてしまつて済まなかつたな。今夜の処はこれで収めてくれ。」

と、何枚かの札びらを抜き取り、マスターに渡そうとした。

そんなものを受け取ったら後が怖いと、マスターは必死になって固辞した。

「それじゃ、また何かあつたら連絡してくれ、直ぐに駆けつけるから。」

と、言い残すと黒スーツの男は店から立ち去って行った。

「人間落ち目には成りたくないもんだ・・・あれが、かつての赤鬼とは・・・」

店の扉を薄く開けて、外の様子を窺いながらマスターが呟いた。

外の路上では、赤石がさっきの大亜門戸会の二人からリンチを受けていた。

二人の男は赤石に殴る蹴るの暴行を加えていたが、赤石は反撃出来ず、ただ路上に土下座し、ひれ伏し、大声で許しを請いながら二人の暴力に耐えていたのだった。

道行く人がこの光景に足を止めるが、ヤクザ同士の喧嘩と知って足早に立ち去って行った。

最後に大亜門戸会の男が何か大声で叫んだ後、赤石は立ち上がり、泥だらけの姿のまま、二人にペコペコ頭を下げて、薄暗い路地に飛び込んで姿を消した。

「この有様では、今日はもう閉店だな・・・」

溜息を吐きながらマスターが、ボソッと呟いた。

店の中は顔を腫れ上がらせ泣き声を上げる女や、割れたグラスや赤石がひっくり返したテーブルの上の物が散乱していた。

一部始終を見届けた後、表が静かになった事を確認してから、店のドアに閉店の看板を掛けてドアの鍵を閉めた。

路地に飛び込み大亜門戸会の男から逃げた赤石は、そのまま路地を通り抜けて、次の通りに駐車していたワゴン車に駆け込んだ。

赤石を車内に引き込むと中の男達は、ワンボックスカーの扉を閉じた。

「ご苦労だったな、もうクスリが切れて来て、苦しくて仕方ないだろう？用意は出来ているからな。」

車内に居た男が赤石に小さな注射器を示した。

「何時も済まねえな！」と、男の差し出す注射器を嬉しそうに眺めてから、何かに憑かれたように、急いで袖を捲り上げると、右手と口を使って左腕にゴム管を巻き付け、浮かび上がった静脈に、男から受け取った注射器の針を突き立てた。

全ての注射器の中身を注入し終え、ほっとしたようにゴム管を解いた瞬間、グエッ！と一声上げると、全身をピンと硬直させ、絶命してしまった。

赤石の青白い死に顔を見つめながら、男達が乾いた笑みを浮かべた。

「馬鹿な男だぜ！自分で自分に青酸カリを打ちやがった・・・」

白目を剥いて絶命した赤石の凄惨な死に顔を見詰めながら、一人の男がぼそっと呟いた。

「それにしてもウチの親分も恐ろしい人だぜ・・・味方の人間でも敵の人間でも使える者は、とことん使いまわす・・・赤石たち元目高組の幹部をヤク漬けにして、クスリ欲しさに自分たちの思い通りに操れる操り人形に改造してから、S市の歓楽街で色々暴力事件を巻き起こす・・・それで、S市の人間は、まだ逃げ出さずに隠れていやがる目高組の残党を蛇蝎のように嫌い恐れるようになる・・・」

「そして、こいつらが暴れている時に俺たちが颯爽と駆けつける！・・・いわば俺たちはS市の市民にとって白馬に跨った騎士みたいなもんだ！」

と、別の男が話しを引き継いだ。

白馬の騎士という言葉も聴いて、そんな柄かよ？と笑いながら隣の席に座った男が肘で突いた。

前後の座席の間の足下に横たわる赤石の死体を土足で踏み付けたまま、男達が笑い声を上げた。

「まあ、兎に角S市の奴らは、元目高組の人間を恐れて、大亜門戸会に頼らざるを得なくなるっていう筋書きだ・・・最初の内は目高組の時代よりミカジメ料も安くしておけば、目高組を恐れる水商売の連中は喜んで金を払うぜ。まあ・・・後からミカジメ料は高くなるがな・・・」ワゴン車のハンドルを握る男が口を挟んだ。

「幹部の青沼や若親分を除いて、末端の組員を何時までも拘留しておくことは出来ないからな。刑務所から出て来た目高組の奴等も、組は解散して跡形も無く、街の人間は目高組の人間を蛇蝎のごとく嫌っており、街中は大亜門戸会が占めていると知ったら、目高組の天下だ

った時みたいに威張りくさって街を歩くことも出来ず、これまで恨みを買っていた住人から大亜門戸会への密告を恐れて、尻尾を巻いて、こっそりこの街から逃げ出すしかないだろう・・・これで俺たちも目高組の残党の報復を恐れることなく枕を高くして眠れるってものだ。」

「赤石達の姿が街から消えても、俺たちに絞められて怖くなり、S市から逃げ出したと思って誰も探す者は居ないだろうし・・・」

「しかし、この馬鹿達の命を救うために、組を解散して、全財産を差し出してまで、その結果として、今や大亜門戸会の娼婦にまで身を落とすことになるまで必死の思いで命乞いしたというのに、その幹部連中が大亜門戸会のため散々こき使われた挙句、結局、殺されたと知ったら、目高組の女達は歯ぎしりして悔しがらるだろうな・・・全く、お気の毒で見られないぜ！」目高組のトップに君臨していた女達を娼婦に改造するために手を貸して、散々女達の柔肌を食ったチンピラが、その柔肌を思い出してニヤニヤと笑いながら、

「・・・いっそ、あの女達に、お前達の努力は全てに無駄に終わったと教えてやろうか？」と、口では女達に同情するような事を言いながらも実は、目高組の幹部の命乞いのために行った全ての努力が無駄に終わった事を知った時の女達の悲観する姿を見たいという残酷な思いを抱きながら言った。

「止せ止せ！ボスの許可が出ない内にそんな事を教えたら、お前が赤石みたいになってしまうぞ！」

と、大亜門戸会に長く居て、剛沢の事をよく知る別の三下が制した。

「しかし、奈和親分は全身不随、頼りにするべき青鬼や若親分は刑務所の中、最後の頼みの綱の赤鬼達も死んでしまって、救援の見込みが全く無くなったあの女達は、この後どうなるんだ？」

「そりゃ、剛沢親分の目論み通り、金持ちの変態客相手の生け贄に成り下がるのさ・・・」この男達の中で大亜門戸会に一番長く居るチンピラが口を開いた。

「俺が杯を貰う前の話だから、良く知らないが、一度借金で首が回らなくなった水商売上がりの若い娘を連れて来て、変態客専門の娼婦にしたことがあるらしい・・・所が、金で何度も男と寝た経験のある、男あしらいに慣れているはずの女でも三週間と経たない内に発狂してしまったーて、話さ・・・あの女達も何時まで持つ事やら？」

「その頭がおかしくなった娘より不幸なのは、目高組に恨みを持つ男達は裏の世界にゴマンと居るから、元目高組の大姐達が娼婦に身を落としたと聞いたら、大挙して押し寄せて来る

ことになるぜ・・・可哀想に、これじゃ女達も体が持たないんじゃないか？」

と、目高組の女達に同情する様な口ぶりとは裏腹に、腹を揺すりながら面白そうに叫んだ。その後も赤石の死体を乗せたワゴン車を走らせながら車内の男達が口々に女達の今後の悲惨な運命について、勝手な事をほざき合うのであったー

「女達がとうとう最初の客を取ったようですね？」

廊下で剛沢にすれ違いざまに黄原が聞いた。

「そうなんだよー」と、剛沢が恵比寿顔で応えた。

「一人百万円の料金はちょっと高いかと思ったけど、客たちは喜んで払ってくれたぜ！」と、ニコニコ笑いながら続けた。

「お金の借り貸しの事だから、後で揉めるのは嫌だから、俺はお金のことはきっちりしておく性質だ。・・・だから、こんな物を作ったぜ」

と、懐から紙片を取り出すと黄原に見せた。

それは今回の売春の収支の明細書であった。

「ほー、紹介料50万円！」と、黄原が声を上げた。

「売春行為が一番難しく、リスクが高いのが、客の紹介だ。50%なら相場だぜ。そして、残りの50万円の中から最初の約束通り、七三で七が女達の取り分だ。」

「施設使用料が5万円・・・」と、黄原が明細を読み上げた。

「まあ、今回売春部屋を屋敷内に建てたり、色々経費が掛かったから、5万円はその償却だな・・・」

「飲食代が12万円・・・」明細を読み進めた。

「客の飲み食いする酒代は女の持分だ。まあ、次にまた客に来て貰うための、女達が負担する必要経費みたいなものだな・・・」

「器具使用料1万8千円って何んですか？」

「それは、客が使った大人のおもちゃの代金だな。・・・街のアダルトショップでは手に入らないような珍しい特製の性具を取りそろえているから、客も女達を相手に使って見たくなるようだな。・・・まあ、女達が嬉しそうにヨガリ声を上げて、楽しませてもらった物だから、女達が自分で代金を払うのは当然だろう・・・」と、剛沢が胸を張って答えた。

「何ですか？この特別清掃費4万5千円というのは？」と、黄原が明細書を見ながら聞いた。

「ああ、それはウチに来る客は大抵、女達に浣腸したがるものだ。浣腸させられて脂汗に塗れながら苦痛にのたうち回る女たちを酒を飲みながら鑑賞したり、苦痛に身悶えている所に、新たな責め苦を加えるのが大好きな変態客ばかりだからな・・浣腸されて散々我慢させられたあげく、ドバットやれば、飛沫が飛んだり、臭いが残る・・自分たちが放りだした汚いものを組の男達に掃除して貰うんだから、女達が金を出すのは当然だな・・・」

と、シレッとした顔で答えるのだった。

こうして明細書を読み進む内に、女達の手元に残る金はどんどん少なくなって行き、その上に、週に1回の和久井医師による性病診断という怪しげな検査により、性器や全身を弄ばれる診察の診断料を払い、三日おきの全身美容の料金を払い、社員寮の寮費と称する、檻の中の生活費をむしり取られたら、例え一日に何人もの男を相手にして、連日休むこと無く身体を売ったとしても、女達が借金を返すためのお金はほとんど残らないであろうと思った。

剛沢は女一人抱くための売春代が100万円と言っていたが、悪事で儲けた唸るほどの泡銭を抱えた裏世界の金満家達は、他人より早く女を抱きたいと、順番を少しでも早くして貰うためにその何倍もの金を積んでいる事を知っていた。

この様子では三人の女達だけで一週間もしない間に億を超える金を稼ぎ出すことだろうと想像した。

しかし、女達はその身をすり減らし、必死になって好色な変態男の相手をして、大亜門戸会の金庫に莫大な金流れ込むだけであって、結局女達が自分の稼いだ金を手にすることは無いのだ。

剛沢は女達を拘禁している理由を無担保で金を貸しているため、逃走されないよう身柄を押さえているのであって、借金を完済すれば、何時でも大手を振って出て行って良いと言っているが、女達が借金を完済してここから出て行く日は、永久に来ないのでは無いかと感じた。

「この様子では、借金を返し終えるまでには、随分時間がかかりそうですね？」と、黄原が剛沢の表情を確かめるように聞いた。

「ああー、そうなんだよ・・」と、剛沢が顔を曇らせて答えた。

「それだけじゃ無い。いくら売春婦だからと言って、いきなり客の前に素裸で出る訳にもいかないし、着物やドレスを買ってやった・・それから女達の牢屋のベッドも新しい物に換えてやったり、新しい化粧品を揃えたり、それらもみんな女達への新しい借金だ。・・そうそう花電車の授業料も有ったな・・これらを締めて一人当たり約4百万円以上の借金の上積み

だ。この一人2千4百万円の借金を何時返してもらえるのかと思うと夜も眠れないぜ・・・」
と、白々しく答えるのだった。

黄原は知っていた。剛沢が女達の使う売春部屋のあちこちに隠しカメラと隠しマイクを仕掛けて
いることを。

これらの隠しカメラで収めた映像からセックスシーンだけを抜き取り編集すれば、立派な裏
ビデオの出来上がりだ。

闇のルートで売れば高く売れるだろうし、もし客の中に有力者が混じっていれば、それを脅
迫のネタに使用することも出来るだろう・・・

まさに一粒で三度美味しいとは、この事だと思った。

剛沢が得意そうに懐から何枚かの写真の束を取り出して黄原に示した。

そこには変態客に責められる女達の酸鼻な光景が鮮明に映し出されていた。

隠しカメラの映像を静止画にまとめたものだろうと思った。

それらの写真には、上半身を亀甲縛りにされて、えぐり出すように前に突き出した刺青が施
された両乳房を好色な客に揉みしだかれたまま、秘部には野太いバイブを突き立てられる晴
江の様子、ポールダンスのポールに絡み、客に向かって片足を大きく広げて秘奥を開陳する
暁美とソファに座ってブランデーグラスを傾けながらその卑猥なダンスを嫌らしい目で鑑
賞する客の様子、犬のように四つん這いの姿勢で、飛沫を上げて汚物を放出するお竜の様子、
などが鮮明な映像として映し出されていた。

別の写真では二人の男に口と秘部を同時に突き立てられ、奉仕させられているお竜の姿や、
また別の写真では大小のバイブを女陰と菊花に突き立てられ苦悶する暁美の姿。次の写真で
は、大きなクリトリスを根元から糸で縛り上げられ、豆吊りにされた姿で、前方に向かって
高く突き出した陰核を柔らかな筆の穂先で撫で回されたり、バイブを押し付けられて苦悶の
表情をうかべる晴江の姿が映っていた。

更に別の写真では、売春部屋の中に設けられた拷問室の道具を使用され、実際の拷問のよう
な責め苦に、脂汗を浮かべて泣き叫ぶ女達の姿・・・

どの写真にもかつて暴力団の頂上に君臨した女達を相手に、思いの様の暴虐を振るう加虐の
快感に溺れて、呵責無い責め苦を与える続ける愉悦に浸る客の姿と、かつての颯爽とした女
侠客の誇りを失い、従順に残酷な客に対して肉体を提供し、非情な責め苦に脂汗を浮かべて

呻吟する女達の惨めな姿が記録されていた。

剛沢も元目高組のトップに君臨していた女達に変態客に惨たらしく責められる様子を監視カメラを通して当然目撃しており、その時の陰惨な場面が記憶に過ぎるのか、黄原に写真を手渡ししながら、目に妖しげな輝きを秘めるのであった。

ここ数日の間に撮られたと思われる、生々しい光景を写した写真に一通り目を通した黄原は、剛沢に写真を戻した。

目高組の女親分とその娘と壺振りお竜が、大亜門戸会の売春婦に身を落としたことは、闇の世界ではかなり噂が広まっているようである事を黄原は知っていた。

闇の事業で大金を稼ぎ、持て余すほどの金を色欲に注ぎ込む好色な裏世界の紳士達が、この機会にかつての目高組のトップに君臨していた女達に食指を伸ばしているようであった。

これらの男達は、金にあかせて大抵の男女の交接は経験して来ており、更に強い刺激を求めて、一般の性の通念を越えた過激な性の世界に踏み込んでしまった変態男が多いことを黄原は知っていた。

銀子の調教を受け、どの様な変態的欲求にも答えられるよう肉体改造された女達の評判は、実際に女達を責め上げ大満足した男達の口から、この闇世界の男達やそれに繋がる表世界の好色な金満家の間にも瞬く間に拡がることだろう。

そして、なにより最悪なのは、これまでの目高組の暴力を背景とした悪どいやり方により、裏世界の儲けを目高組に横取りされたり、目高組に上前をはねられたりして目高組に恨みを抱いている男達が闇の世界にごまんと居るということだ。

彼らは例え借金をしてでも、この落魄れた元目高組の女達を買い、その恨みを晴らそうとするだろう。

自業自得と云う言葉はあるが、彼女奴らはいままで組がして来たあくどい稼業の報いをその身に受けることになるのだ。

こうして見ていくと、このヤクザの組のトップから娼婦に転落した女達を抱きたいという客は、今後数年間は途絶えることは無いのでは無いかと想像した。

以前は、大亜門戸会に敵対していた目高組の女達が、今や全ての人間性を剥奪され、肉の奴隷にまで叩き落とされ、大亜門戸会の発展のために、集金マシンとなってその身をすり減らして、今この瞬間もせっせと金を稼ぎ出していると思うと皮肉な巡り合わせを感じる黄原であった。

剛沢は敵でも味方でも自分の役に立つ人間は、骨の髄まで使い尽くす男だと云う事を黄原は知っていた。

この女達が使い物にならなくなるまで、即ち、その身を飢えた男達に捧げて、金を得ることが出来なくなる日まで、女達の苦行は続くのだろうと思った。

黄原が屋敷の一郭に新設された女達の売春部屋に、不意に足を向けた理由に関しては、黄原自身でも理解していなかった。

ただ、自分が張り巡らした奸計に嵌り、大きな暴力団組織の頂点から一夜にして最下層の娼婦に叩き落とされた女達の今の様子をこの目で確認して見たいという漠然とした気持ちであつたのだと思った。

丁度客が帰ったばかりのようで、次の客を迎える用意ために、掃除道具やシーツ等を抱えた組の若者が忙しそうに走り回っていた。

黄原の姿を認めて作業の手を休めて挨拶しようとするのを、忙しい仕事の邪魔をしては悪いと、手で制して、最初に晴江の部屋の中に入った。

一步部屋に足を踏み入れると、部屋の中からは、濃厚な男女の愛液の匂いと、排泄物の強烈な臭いが混じった異様な臭気が流れ出して来た。

客を送り出した後、精魂使い果たしたのか、和室の畳の上に敷かれた布団の上で、全裸のままの晴江が、まるで濱に打ち上げられた魚のように白目を剥いて苦しげに口をパクパクさせ、半身の姿勢で布団の上に横たわり、客から与えられた肉体のダメージの余韻なのか右手を前に突き出して虚空を掴む様に蠢かせ、忙しなく胸を上下させながら全身をピクピクと痙攣させていた。

接客の前には優雅に結い上げられていた黒髪も今はおどろに乱れ、何本かの前髪が汗を浮かべた額に張り付いた様子から、如何に激しい交接が行われたのかが伺い知れた。

枕元には、晴江を縛り上げるのに使ったのか、体液を吸って湿った麻縄が蝨局を巻いて投げ置かれ、その周りには大小様々な性具が転がっていた。

それらは、まだ晴江の胎内から流れ出た愛液に塗れて、ヌメヌメと濡れ光っていた。

畳の上には客が飲んだのか酒瓶やグラスが寝^い汚く転がっていた。

「わーっ！臭え！臭え！何て臭えんだ！」

先に部屋に入って清掃作業に取りかかっていた三人の若者が大声を上げた。

開け放たれた襖の奥に、江戸時代の番所の拷問部屋を模した部屋が見えており、黒光りする石を敷き詰めた床の上には、晴江の体内から噴出したものであろう、黄褐色をした大量の泥状の汚物が撒き散らされていた。

遅れて部屋に入っていた、一人の三下がその様子を見て、腹を立てたように大声を上げた。

「この糞女！またウンコを部屋の中に撒き散らしやがって！何遍言えば分かるんだ！掃除する俺たちの身にもなってみろ！犬や猫でも舐ければ、ちゃんとした所ですもんだけ！お前達は全く犬猫以下の人間だけ！」

と、忌々しげに叫ぶと、意識が朦朧としたまま布団に横たわっていた晴江を引きずり起こして、その横顔を思い切り殴打するのであった。

優雅にアップに結い上げられていた長い髪は今はおどろに乱れ、男に殴打される度に激しく左右に揺れた。

かつては歯牙にも掛けなかったような、若造から理不尽な暴力を受けても、逆らう気力も失ったのか、ああ・ご免なさい、ご免なさい、と泣きながら許しを請うのであった。

晴江が横たわったままの布団の端を握ると、思い切り引っ張ったので、全裸のままの晴江がゴロゴロと畳の上に転がり落ち仰向けとなった。

布団を片付けていた元目高組に属していた若者が、晴江の股間の下に位置していた部分がぐっしりを水気を含んでいることに気付き、下卑た笑い声を上げた。

「お前も、昔は偉そうな顔してふんぞり返っていやがったくせに、本当にスケベな女に成り下がったもんだな！そんなに良かったのか？ まあ、お前達は良いよな！今まで俺たちに散々威張り散らした挙げ句、今度は、俺たちをこき使って、自分の撒き散らした糞の掃除までさせやがって！俺達のお陰で跡形もなく綺麗にして貰った部屋の中で、毎度毎度、取っ替え引っ替え、色んな男相手に大好きなセックスをさせて貰っているんだからな！」

と、かつて仕えた女主人に向かって蔑むように大きな声を掛けるのであった。

力の抜けたままグッタリと仰向けに横たわる晴江の両脚の間に自分の脚を差し入れ、太股に足首を絡ませると、こじる様に晴江の股を押し開いた。

男の脚で邪険に股間を押し拡げられても、抵抗する力も気力も失ったのか、男達の目の前に股間を露わに晒す晴江であった。

女体の中心部を隠す黒々とした恥毛は、男女の愛液に塗れたまま艶々と輝いていた。

「ヘッ！盛りの付いた雌犬みたいに股の間をグショグショに濡らしやがってよ！」

男は爪先で大きく開いた股の間を踏み付ける様にグリグリと扱き上げた。

「へへッ！客の残していったモノが溢れ出て来るじゃないかよ？」

柔らかな下腹を足の裏で踏み付けられ、秘孔からは泡の混じった白い愛液がドロッと流れ出ていた。

「全くお前達は幸せ者だぜ！毎日毎晩客に可愛がって貰って天にも昇る様な良い気持ちにさせて貰って、男の精の詰まったスケベ汁を腹一杯飲ませて貰えるんだから！・・・見ろよ！良い歳しやがって肌なんかツルツルスベスベじゃないか？」

「ああっ・・・お願い・・・もう許して・・・」

かつて歯牙にも掛けなかった若造から屈辱の言葉責めを受けながらも、逆らう気力も無く、朦朧とした意識の中でイヤイヤとか弱く首を振り、涙を浮かべて哀願するのであった。

「おっと！いけねえや！和久井先生から言われていた事を忘れる所だったぜ！」

と、男がポケットからビニール袋に入ったビニール製のスポイトを取り出した。

「客が帰る度に腹の中に客の残したモノを採取しておく様に言われていたっけ・・・ほら！股を開くんだよ！」

氣息延々として床の上に倒れ伏す晴江の大腿を蹴り上げた。

まだ意識が朦朧として男に蹴られても呻き声を上げるだけで、股間を開こうとしなかった。

「ほら！早くガバッと開けて言ってんだよ！」

男は勘に障ったように、何度も晴江の尻を蹴り続けた。

朦朧としながらも男の剣幕に怖ず怖ずと股間を開いて行った。

扇の様に男に向かって開いたのを見計らって、晴江の前に陣取った男は乱暴に肉洞の中にスポイトを突き立てた。

晴江の部屋を出て、続けてお竜の部屋に入った。

やはり、男女の愛液の強い臭いと混じり合うようにツーンとするアンモニアの様な臭いが鼻を突いた。

部屋の奥のベッドの上にお竜が仰向けで横たわっていた。

何と、お竜は全裸のまま、上半身を硬く縛られ、ベッドに取り付けられた革ベルトにより両脚は大きく開いた姿勢で固定され、その股の中心部にはパイプを装着された革ベルトが貞操帯のように股間を覆っていた。

お竜も客から散々弄ばれた後で精魂尽き果たしたかのようにグッタリとしていたが、

大きな音を立てて振動するバイブに煽られるように、下腹だけがブルブルと震えていた。

口に嵌められた猿轡がお竜の声を封じていた。

苦しげに身を蠢かす体の周りにも大小の性具が投げ散らかされていた。

「これは、前の客が俺たちにも楽しめと言って残して行って呉れたお土産だな？」

後片付けのため、先に部屋に入っていた二人の若者が、ベッドの上に縛り上げられたお竜を見下ろしながら呟いた。

お竜の股間を責め上げていたバイブを固定していた革ベルトを弛めた。

絶え間なく下腹を責め続けていたバイブを引き抜かれ、お竜が呻き声を上げた。

「へへ・・・随分太いのを入れて貰ってたじゃないか・・・なかなか抜けないぜ！」

肉孔を埋めていた太いバイブを引き抜かれ、ポツカリと開いた膣腔の奥から男の残滓がドロリと流れ出た。

「こうやって股をガバツとおっぴろげていれば精子の採取がやり易いぜ・・・」

男は晴江の時と同じようにスポイトを膣内に挿入して男の残した精液を採取した。

「おい！何で一々こんな事をやらなきゃならないんだ？」

スポイトを操る男にもう一人の男が問い掛けた。

「さあな？後で何か起きた時に証拠とするためだろう・・・」

男は採取した白濁した粘液をサンプル瓶に移しながら応えた。

「それじゃ、仕事も終わった事だし、遠慮無く頂くか？」

歓声を上げると、二人の若者はお竜の裸身に貪りついた。

目の下に隈を作って、疲労仕切った様子のお竜が、新たな若者の攻撃を受けて悲鳴を上げて身を振った。

周囲に転がったバイブを握り締めた男が、お竜の股間を夢中で責め立てた。

客から散々責め立てられ既に何度も気をやって体力を使い果たしていたお竜が新たな責めを加えられて悲痛な叫び声を上げた。

黄原が、部屋に入って来たのに気が付いた、二人の若者は、咄嗟にお竜の体から離れ、バツが悪そうに黄原に向かって挨拶した。

暁美の部屋からは、素肌の上にガウンだけを纏った暁美が二人の若者から両脇を抱えられるように連れ出される所であった。

全身から力が抜け落ちたように、ガックリと体は崩れまともに歩くことも出来ない様子で、顔は青白く、疲労仕切った目の下には隈が出来ていた。

いまだに肉体の疲労が取れないのか、息苦しそうに早い呼吸を続けていた。

口の周りには男の残した放出物が乾いて白い瘡蓋のようになっていた。

両側から曉美を抱き抱える男達が、はだけられたガウンから剥き出しとなった乳房や股間に面白半分指を這わせて悪戯をしていたが、疲労感の極みにある曉美にはそのような悪戯も気が付かないようであった。

曉美の股間に指を突き入れ内部をまさぐっていた若者が「ワー！汚ねえー！」と、叫ぶと慌てて肉洞から指を引き抜いた。

その後からドロリと客の残した白い粘液が流れ出て来た。

若者はさも不潔な物を指にしたように客の精液で汚れた指を曉美の柔らかい下腹に押し付けて何度も拭った。

「さあ！曉美お嬢ちゃん！俺たちと一緒に風呂に入ろうな！」

両側から体を支える若者が嬉しそうに声を上げた。

これから好色な客の餌食になった女達の全身をシャワーで洗い、客が女体に残した付着物を洗い清める事になっているのだった。

疲労困憊してまともに立つ事も出来ない女達の体を介添えの男達が洗うのであったが、その中には女陰を押し開いて、その奥に溜まった男の精を洗い清める作業も含まれていた。

以前は、陰も踏めない程遜って傅いていた女達に対して、凌辱まがいの行為を堂々で行える事に快感を覚えるのであった。

暖かいシャワーを浴びる内に少しずつ意識を取り戻して行く女達であったが、裸体を押しつけ石鹸をまぶした手で陰部をまさぐる男達に抵抗できずにいた。

このように野卑な男達に馴られ尽くし、疲労困憊した女達ではあるが、自分達の牢に連れ戻され、客から与えられたダメージに応じて和久井医師の応急の手当てを受け、少しの休憩と、栄養管理された食事を摂り、一もつとも、この食事の主なる目的は、栄養補給よりも浣腸好きな客を楽しませるための具を腹の中に仕込む事であることは、和久井から聞いているが、一 売春部屋の清掃と整理が終わって次の客を迎える頃には驚く程体力を回復させ、再び変態性を帯びた男達の前に体を投げ出す事になる事を知っていた。

黄原は色々と想像を巡らせながら、客から虐待されて疲弊仕切ったまま運び出される女達の

様子と、忙しそうに清掃作業を続ける若い三下達の様子を、ただボンヤリと眺めていた。

「これは、黄原の兄貴！」

滅多に顔を出さない黄原が、ここに居ることに驚いたように、若者の一人が背後から声を掛けて来た。

「今日も、凄いビデオが撮れましたぜ！どうです、見ていきませんか？」

と、振り返った黄原に揉み手をしながら話し掛けるのであった。

4 3 P

女達が客に体を売るようになって数週間が過ぎていた。

目高組も売春組織を組の中に持っていたので、借金で首の回らなくなった女や組の男達がコマしてきた女に無理やり男を取らせて、組の資金源にして来た訳であるから、晴江達にとっても、金で男に体を売るといふ事がどの様な事か分かっていた積もりではあった。

金で男に体を切り売りする事が、女性にとってどんなに惨めなことか解っていたが、今はじっと堪えて、解放された赤石達幹部連中の働きにより外部から救出されるまでの時を稼ぐしか無いと自分達に言い聞かせていたのであったが、剛沢の企画した売春組織は晴江達の想像を遙かに超えたモノであった。

剛沢が客として晴江達にあてがったのは、金にあかせて女を抱いて来た、経験豊富で当たり前のセックスには飽き飽きして、より刺激の強いセックスを求める常軌を逸した変態性を持った客達ばかりであった。

かつては、哀れな女達の肉体を肉欲を求める男達にあてがい組の利益としていた晴江達が、今やその立場を完全に逆転され、抵抗することも出来ず、自らの肉体を組み敷かれ、色々な嗜虐的欲望を持つ変態客の圧倒的な暴力の前に、休む間もなく、次々と体をまかせて来たのだった。

これらの大金持ちの変態客以外にも、あくどい稼ぎをしようとしていた所を目高組に介入されて『鳶に油揚げを掠られる』格好で、儲けそこなった裏世界の企業家など、目高組に恨みを持つ闇の紳士も多くいて、大金を叩いてまで、争って女達を買い求めた彼らは、無抵抗な女達を呵責無く責め立て、その時の恨みを返そうとするのであった。

このような酷い境遇に墜ちたのも、かつて自分達が組の利益のため無理やり性欲に狂った男達への生け贄として捧げた女達の呪いよるものであろうか？と、云うような心境に陥り涙を流して男達に体を捧げるのであった。

そのような男達の獣欲の生け贄となり、今まで生き延びて来られたのが不思議なような気持ちになるのであった。

いっそのこと、男達に組み敷かれ責め苛まれながら息の根が止まってしまった方がどんなに良いか、苦痛と快感の荒々しい渦の中で発狂して、何も分からなくなってしまった方がどんなに楽かーと、恨めしく思う女達であった。

こうして、客達の求める異常な性欲の生け贄となり、毎回性の拷問とも言えるような強い恥辱と激しい肉体的疲労を味合わせられ続けて来たのだった。

最初の頃は、如何に銀子により調教を受けて娼婦として鍛えられてとは言え、ありきたりの性の快感には飽きた経験豊富な男達の前では、新米娼婦としては、きりきり舞いに男達に責め上げられ、何度も続けざまに男達の前で屈辱の絶頂に昇り詰める惨めな姿を晒す他は無かった。

既に何度も昇り詰め、体力の限界に達している女達に対しても、男達は憐憫を感じて手を弛めるような事は無く、更に獣性を露わにして、性具を手に握り締め、喜々とした表情で、疲弊しきった女に迫るのであった。

如何に目高組当時に自分達が哀れな女の生き血を啜るような稼業をして来た報いとは言え、当時の目高組の娼婦はこんなにも酷い仕打ちは受けなかったろうと思うと、自分達の身に降りかかった女達の呪いが如何に過酷なものであろうかーと、涙で布団を濡らす毎日であった。全身は痺れたように疲れが残り、好色な男達から無残に責め立てられた前後の孔は熱を持ったように痛みを留め、口中には男の放出した生臭い精液の味が何時までも残っているように感じる毎日が続いていた。

そのような過酷な日々の連続であったが、徐々にではあるが、銀子に鍛えられた女の武器を使って男達を先に追い上げ、自分はイッた様に演技をしながら男達に放出させるーという熟達した娼婦のような技術を発揮出来るようになって来たことに驚きを感じるようになって来た。

そして、それと共に何時の間にか、下劣な男達の眼前に秘所を晒し、男のモノを受け入れ醜態を晒す羞恥に苛まれながらも、一方では、痺れるような妖しげな刺激がジワジワと沸き上

がって来て、ゾクゾクと全身を這い回るような快美感にも似た不可思議な感情が芽生え始めていることに気が付き始めていた。

一方的に男に体を捧げ、暴力的に肉体奉仕を強制され、その結果として与えられる苦痛の混じった強烈な肉感に何か快感めいたものを感じ始めていることを意識し始め、驚く女達が居た。

晴江達三人は、ついさっきまで嗜虐の肉欲に狂った男達から責め立てられ続け、やっと牢に連れ戻され暫しの小休止を取っている所であった。

「今日最後の客だ・・・」

何時の間にか牢舎の中に入って来ていた呼び出しの男が、三人に向かって声を掛けた。

今日はこれで最後・・・この客の相手さえ終われば、その後はゆっくり休めると思うと女達はホッと息を吐いた。

「今度の客は3人同時に相手することを求めている・・・」と、呼び出しの三下が、檻の中の女達に声を掛けて三人の檻の鍵を外した。

これまで、女二人で一人の客を相手にするいわゆる3Pや二人で二人の客を同時に相手する4Pの経験は有ったが、三人同時に抱きたいという客は初めてであった。

またも残忍な男達にこの身を蹂躪されるのかと思ったが、逃れられない運命と諦めたように、無言のまま三人は、全裸のままベッドから抜け出し、物憂げにめいめいの檻から出ると、何時ものように監禁室の廊下の端に並んで置かれた、鏡台に向かいお化粧を始めた。

お化粧が終わると、客の前に出るため、それぞれ自分の衣服を身に纏い始めた。

暁美は赤いシルクのチャイナドレスを身に纏い、お竜は白いお召、晴江は黒い留め袖に袖を通した。

この女達の様子を檻の中に置かれたベッドの中から、奈和組長がじっと目で追っていた。

和久井医師の治療の甲斐があって一命を取り留めた奈和組長は、退院して同じ監禁室の中に並ぶ檻の中に閉じ込められていたのだった。

生死を彷徨う長期の危機的状況を脱して、命は取り留めたが和久井医師の予言の通り、脳の一部が破壊され記憶やまともな知能も喪失してしまった様で、全身不随状態になり、体を動かすことはおろか喋ることも出来なくなっていた。

身纏いが終了した女達が、呼び出しの三下に連れられて、監禁室から出て行こうとしていた。

女達は奈和組長の入られた檻の鉄格子を掴んで、「それじゃ、行ってくるからね。」と、寂

しそうな目の色を湛えながらも、口元に精一杯の笑みを浮かべて檻の中の組長に挨拶した。医療用ベッドの背を持ち上げられた状態で身体を起こしたままの組長は、目をきょろきょろと動かし、ただアウアウ・・・と言葉にならない奇声を上げて自分の妻や愛人や娘だった女を見送った。

大亜門戸会の本部が在る建屋の地下の入口から向かって一番奥に設けられた監禁室は中央の廊下を挟んで二部屋ずつ女達を監禁する檻があり、その廊下の一方の端は袋小路となっており女達のドレッサーや衣装が置かれていた。もう一方の端は、これまで女達の肉体改造に使われたおぞましい調教室に通じる鉄格子の扉となっており、もし女達が自分の檻を破って廊下に逃げ出しても、この鉄格子で逃走を防ぐことができるように嚴重なものとなっていた。呼び出しの三下組員が女達をその調教室に通じる鉄格子の扉の所まで連れてくると、外で待ち構えていた組員がガチャガチャと鉄格子の扉の鍵を外した。

外で待ち構えていた組員達が、女達を取り囲んで売春部屋まで連れて行く役目を負っていた。この前のお竜の暴れぶりを知っている男達は、もし女達が再び暴れ出したら自分たちでは相手にならないと緊張しつつ、今はすっかり大人しくなった女を連行していくのであった。

男達に取り囲まれて、地下室を出て、中庭を通り、売春部屋が作られている剛沢組長の屋敷に向かった。

女達は陽が西に傾き始めた空を見上げながら、自分たちがこの空の下を歩けるのは売春部屋に向かう時だけだとしみじみと思った。

「今日は客の数がちょっと多いから、何時もの自分たちの部屋では無く大広間を使う・・・」と、女達を連行しながら、先頭の男が告げた。

女達が連れ込まれたのは、大亜門戸会が組の集会等に使う120畳程の広さを持った和室であった。

まるで温泉ホテルの和風の宴会場の様に、40畳ずつ3つに仕切られた畳部屋は、今はその仕切りを外され、全室通しとなっていた。その端の部屋には一段高く演台が設えられていた。そして、その演台の上にはパンツ一枚穿いただけの裸の男達が太勢腕組みをして待ち構えていたのだった！

今日の客とはこの太勢の男達なのか？と思うと女達の顔が不安そうに曇った。

以前に男二人を同時に相手して、前と後ろから同時に貫かれて責められ、苦痛にのたうったことがあったが、今この無数の男達を同時に相手して、果たして自分の体が持つのかと思うと恐怖がこみ上がって来た。

そして、その裸の男達を良く見ると何時も見知っている大亜門戸会の男達であり、その内のほぼ半数は目高組から大亜門戸会に鞍替えした三下ヤクザであった。

「俺たちは大亜門戸会の杯を受けて大分経つが、元からいる大亜門戸会の舎弟の皆さんとより一層の友誼を結ぼうと、今日お前達の身体を仲立ちとして併せて40人で兄弟の契りを結ぼうと言う寸法さ。」

目高組から寝返り、以前に自分たちの股間を鞭打ったこともある大賀という組員が口を開いた。

「それにしてもウチのボスもケチでさ、身内の組員が抱くのだから、ちょっとくらいは負けてくれても良いのに、しっかり料金を取るから、資金を貯めるのに随分時間が掛かってしまったぜ。少しは組員の福利厚生というやつを考えてくれても良いだろうに・・・」と、大亜門戸会に元から居る組員が、ここまで時間が掛かってしまった事をぼやいた。

「兎に角大枚叩いて来たんだ。今日はたっぷり楽しませて貰うぜ・・・」と、別の組員が舌なめずりをしてほざいた。

「俺たちはもう裸なんだ、早くその無粋な着物を脱いで、綺麗な裸を見せてもらおうか」と、男達が囁し立てた。

全く知らぬ男に身を任せるのではなく、何時もの周りにいる組員に体を売ることに、これまでに感じたことのない別の羞恥を覚えたが、自分たちには客を選ぶ権利は無いと哀しく諦めた。

男達の居並ぶ演台を前にして、女達は諦めて男達の見守る前で、衣服を脱ぎ始めた。

元々営業用の、裸を隠すだけの衣装であるので、暁美はシルクのチャイナドレスの下には何も下着を身に付けておらず、するりとドレスを脱ぎ落とすと、光沢を帯びた裸身が現れた。男達に取っても何時も見慣れた裸身ではあったが、これから自分の欲望をぶつける対象としての女の美しい裸身に、思わずオオッーと歓声が上がった。

白いスリムな体からは想像出来ない豊かな乳房と横に張った腰が男達目を奪った。

晴江とお竜も着物の下は、長襦袢と腰巻きだけで、帯を解き着物を脱いで、長襦袢を脱ぐと腰巻き一つとなった。男達に正面を向けて腰巻きの紐に手を掛けると紐を解き始めた。男達の視線が一点に集められゴクリと生唾を呑み込んだ。腰巻きを下に落とすと、隠す物の無い女性の秘部が現れた。

「今日は腰巻きの下にパンティを履いて無いなんて、感心じゃないか！」と、男達がお竜を揶揄した。

女達が元子分達の前で裸体を晒す羞恥の余り、両手で乳房と股間を隠そうするのを、男達は手を退けてもっと良く見せろと囁し立てた。

男達の声に抗し切れず、おずおずと手を退けて股間を露わにすると、そこに再び生え揃った恥毛を発見して、以前曉美の恥毛を剃ったことがある吉原が「随分伸びましたねー、また私が剃って上げないといけない。」と、言ってみんなを笑わせた。

男達は演台からぞろぞろと降りて来て、全裸となり準備の整った女達を取り囲んだ。

「この女達がまた頭に血が上って暴れ出すと面倒だから、縛り上げてしまおうぜ」と、以前お竜に金的を蹴り潰され塗炭の苦しみを味合わされた植木が、もしかするとお竜達が又暴れ出すかも知れないと心配して声を上げた。

麻縄の束が持ちこまれ、有無を言わず、女達を高手小手に縛り上げた。胸の上下に二巻き、三巻きされた麻縄が女達の豊かな乳房を括り出し、男達の目に一層扇情的に映った。

「今日お前達を抱く資金を作るために随分金を貯めたが、その間に色々欲望を我慢して、ここも随分貯まってしまったぜ・・・」と、自分の股間を指さして笑った。

俺も、俺もだ！と取り囲む男達が笑い声を上げた。

「今日は6回は出さないと、我慢できないぜ！」と、誰かが声を上げると、俺も、俺もだ！と声が上がった。

女達は自分たちを取り囲む40人もの若いヤクザ達から複数の交合を求められて、果たして体が保つかと不安になった。

「お前達の裸を見るだけで今にもここから溢れ出しそうだが、お前達のあそこに突っ込む前に少し抜いておかないと、とても長く愛せそうに無い。」

と、血管を浮かべて隆起する自らの男根をしごきながら男達が迫って来た。

「先ずはお前達三人で得意のレズプレイを演じて俺たちを楽しませて貰おうか！」

以前は反目も在る特殊な関係の女達であったが、今は銀子の調教を通して、伴に手を携え合って生きて行かなければならない貴重な仲間との連帯感を持って、わだかまりを捨てて互いに心の底から愛し合う事が出来る様になっていた女達であった。

後ろ手縛りの不自由な姿勢で、畳の上に膝を着いて上体を寄せ合うと、互いに愛おしそうに頬と頬を擦り会い、舌を延ばして互いの舌先を絡め合った。三人の内の二人が唇を押し付けて舌を絡め合い互いの唾液を嚥下する間、もう一人は二人の頬に交互に自分の頬を押し付けた。

残忍な男達の愛撫と違って互いに労り合う女達はレスボスの愛に没頭する事により過酷な

境遇を忘れようとするかの様に積極的に口を吸い合い、柔らかな乳房を互いに擦り合わせあった。

その艶技を超越して甘美な性感に浸りきる女達を男達は生唾を呑み下してギラギラする眼で眺め続けた。

男達の股間のモノが込み上げる獣欲で隆々と鎌首を擡げていた。

長く濃厚な接吻の後、互いの高まる性感に没我の境地となった女は崩れる様に畳の上に仰向けに横たわり、その身体の上を残りの二人が方や乳房を口唇で愛撫し、もう一人が股間に唇を匍わせた。

股間を愛撫する女が動き易い様になった女は両脚を大きく拡げて協力した。

更に仰向けになった女の上に自分の身体を重ねて、乳首と乳首を擦りつけ合い、秘所と秘所を密着させ互いに愛撫し合った。

溜まらず嬌声を発する女の口にもう一人の女が口唇を重ねた。

これらの三人の女の演技を越えた真に愛し合う女同士の濃厚な艶技に男達の屹立した男根の先端からは先走りの透明の液体が溢れ出て、糸を引いて滴り落ちていた。

とうとう我慢出来なくなった一人の若い男が、訳の分からない大声を発すると、絡み合う女達を力尽くで引き剥がし、畳の上に仰向けに転げさせた。

これに続いて他の男達も歓声を上げて女達に武者ぶり付いた。

男達は畳の上に仰向けに横たわる、それぞれ好みの女を取り囲んで膝を着くと、女達の顔の直ぐ上で自らのモノを激しくしごき始めた。

顔の真上を周囲からグルリと取り巻いて、野蛮な雄の匂いをブンブンと発散させ、卑猥な笑みを喜々として浮かべながら、醜く勃起したモノをしごき続ける男達を不安な目で見詰める女達がいた。

かつて仕えた女親分やこれまで敵対していた相手の組の女の裸身に刺激され、その女達を穢す快感に堪え切れなくなったのか一人のチンピラが突然女達の顔の上に熱いスペルマを放出した。

その異常な光景に刺激される様に、他の男も隆々と屹立する自分の分身に手を添えて益々激しくしごき上げた。

女達が見上げる顔の直ぐ上には男達が輪を作り、一人が放出すると、周りの男達も次々と女

達の顔目掛けて放出し始めた。

女達の目の前には興奮の極みでモリモリと隆起した男根が突き立てられ、大きな蛇の鎌首を間近に見た様な恐怖に目を見開いた瞬間、男の鈴口から白い粘っこい液が噴出し、視界を白く覆った。

眼球に直接熱い精液を浴びせられ、激痛に襲われ目を固く閉ざした。

別の男は、まるで荒々しい男の臭いを女達に嗅がせようとするかの様に、鼻の穴に亀頭の先端を押し当て、鼻腔奥深くまで粘液を注ぎ込んだ。

その瞬間、強烈な牡の臭いが脳味噌を直撃した。

無数の男達から大量の顔面シャワーを浴び、たちまち女達の顔は精液まみれとなり、鼻の穴は精液で塞がり呼吸が出来なくなり、息苦しさを開いた口の中にも次々と精液が流れ込んで来た。夥しい精液で両目の睫毛も糊で張り合わされたようになり、目を開けることも出来なくなっていた。

女達が堪らず悲鳴を上げるのも構わず、男達はかつて影も踏めないような孤高の存在であった女達に対して、顔射でその美しい顔を穢すことにより、これまで心の奥底に秘めて来たコンプレックスを一掃しようとしているかのようであった。

溜まりに溜まった精液を一機に放出して、身軽になった男達は、もはや我慢が出来ないようにグルリと女達を取り囲んだまま、いきなり身体に手を掛けた。

「へへっ！お嬢は子供の頃からバレエで鍛えられているから、こんな風に脚をオッピロがされても痛くないやな？」

二人掛かりで暁美の足首を握ると、思い切り左右に割り開いた。

男達の力の前に脚をグイグイとこじ開けられながら、アアッ！イヤ！と、首を左右に振って悲鳴を上げ続けた。

流石に柔軟な身体であるので、開脚の苦痛は無かったが、男達に秘部を注視される羞恥に身悶えて悲鳴を上げ続けた。

暁美の股間が殆ど180度開脚し、その中心部の構造が取り囲む男達の前に露わとなった。

「へへっ！お嬢のオ███がパッキリ満開に開いたぜ！」

「それにしても綺麗なピンク色じゃないか？」

大きく左右に割り開かれ、隠しようも無く露わになった秘部に男達のギラギラした視線が集中した。

隣では、晴江とお竜の足首を掴んだ男達が、女達の股間を無理矢理押し開いて、悲鳴を上げ

させていた。

「へへっ！大姐の貫禄に負けない見事な割れ口じゃないか！」

「お竜姐さんも立派なビラビラをお持ちだぜ！」

女達の股間の前に陣取った男達が、押し広げられた股間に顔を近付けて叫声を上げた。

「大姐のクリちゃんは相変わらず立派だぜ！毎日変態親父に抓られたり引っ張られたりこねくり回される内にまた一層大きく成ったんじゃないか？」

「今じゃ山下のより大きいんじゃないか？」

「うるせえ！黙れ！」

男達からからかわれた山下が、いまいましてに大きく開脚されむき出しのままとなった晴江の陰核を指先で摘み上げ思い切り捻った。

突然の男の暴力に晴江の口から悲鳴が上がった。

男達からぶっかけられた精液が乾燥して固まり、糊付けされたように目を開ける事が出来なくなっており、目の見えない分、皮膚感覚が敏感となっており、間近から見詰める男達の息が敏感な粘膜にかかるようで羞恥に身悶えた。

男達が両手を伸ばして、芳醇な雌の芳香が立ち昇る花卉を摘むと左右に押し広げ、その中心部に指を差し入れた。

「へへ・・何だかんだ言っても中は、ビショビショじゃないか？」

秘孔に指を突き立て、笑い声を上げながら、暖かい愛液に満たされた内部をまさぐった。

「お前達も本当にスケベな女に成り下がったものだな。男が欲しくて仕方無いんだろ？」

「銀子に調教されて何時も濡れ濡れの身体に改造されたって話じゃないか？」

男達の指摘する様に銀子から施された激烈な女体改造により自分の意志とは無関係にその部分は常に愛液に満たされ何時でも男をスムーズに受け入れられる身体となっていたのだった。

「それじゃ、一番乗りをさせていただきますか・・」

晴江の前に陣取った男が、両手で、押し広げたままの秘所に怒張を押し当てた。

それを合図とするかのように、男達が一斉に女達の股間に硬く熱したモノを押し当て、

前技も無しに、女達の股間を割って肉棒を押し入れて来た。

何時でも何処でも準備無しでも男のモノを受け入れる事が出来る娼婦の身体に改造された三人ではあったが、突然の若い男の猛々しいモノの侵入に悲鳴を上げた。

目も見えぬ状態で、両手を縛り上げられているため抵抗も封じられ、相対する女の事など斟酌する事など無く、ただ自分の獣欲を満たす為に狂ったように腰を振り続ける男達に、ただ悲鳴を上げて哀願を繰り返すだけであったが、組み敷かれ喘ぎながら漏らす哀願の悲鳴は、男達にとって劣情を更に掻き立てるスパイスのような物なのか、更に猛々しく犯し立てるのであった。

「へへ、四十しごろとは云うけど、四十を過ぎた大姐のここは最高に気持ち良いや！そこらのション便臭い若い女とは違うぜ！」

激しく腰を使い晴江の陰裂に音を立ててピストン運動を繰り返すチンピラが感激した声を上げた。

それを聞いていた、暁美に突き立てている男が、「ほんとうか？それじゃ次は、大姐に抜いて貰おう！」と声を上げた。

そして一人が、溜まった精を放出すると、直ぐ次の男が青筋を浮かべて隆起した怒張を突き立て、入れ替わり立ち替わり休む間もなく、無数の男達に蹂躪されるままの女達であった。今となっては、彼らと対峙出来るのは自らの股間の女の武器しか無かった。

彼らは剛沢が云うところの経験の少ない素人であり、孤高の女を抱くことに挿入前から既に激しい興奮を感じているためか、銀子達に鍛えられた肉壺を駆使して、教えられた絞め方を使うだけで、あっさりと感激の声を上げると、女達の胎内に放出して果てた。

一人当たりの時間はこれまで客にした男と比べると驚く程短かったが、人数の多さに閉口した。数え切れないほどの男達が入れ替わり立ち替わり有無を言わず肉褌を割り込んで挿入して来た。

その数の多さに受けて立つ側の、さしもの調教された女の武器も疲労し痺れが襲い始めた。こうして、目を開けることも叶わぬ、暗黒の状態で、女達は次々と男達が自分達の股を押し広げ、怒張を突き立てては思いの丈を放出して行くのを感じていた。

放出し終えた男達は女達の口の中に自分の汚れたモノをねじ込み、口内で清めさせた。

先ほどの顔射により、鼻からの呼吸が出来ない状態で口を塞がれて息苦しさに喘いだ。

女達の巧みな口技に多くの男は口内で再び元気さを取り戻し、隆々とした屹立から口内に激しく放出した。

女達は教えられた通りに、そのネバネバした体液を舌で絡めて呑み込んだが、その量の多さで腹が一杯になるような感じがした。

彼らは女に射精し終わると次の男に代わるというルールが出来ているのか、一人が射精し終

えると、次に控えていた男と交代した。そして最後尾に回った男は、他の男が女体を楽しんでいる間に、若さ故の驚く程早い回復を見せ、短時間の間に二度三度と女に挑み懸かるのであった。

自分の順番を待つ間、男達は自分の怒張を女達の柔らかい乳房や腹に押し当ててしごき上げて自分を満足させていた。

「へへ・・お嬢の巨乳は整形じゃないかって噂があったけど、こりゃ本物だぜ！どうでい？この柔らかい揉み心地は！」

次の順番を待つ間に男が暁美の^{たわ}撓わな乳房をユサユサと揉み立てて感激して声を上げた。

こうして、三人の女と一渡りセックスを堪能し、数度に渡り放出した男達は、次第に落ち着きを取り戻し始めた。

「おい、知っているか？女を買っている間の飲み食いは、女の奢りらしいぞ。」

と、一人の男が言った。

「それなら、俺はビールをジャンジャン飲むぞ！」

と、もう一人の男が嬉しそうに歓声を上げた。

「馬鹿だな、こういう時にはドンペリリヨンというやつを飲むもんだ！」

「ドンペリリヨンじゃなくてドン・ペリニロンだろ！あれ？ドン・ペリニオンだったかな？」

と、別の男が生半可な知ったかぶりの知識を披露した。

女達の前で、調子に乗った男達が景気良く、一本20万円から30万円で客に提供している高価なシャンパンをポンポンと開けて酒盛りを始めた。

「ウーメー！こいつは^{うま}美味いぜ！」これまで高級な酒など飲んだ経験の無いチンピラヤクザが初めて口にする高級シャンパンに歓声を上げた。

感激して瓶ごとラッパ飲みにして噓せ返る若者も現れた。

男達の酒盛りの輪の中で、交合も何順目かに入り、男達も落ち着き始め、最初の頃のように集団で武者ぶり付いて女を責めることは無くなっていた。

殆ど男達は三人の女を交互に相手して、既に5～6回の射精を遂げており、肉体的にそれ以上の交接をする余力は無くなっていた。

未だに元気の有る男が、一対一で女に絡み付くのを囃し立てて見物しながら、卑猥な男女の絡みを肴に、男達は周囲に輪を作ってドッカと腰を下ろし、声高に猥歌をうたったり、卑猥

な掛け声を上げて男女の絡みを続ける男を応援したり、楽しそうに互いに酒を酌み交わしていた。

周囲を取り囲む男達に交接の様子を見せつけている絶倫男は、得意がって色々な体位を女に取らせては、酒に酔った男達からやんやの喝采を受けながら女体を責め立てた。

その艶めかしい白黒ショーに刺激され、興奮して元気を取り戻した別の男が酒盛りの席から立ち上がると、交代するように女の体を食った。

この様にして、男達は交代で休みながらセックスを楽しんだが、女達は休む暇も与えられず連続して責め立てられ続けた。

男達と対峙すべき女の武器も、耐用の限界を超え、痺れきり、今は無感覚となってしまっており、銀子達に教えられた男を果てさせる技術を使うことは最早出来なくなっていた。

いまや劣情に狂った若者達の前に無条件降伏してしまった女達は反撃の能力も失われ、ただ一方的な蹂躪を受け続けていた。

今はただ悲鳴か嬌声か喘ぎ泣きか判らぬ声を出し続ける大人しくなった女を征服の喜びに浸って犯し続けるのであった。

女達に強いられた、肉体の奉仕は、始まってから既に6時間以上が過ぎようとしていた。

「俺は5回出したぞ！」

「俺は6回だ！」

「俺も6回だ、もうしごき上げても、これ以上煙も出ないぞ」

と、これまで体験したことの無い、強い快感に感激した男達が、放出し過ぎて、痛みを覚える睾丸とふらつく腰を摩りながら満足げに声を出した。

長時間に及ぶ男達の暴行の嵐が一通り終わった後、女達は崩れ落ちるように畳の上に横たわり、苦しそうに息を吐いていた。

男達に無理やり捏ね回され摩擦し続けられた肉壁は、熱く熱を帯びたようでジンジンと疼痛を発していた。

最早男達の眼前で晒しものとなった羞恥の部分を隠す気力も失せたように、だらしなく股間を拵げたままで、その開け拵げられたままの肉の扉からは白い粘液が滴っていた。

「へへ・・・子壺の中も膣の中も俺たちのザーメンでパンパンじゃないのか？」

男がだらしなく股間を拵げて仰向けに横たわるお竜の下腹に足を載せるとグイグイと踵で扱き上げた。

男達が指摘するように、足で扱き上げられて、体内から汚濁の液が絞り出されるかのように開き切ったお竜の股間の未だ閉じることを忘れたように開孔したまま赤い内部を晒す肉の孔から白濁した液が溢れ出して来た。

意識も朦朧となり、既に一切の体力も残っていないお竜達は、ただ切なげに眉を歪め、苦しそうに息を吐きながら、男の暴力にじっと耐えているだけであった。

男達に体内の濁液を扱き出された後、一人の組員が酒に酔ってへべれけになりながらフラフラと立ち上がると、

「こいつら、何時も俺たちに自分の垂れ流した糞の後始末をさせやがって！」

と、忌々しげに叫ぶと、氣息延々として畳の上に横たわる晴江の髪を鷲掴みにして、上体を引き起こして、その顔を続けざまに何度も平手打ちした。

「済みません、お許し下さい・・・」

と、元組長の妻は、かつて顎で使っていた三下に逆らう気力も無く、暴力を行使する元の子分に謝り続けるのであった。

「何時も、糞の後始末だけだから、たまにはこいつらが糞を^ひ放り出すところを見てやろうぜ」と、別の男が提案した。

「そうだ！そうだ！浣腸器を持って来い」と男達がわめき立てた。

この様子を、目が見えず、耳で聞くだけの女達は、この大勢の男達から寄って集って浣腸され、衆人環視の中で醜態を晒すことになるのかと、半ば朦朧とする意識の中で悲痛な面持ちで聞いていた。

銀子達により、大きな段ボール箱に入った浣腸が持ちこまれた。

紙箱の中には、グリセリン浣腸液がイチジクのような形のビニールチューブに入った、手で握り潰して使用するタイプの浣腸が入っていた。

「これは、いいや！一人二個ずつ以上有りそうだな」と男達が歓声を上げた。

男達は両手にビニールチューブに入った浣腸を握り締めた。

「あなた達、これから酒の余興で浣腸責めに合うんだって？」と、男達に責め苛まれて身動きも出来ないほど疲弊した女達に銀子が声を掛けた。

そして、「私も見て行って良い？」と、男達に同意を求めた。

男達もこの美貌の、そして冷酷性を持った若い女の飛び入りを歓迎した。

同性故の残酷さを秘めた銀子が立ち去らずそのまま残ることに、晴江達は不気味な予感を感じた。

女達は、相変わらず後ろ手に縛り上げられたままであったので、顔と胸を畳に押し付けて、上半身で体を支え、膝を立てて尻を高く上に突き上げる屈辱的な姿勢を取らされた。

「ほら！お客様からお尻の穴に浣腸を突き立てて貰い易いように、もっと脚を立てて、尻を上げるのよ！」と、銀子が後ろ手に縛られた不自由な体勢の女達に、もっと尻を高く上げるように叱咤した。

「そのでかいケツを上げるだけじゃなく、脚をパッキリと思切り開いて、割れ目とケツの穴をもっと良く見せるんだ！」と、男達が揶揄した。

男達の熱い視線を、秘部に感じて、アア・イヤ・とお竜が、堪らず小さな声を出した。

「へへ、アアン、イヤン・だってよ！お竜！お前もダイナマイトを腹に巻いて殴り込みを掛けてきた時は、どんだけ恐ろしい女かと思ったが、随分お淑やかな女になったじゃないか？」と、お竜の眩きを聞いた男が、お竜をからかい平手で尻をピシャリと打った。

男達は、横一列に並んだ、女達の尻を舌なめずりしながら眺めた。

そこには、歳の順に晴江、お竜、暁美の艶めかしい尻が男達の方を向けて並んでいた。

こうして見ると歳の差による、女体の一特に秘部の変遷が良く判ると男達は感心してそれぞれ女の女の一部を見比べた。

全身に刺青を入れた晴江の体は双臀も刺青で埋め尽くされていたが、女体の中心部と肛門の周辺は、当然刺青は無く、白く女の地肌を残していた。

そしてその白い素肌の中心に薄い董色の菊花が蠱惑的に一輪咲いていた。

お竜と暁美の尻には刺青は無くボリュームのある白く抜けるような女の尻を晒していた。

お竜の尻は、いま女体の真っ盛りを迎えた、成熟した柔らかさが立ち込め、暁美の尻は、豊かではあるが、これから磨きが掛けられ熟して行く蕾のような固さのようなものが感じられた。

三人の女達は暴力行使者の男達に向けて尻を高く上げ、秘部を晒しながら耐え難い屈辱にブルブルと尻を蠢かせながら恥を忍んでいた。

この後、凄まじい陵辱に晒されることになる三人の菊の蕾は屈辱にフルフルと震えているようにも恐怖に怯えて震えているようにも男達の目に映った。

そして、菊の蕾の直ぐ下の桃の花の花弁は長時間に及んだ陵辱により、無残に腫れ上がり、その割れ目からは胎内に注ぎ込まれた大量の精液が、未だにダラダラと太腿を伝って溢れ出

ていた。

この様子を、隠しカメラを通じて、別室で剛沢達が眺めていた。

ズームアップして、女達の剥き出しの秘所をアップにして、白い秘部の中心に咲いた菊の花弁のような部分を見詰めながら、

「アメリカのポルノ写真で見たことがあるが、アヌスの周囲に円周状に刺青をした女がいたが、彼女奴^{あいつら}に入れるのも悪くないな・・・扇情的な眺めになって変態客も喜ぶだろう・・・勿論、刺青の費用は彼女奴持ちだ・・・」

と、薄い粘膜で覆われただけの敏感な秘所の周囲に針を立てられる時、女達はどんな羞恥と苦痛に身を振るのだろうと、その時の様を想像して、ニンマリと笑みを浮かべた。

男達は、手にした浣腸のビニールの嘴管を女達の肛門にズブッと突き通すと、一杯ビニールの容器を握り潰した。

その瞬間ヒンヤリとしたグリセリン液が直腸内に流れ込み、女達がウッと声を上げ尻をビックと痙攣させた。

何時もの変態性を持った客から受ける、太いガラス浣腸器による浣腸よりは嘴管の直径も小さいので肛門を突き立てる苦痛は無く、一度の量も少ないが、次から次と40人の男達から一通り注入をされる間に、1リットル以上のグリセリン液が腸内に注ぎ込まれることになる。少ない量でも強い便意を誘発するように調合されている、濃度の濃いグリセリン液を大量に注ぎ込まれて、大腸内をグリセリン液が搔き筆った。

嗜虐者達に向かって尻を高く突き上げ、肛門を向ける屈辱感と次々と注ぎ込まれる高濃度の浣腸液の苦痛に女達は、全身が蒼白となり冷たい汗を浮かべた額には眉根をグッと寄せ、唇を噛みしめ、尻をブルブルと震わせて堪えていた。

遂に、晴江が下腹を襲う激痛に堪り兼ねて、

「殺して！いっそ一思いに殺して！」と、悲痛な声で泣き叫んだ。

「馬鹿野郎！俺たちは高い金を出してお前達を買ったんだ！俺たちが満足する前に簡単に殺せるか！」

と、女達の苦悶にも憐憫の感情を抱くことなく、苦痛に身悶える女達を面白そうに見詰めながら、残酷な笑みを浮かべて冷たく言い放った。

高濃度のグリセリン溶液が、腸壁に強烈な痙攣を誘発し、その激烈な苦痛に女達は全身を蒼

白にして脂汗を浮かべながら、ぶるぶる体を震わせていた。

男達全員による注入が終わった頃には、女達の崩壊は間近に迫り、一刻の猶予も無いことが見て取れた。

「困ったな、このまま畳の上にぶちまける訳にもいかないし・・・」

組員を集めた集会に使用する目的で特別に作られた大広間を汚物で汚せば、剛沢から怒られることは目に見えており、目前に迫った放出までの間におまるを用意する時間も無く、男達が困った顔を見せた。

「あの上でさせれば良いじゃない？」と、銀子が晴江達の脱いだままに置き去りにされた衣装を指さした。

成る程、良い考えだと！と男達は、畳の上に衣類を積み重ね、その上に女達を連れて来た。突き上げるような激烈な便意に苛まれ、理性を完全に失っていた女達は、自分たちが何の上に足を載せているか理解する余裕も無くなっていた。

自分たちの脱いだ衣装の上に追い上げられた三人の女達は、男達に命じられるままに、互いに背中を接するようして同時に腰を下げた。

「お客さんからよく見えるように、脚を思い切り広げるのよ！」と、銀子が声をかけた。

最早一刻も早くこの内臓を搔き毟るような苦痛から逃れたい一心の女達は、羞恥心もかなぐり捨て、躊躇する余裕も無く、銀子に命じられるままに、腰を落としたまま脚を大きく広げ、正面から見つめる男達に惜しげもなく秘所を開陳した。

女達の顔面は、蒼白となり、カチカチと歯を鳴らし、ぶるぶる体を震わせながら、互いに背中を寄せ合い、互いに励まし合うかのように後ろ手に縛られた手で互いの冷たい汗に濡れた手を握り締め合った。

周囲を取り巻く男達は、女達がいよいよさらけ出す醜態図を見逃すまいと、頭を低くして見守った。

「三人仲良く息を合わせて同時に出すのよ！」

銀子の言葉が、苦痛を通り越して朦朧とする三人の女の頭の中に響いた。

互いに握り締め合う掌の力が一瞬強くなり、女達は互いの崩壊の瞬間が来たことを悟った。

「さあ、初めて良いわよ。」と、銀子が囁くように言ったのを崩壊の合図としたかのように、ビビッと引き裂くような音を尻穴から発して、女達は一斉に茶褐色の汚濁の液の放水を始めた。

周囲を取り巻く男達から歓声が巻き起こった。

腸内に大量に注ぎ込まれたグリセリン液を土砂降りの雨の様に放出したのを皮切りとして、大腸を駆け巡る激しい痙攣は、幾度も大きな破裂音を立てて、まるで火山の大噴火の様に茶褐色の便を激しく噴出させた。その度に男達は奇声を発した。

三人の女が腰を下げた中心には、いつの間にか、黒々とした大便の山が築き上げられていた。

「どうした？もうお終いか？」

破裂音が止み、噴出の止まった女達を見ながら、男達が聞いた。

「ああー、まだ出ます・・・」と、すすり泣きしながらイヤイヤをするように首を振って女達が答えた。

当初の濃厚グリセリン液に誘発された激しい発作を伴った強烈な排泄は終わったが、一度始まった大腸全体に及ぶ強い蠕動運動は、大腸の内容物を全部排出仕切るまで、沈静を迎えることは無く、少し間をおいてから再び激しい大腸の発作が始まり、肛門を割ってブリブリと大量の黄褐色の軟便を排泄し始めた。

羞恥とか理性とかの意識を完全に掻き消していた最初の頃の激しい苦痛は治まり、代わりに自意識が少しずつ蘇ると共に、「ああー、恥ずかしい・・・」と、女達は自分の意志では、止めることの出来ない醜態図を野卑な男達の目に晒し続けている自分達の姿に激しい羞恥を感じて涙を流しながら身悶えた。

いまだに前の穴からは激しかった愛欲図の名残である白くネバネバした精液を滴らせながら、このいつ果てるとも無く大量の排便を続ける女達を、男達は声も無くただ目を丸くして眺め続けた・・・

長時間に渡って大腸を内部から掻き筆っていたグリセリン液は腸内の汚物を全て放出した後も激痛を留め、空虚な腸内から汚物を絞り出そうとするかの様に肛口がパクパクと開いたり閉じたりしていた。

これまで自分達を苦しめていた体内の汚物を全て放出し終えた女達は、その直後に意識を喪失したように俯せに畳の上に打ち伏してしまった。

茶褐色の汚濁の水に汚れた股間を閉じるだけの意識も失った女達を取り囲んで男達は、

「全く此奴ら糞まみれじゃないか！」

「アー、臭せえ、臭せえ、なんて臭せえんだ！」

と、汚物にまみれた女達に嘲りの笑いを投げ付けるのであった。

「あーっ！やっぱり畳に染みを作っちゃまいやがって！やっぱり畳を替えなくちゃしょうがないな？」

「まあ、俺たちの発射した精液と女達の漏らした女汁で畳はベチャベチャネバネバだったからどのみち畳を取り替えなければならなかったがな・・・」

女達の衣装の上には三人分の排泄物が池の様に溜まっていたが、そこから流れ出した汚水が畳の上に広がっていた。

「折角畳替えするなら、その前にやるか？」

と、一人の男が隣の男達に目配せした。

「へへ、お前達綺麗にしてやるぜ・・・」

男達は意識を失ったまま俯せに横たわる女達の身体に手を掛けて、仰向けの姿勢にした。

「そら、今シャワーを浴びさせてやるからな・・・」

と男達は今は力を失ってダラリとした肉茎に手を添えると、熱い小水を横たわる女達の上に注ぎ始めた。

「へへ、綺麗になって来たじゃないか？」

瘡蓋の様に瞼を塞いでいた、糊のように厚く固まっていた男達の精液の膜が黄色い小水により洗い流されていった。

「そら、良く味わって飲むんだぞ！」

と、息苦しさに半開きになった唇を狙って口内に流し込む男達もいた。

朦朧とする意識の中で、息苦しさに反射的に女達が咳き込んだ。

「おれは、股の間にこびり付いた糞を洗い流してやるぜ！」

と、股間に狙いを定めて小便を撒き散らす男達もいた。

こうして、男達に取り囲まれて、アルコール臭い黄色の汚水を何時までも浴びせ続けられる女達がいた。

「良いビデオが撮れた。これは高く売れるだろう・・・」

と、隠しカメラで最初から最後まで隠し撮りをしていた剛沢がモニター画面を見ながら満足げに肯いた。

これで、女達を仲立ちとして兄弟の契りを結べたと40人の男達は満足した高笑いをしながら大広間を立ち去った。

後には、後ろ手に縛られたままの女達が俯せのまま畳の上に残されていた。

周囲には握りつぶされた浣腸の殻や、高価なシャンパンや高級スコッチウイスキーなどの洋酒の空き瓶やグラスが転がっていた。

男達の放出した精液が乾燥して、畳の彼方此方に染みを作り、男女の身体から放出された汚物が池の様になっていた。

三人の様子を確認に来た剛沢達が、廊下から開け放たれたままの広間の様子を眺めた。

広い和室ではあったが、異様な臭いが充満していた。

畳の上に伏したまま、男達から受けた言語に絶する陵辱の余韻で疲れ果て、死んだ様に動かないでいる女達に向かって剛沢が怒鳴った。

「お前達は、馬鹿じゃ無いのか！？折角買ってやった高い衣装の上に糞を垂れるなんて！もう、これは使い物にならないから捨てるしか無いな！また新しい衣装の買い直しだ！また借金の積み増しだぞ！お前達は借金を返すどころか、どんどん借金が増えていってるんだぞ！何時になったら全額返済してくれるんだ！」

と、肉体的にも精神的にも疲労で身動きも出来ない女達に凄むのであった。

大親分からの電話

「はい、剛沢です・・・」

子分から取り次がれた電話に剛沢が出た時、剛沢の顔から見る見る血の気が引いていく様子が、周りを取り巻く子分達の目に入った。

はい！はい！と直立不動で相手の話意識を集中し、受話器を握り締めたまま巨体の腰を折り、頭を何度も下げたり、油汗を拭きながら「宜しくお願いします！」と言ったり、普段の自信に満ちた剛沢からは、考えられ無いほど狼狽した様子を示していた。

受話器を下ろして、ホッと溜息を吐くと、「大変だ！村崎会長が来る」と、傍に立って心配そうに剛沢の挙動を見詰めていた黄原に、ポツリと告げた。

村崎会長とは日本有数の規模を誇る暴力団村崎會の会長であり、この村崎會の下には、日本各地を根城とする有力な暴力団や団体が幾つも連なっていた。

いわば各地区の暴力団を統率する暴力団のボスの中のボスであり、大亜門戸会に叩き潰され

るまで、目高組も村崎會の傘下の組織として稼ぎを上納していたのだった。

一方、大亜門戸会はこれまで、どこの大きな組織の親分の杯も受けず、自らの下部組織を持つことも無く独立した組織であったので、今回目高組を潰して幾人かのチンピラを配下に加えたといっても組織の人数は知れたものであり、村崎會が総力を挙げてかかれば、如何に剛沢や黄原が計略を巡らせても、多勢に無勢でまともに対抗し得ないことは明らかであった。それで、目高組のシマを奪った後、剛沢は様々な懐柔策を村崎親分に計ったり、目高組に代わって、村崎會の杯を受けることが出来るよう、八方に手を尽くして村崎親分に取り入ろうと工作していたのであった。

しかし当然、村崎會の会員組織の中には古くから目高組と誼を結び、目高組に同情する親分も多く、村崎会長まで話を通せず難航していた所であった。

大亜門戸会が村崎會の傘下に収まることに成功すれば、大きな組織の後ろ盾を得て、将来に何の不安も無くなることになる。

逆に、村崎會が目高組との従来誼を重視して、大亜門戸会に総力を上げて闘いを挑んできたら、全く勝算は無かった。

村崎會傘下の目高組を滅ぼした村崎會傘下の目高組を滅ぼした大亜門戸会が目高組の後釜に座るなど、誰の目にも余りにも虫の良い話と思われた。が目高組の後釜に座るなど、誰の目にも余りにも虫の良い話と思われた。

「兎に角、村崎親分がわざわざお出ましに成るって云うんだ！失礼が有っちゃならねー！」

と、黄原が組員を指揮して、迎え入れるための準備を次々と指示した。

黄原には密かに勝算があった。

誰から見ても不可能な大亜門戸会の村崎會加入と云う手品をやったのけようとするのだ。

「手品のタネはあの女達だ。」

黄原は一人呟くとニヤリと片頬を歪めた。

どんな固い男でも現金を握らせて女を抱かせれば、こちらに靡くものだ一と、考えた。

「問題はいくら金を渡してどんな女を抱かせるかだが・・・」

普通なら大親分がわざわざ自分からこちらに来ることは無いだろうー

どのような結論を出すつもりでも、剛沢を自分の元に呼び付けるはずだー

それが、自分の方からこちらに来ると云うことは、最近娼婦に身を落とした3人の女の噂が

耳に入って、興味を感じて、こちらに来る気になったのでは？と、黄原は村崎会長の行動を分析した。

類い希な統率力により一代で日本有数の組織を作り上げた男であるが、同時に部類の女好きであることもこの世界では知れ渡っていた。

もしも身を滅ぼすことがあったら、それは女が原因だろうーと、密かに噂されていた。

事実、数年前、村崎親分が目高組を訪問した時、ネットリとした嫌らしい目付きで晴江やお竜をジッと見つめていた事を思い出した。

それなら、女達を気が済むまで抱かせて、お土産を持たせて、村崎親分の歓心を買えば、懸案の村崎会傘下への加入の問題も一気に片が付くのではないか？

今まで、目高組の女達には、変態趣味を持つ男達を相手に身を磨り減らすように働いて貰って、大亜門戸会も散々稼がせて貰って来たが、今また目高組の頂点に立っていた女達を使って懸案が一機に解決されるなら、こんな笑いの止まらないような話は無いーと、心の中で、皮肉な可笑しさが込み上げて来るのであった。

ただし、晴江姐さんも、お竜も村崎親分とは古くからの顔馴染みだ。女達に泣き付かれたら村崎親分も敵対する側に回る可能性はあるーと、心配の種は在るが、兎に角女達を使って、好色な村崎親分を満足させることだ！ーと、決心した。

「女達の予約を一週間全てキャンセルしろ！予約客達には女達が流感に罹ったとでも言い訳しておけ！」

と、続けて子分に指示を出した。

こうして、数日に渡って黄原が先頭に立って皆に指示を出しながら慌ただしく準備を整える内に、その日の朝を迎えた。

目高組の女達を押し込めた牢舎にドヤドヤと大亜門戸会の三下達が笑いさざめきながら入って来た。

その内の半数以上は目高組から大亜門戸会に乗り換えた男達であった。

男達に混じって銀子の姿や最初に目高組を裏切ったサブの姿や、以前に暁美の下の毛を剃り上げたことのある吉原の姿も在った。

ガチャガチャと鍵を外して、檻の扉を開けると、数人の男達と共にサブが晴江の檻の中に入って来た。

晴江はこの狡猾で底知れぬ残忍性を秘めた男を恐れる様にベッドに横たわったまま、一切の

着物を身に着けていない身体を布団に埋め、布団の端を固く握りしめた。

男達は怯えた表情を浮かべる晴江の事を意に介せず、必死に身体に巻き付けようとする布団を力尽くで奪い取った。

ヒュ！と悲鳴が上がって、男達を取り囲むベッドの上に一糸纏わぬ晴江の姿が在った。

身体全体に彫り物を入れ、男勝りの威勢を誇った女が、怯えた表情で、両手を胸の前で交差させ股間を固く閉じ、男達の淫靡な目を避ける様にベッドに横たわったまま身体を海老の様に丸める無力な女の姿に男達が魅入った。

「ボスの命令だ。今日はお下の毛を剃らせて貰いますよ・・・」

薄っぺらい唇に淫猥な笑みを浮かべ、剃毛の道具を手にしながらか言った。

周囲を取り囲む男達は、元の子分の手で大事な所の毛を筆り取られることになる哀れな女親分の晒す淫靡で滑稽な姿を期待して顔面に喜色を浮かべ、男達の視線から股間を隠し固く閉じ合わせた両脚を掴むと、横向きに寝ていた晴江の身体を仰向けの姿勢にして、そのまま力を込めて大きく股間を開いていった。

大勢の男達の手で股を引き裂く様に大開きに上げられ、秘所を露わにさせられる羞恥に小さく悲鳴を上げながら身を振ったが、これまで幾度と無くこれらの男達の獣欲の前に屈っして来た晴江には最早抵抗する気力も失われており、男達の腕力の前に易々と開帳されていくのであった。

左右から晴江の足を掴んで下半身を持ち上げている内に、別の男が腰の下にビニールのシートを敷いた。

男達から寄って集って股間を大きく上げさせられ、まるで赤ん坊がオシメを代えられる時の様な姿勢を取らされる惨めさに晴江は両手で顔を覆って啜り泣きを始めた。

「これは、これは、凄まじい格好ですね？大姐・・・」

サブがベッドの上に敷かれたビニールシートの上に剃毛の道具を並べながら、両股を大きく左右に押し開かれ隠しようも無く秘部を晒している目の前の晴江に蔑む様に声を掛けた。

「組に居た時には、大姐の虫の居所が悪い時には、よく腹立ち紛れの憂さ晴らしに足蹴にされたモノですよ・・・それが今では、その両脚を蛙みたいにオッ^{ビロ}上げて、足蹴にしていた子分達に隠して置いた奥の奥まで見せて下さるんですからね・・・」

手にした陶器の泡立て器の中で微温湯に投入した粉石鹼をブラシで良く掻き回しながら、惨めな晴江の心を更に掻き筆る様に声を掛けた。

「ああ・・・もう、おっしゃらないで・・・あの時のことは謝ります！だからもう晴江に酷いこ

とをしないで！」

羞恥に両手で顔面を覆い、啜り泣きしながら訴えた。

昔は男勝りの気っ風の良い啖呵を切っていた口から、女っぽい言葉が出る様になったものと、石鹸を泡立てながら、皮肉な笑みを浮かべた。

「それにしても、暫く見ない内にこんなにボーボーと毛を生やして！まるでお不動様の背中の火炎みたいじゃないですか？女だてらにこんなみっともないお下の毛を晒して、高い金を払って買って貰うお客様に恥ずかしく無いですか？」

毛質が固くて縮れた晴江の陰毛を熱い蒸しタオルで蒸しながらからかった。

イヤ、イヤと、サブの言葉廻りに両手で顔を隠しながらナヨナヨと顔を振った。

「鉄火姐御のお竜姐さんの事だからもっと太くて固い毛をしてらっしゃるんじゃないかと思ってきましたが、どうしてどうして、柔らかくてしっとりした艶のあるお毛毛をしてらっしゃるじゃありませんか？このコンモリとした繁みを剃り落としてパイパンにしてしまうなんて惜しい様な気がしますねえ・・・」と、隣の檻からお竜の剃毛を担当する吉原の声が聞こえて来て、

「どうです？お竜姐さんだって暁美お嬢だって女らしいお淑やかなお毛毛をしているのに、こんなみっともないボサボサの毛を生やしているのは大姐だけですぜ・・・さっさと剃り上げて童女みたいにしてしまった方が女ぷりが上がるってもんですぜ！」

と、笑いながら元の親分の女房に言葉廻りを続けるのであった。

蒸し上げていたタオルを取り去り、改めて亀裂を覆っている陰毛にたつぷりとシャボンをブラシで塗り付けた。ブラシの毛先が股間の繁茂を引き吊り、鋭敏な神経を散りばめた柔肉の上を上下する度に晴江の喉がヒッと鳴った。

黒々としていた股間の春草が石鹸の泡で覆われたことを確認すると、右手にさっとカミソリを構えて、左右で両脚を抱える男達のしっかり押さえていると、目で合図を送った。

カミソリの刃先を下腹に押し当て、スッと引いた。

その瞬間晴江は再びヒィと喉を鳴らした。

晴江の狼狽も無視して、次々とカミソリの刃を押し当てると女肉に沿って滑らかに滑らせて行った。

カミソリの刃が通った跡には、黒々とした毛が塗り取られ、白い地肌が露出していった。

隣の檻からは吉原に剃毛されるお竜の啜り泣きの声と下卑た男達のさざめき笑い声が聞

こえていた。

向かい側の檻に入れられた暁美が両手で鉄格子を握り締め涙を浮かべながら、男達からまるでお産をする時の様に股間を拡げさせられて、剃毛されていく母とお竜の様子を見ていた。

「へへ・・・見えて来やしたぜ・・・何度見ても大姐のクリは大きいや・・・」

周囲を覆っていた剛毛を剥ぎ取られ、すっかり露出した陰核をカミソリの峰でグリグリとこね上げながら、薄ら笑いを浮かべた。

神経の集中する敏感な部分を鋼の板でいたぶられる苦痛に悲鳴が上がった。

前の部分をすっかり剃り終わり、左右から両脚を抱え込む男達に、晴江の身体を俯せにして尻をサブの方に向けて擡げさせた姿勢で両脚を固定する様に指示した。

俯せで両足を立てた姿勢で尻をサブの方に向けているため、柔らかな曲線を描く臀部の二つの秘孔がカミソリを手にするサブの目に在り在りと映った。

かつては歯牙にも掛けなかった使い走りの三下に、そして密かに目高組を裏切り、組を崩壊させる計画に荷担した薄汚い裏切り者に自分の恥ずかしい秘部を直視される羞恥と屈辱感に、顔をシーツに押し当てたまますり泣きを続けていた。

「まったく！大姐ときたら、みっともない縮れ毛をケツ穴の周りにもボーボーと生やして！お客にそんな物を見せて恥ずかしく無いんですかい？それともそんな物を見せびらかした方が、スケベ親父が喜ぶだろうーって、魂胆ですかい？」

息が掛かる程間近に顔を寄せられて見つめながら、卑猥な揶揄を受け続けるのであった。

「電動のボディシェーバーを置いて行きやすから、これからは自分で綺麗にするんでやすよ・・・もっともビューティーシェーバーの振動が良いからって、変な事に使うんじゃないやしませんよ！」と周囲の毛をカミソリの刃先で剃りながら笑い声を上げた。

両側で腰を支える男たちに、剃り良いように尻タブを大きく広げるように指示した。

左右に陣取った男達も喜々とした表情を浮かべ、弾力ある臀肉に指を埋め込ませ左右に押し開いた。

男たちの指により、秘裂から肛門にかけての秘部があからさまにさらけ出され、後門の周囲の皺も伸ばされて、その中心のセピア色した窪みが在り在りと目に映し出された。

かつては目高組に籍を置き、男の様な気っ風の良い晴江の気性を熟知していた男達は、柔らかく丸みを帯びた尻の形に見惚れ、その押し開かれた中心に佇む野菊の様な可憐な蕾とその僅か下に開花する秘肉の虚ろを交互に見比べて、まるで腫れ物に触る様に畏怖して仕えてい

た大姐もただの女に過ぎなかった事を改めて認識するのであった。

卑劣な裏切り者に、その羞恥の穴を直視される羞恥心からか、二つの孔口がヒクヒクと痙攣していた。

サブは、まるで自分を誘うように蠢く、その蠱惑的な放射状の皺を寄せる秘孔を魅入られたように見つめて、

「へへ・・・大姐は今まで此処に何人の男のモノをぶち込まれたんでやすかい？」と、石鹸を含ませたブラシの先でその部分を撫でながら聞いた。

「その割には切れた様子も無いし、色も形も綺麗なままで、ましてや脱肛にもなって無いし、余程銀子姐さんの肉体改造が良かったんですね？」と、言うとき中指をズブリとその中心に埋め立てた。

突然サブの指の侵入を受けて晴江は、ひい！と悲鳴を上げて腰を振った。

「大姐のケツの穴の中に指を入れるのは初めてでやすが、暖かくて気持ち良いもんですね！それにこの締め付け具合はどうだ！」

突き立てた指を深く差し入れたり浅く引き抜いたりしながら指先でイヤらしく内部をまさぐり元の親分の妻に屈辱の涙を流させ続けた。

「へへ・・・大姐が熱演するビデオを見せてもあつた事がありますよ。ここに玩具を入れて貰ったり男のモノを咥え込んでヨガリ声を上げたり、浣腸されてウンコを嘔き出したり！全く、忙しいケツの穴だ！」

器用に指先を操作して晴江の腸内をまさぐりながら、下劣な言葉で罵り続けるのであった。裏切り者の子分から秘孔を弄ばれる羞恥にその前に位置するもう一つの秘孔も妖しく収縮し嗜虐者の劣情を煽り立てた。

晴江は、卑劣な裏切り者に自分の体の内側からこね回されても、屈辱感に歯ざしりしながら涙を流し続けるしか無かった。

「ほら！後がつかえているんだから、何時までも遊んでいるんじゃないわよ！」

檻の外から銀子が元の親分の妻に悪さをするサブに声を掛けた。

「へい！分かりやした！」と、銀子にたしなめられたサブは渋々指を抜くと、肛門周りの剃毛に取りかかった。

「女のここの毛は博打好きの男の人にとって良いお守りになるんだって？」

と、銀子の問い掛けに同行した男達が肯いた。

「男の人って変な物を欲しがるとかね？良いわ、三人から剃り上げた物はお土産に配るから捨てずに残しておいてね。」

村崎會の幹部達へのお土産として、剃り上げた三人の下の毛を渡すという滑稽な思い付きに笑いをかみ殺しながら指示する銀子の命令に従って、男達は剃り落とした縮れ毛を少しずつ指先で摘み上げ、洗面器の中で丁寧に水洗いして付着した石鹸を濯ぎ、少しずつキッチンペーパーの上に並べて乾かした。

そして、水気を取った陰毛を指先で摘み上げると、嬉しそうにそれぞれの名前を大書した透明のビニール袋に次々と収めていった。

その時、黄原が忙しなさそうに牢舎の中に入って来て中央の通路に立って指示をする銀子に、今日はこれを着せるんだーと言って、手にした大きな紙バッグを手渡した。

紙の手提げ袋の中を見た銀子が、ニヤッと笑みを浮かべた。

「俺はこれから準備があるから、直ぐ行かなければならないが、衣装を着せる前に仕込んでおく事を忘れるんじゃないぞ！」と、慌ただしく立ち去りながら銀子の方を振り向いて言った。

「分かっているわよ！」と、そそくさと牢舎の外に消える黄原に一言応えると袋の中をゴソゴソと掻き回した。

目高組の女達は、ここ数日大亜門戸会の中が異様な緊張感に包まれ、男達が忙しそうに動き回っている様子を感じていたが、晴江達に知られ無いうように厳重な箝口令が敷かれていたのも、まさか村崎親分が此処に来る事など知る由も無かった・・・